

## 8.9 動物



8.9 動物

8.9.1 調査

8.9.1.1 調査方法

(1) 調査項目

動物の調査項目は、表 8.9.1 に示すとおりである。

表 8.9.1 動物の調査項目

調査項目		文献その他の資料調査	現地調査
脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況	哺乳類	○	○
	鳥類	○	○ (猛禽類、フクロウを含む。)
	昆虫類	○	○
	両生類	○	○
	爬虫類	○	○
	魚類	○	○
	底生動物	○	○
	クモ類	○	○
	陸産貝類	(貝類として実施)	○
動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況等	哺乳類	○	○
	鳥類	○	○ (猛禽類、フクロウを含む。)
	昆虫類	○	○
	両生類	○	○
	爬虫類	○	○
	魚類	○	○
	底生動物	○	○
	クモ類	○	○
	陸産貝類	(貝類として実施)	○
注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況		○	○
代償措置を検討する場合における対象となる動物の特性や現生息地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況		○	○

(2) 調査地域

調査地域は、動物の生息の特性を踏まえて、重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300m の範囲を基本とした。なお、行動範囲の広い種については生態的特性を考慮し、適切な調査地域を設定した。

(3) 調査方法

① 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況

a) 文献その他の資料調査

対象事業実施区域及びその周囲等における動物の生息状況について、文献その他の資料を収集・整理した。

b) 現地調査

ア. 調査期間

動物の調査期間は表 8.9.2 に、調査時期の選定根拠は表 8.9.3 に示すとおりである。

表 8.9.2 調査期間

調査対象	調査時期	調査実施日
哺乳類	春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
	夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
	秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
	冬季	令和6年1月13日(土)～18日(木)
鳥類	春季	令和5年4月8日(土)～9日(日)
	繁殖期	令和5年5月15日(月)、22日(月)
	夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
	秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
	冬季	令和6年1月17日(水)、1月18日(木)
フクロウ <sup>注1)</sup>	早春季	令和5年1月26日(木)、2月15日(水)
猛禽類 <sup>注2)</sup>	定点調査	1 営巣期 令和4年2月15日(火)、16日(水)、令和4年3月22日(火)、23日(水)、 令和4年4月15日(金)、16日(土)、令和4年5月27日(金)、28日(土)、 令和4年6月21日(火)、22日(水)、令和4年7月11日(月)、12日(火)、 令和4年8月11日(木)、12日(金)
		2 営巣期 令和5年2月14日(火)、15日(水)、令和5年3月14日(火)、15日(水)、 令和5年4月6日(木)、7日(金)、令和5年5月10日(水)、11日(木)、 令和5年6月17日(土)、18日(日)、令和5年7月14日(金)、15日(土)、 令和5年8月22日(火)、23日(水)
	林内踏査	令和4年4月16日(土)、5月28日(土)、6月22日(水)、24日(金)、 令和4年7月12日(火)、令和5年6月20日(火)
昆虫類	春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
	初夏	令和5年6月19日(月)、20日(火)
	夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
	秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
両生類 爬虫類	早春季	令和5年2月16日(木)
	春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
	夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
	秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
魚類	春季	令和5年5月14日(日)
	夏季	令和5年7月22日(土)
	秋季	令和5年10月14日(土)
底生動物	早春季	令和5年3月16日(木)
	夏季	令和5年7月21日(金)
	秋季	令和5年10月12日(木)
	冬季	令和6年1月13日(土)
クモ類	春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
	夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
	秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
陸産貝類	初夏	令和5年7月17日(月)、18日(火)
	秋季	令和5年9月28日(木)、29日(金)

注1) 有識者ヒアリングにて対象事業実施区域周辺でフクロウが繁殖している可能性があるとの意見を踏まえ、実施した。

注2) 定点調査により猛禽類の繁殖を示唆する行動が確認され、営巣可能性のある場所の踏査及び繁殖場所の確認をした。

注3) 任意採集法のほか、補足的にトラップ法による調査を実施した。

注4) 知事意見を踏まえ、任意踏査ルートに水路や水田脇等ヒメタイコウチが生息している可能性がある範囲を追加した。

注5) 鳥類の早春季はフクロウを調査対象とした。

注6) 昆虫類の初夏はホタル類を主な調査対象とした。

注7) 猛暑により夏季調査時に十分な調査が実施できなかったことから、秋季調査を追加実施した。



表 8.9.3 調査時期の選定根拠

調査対象	調査時期		設定根拠
哺乳類	春季	5月	気温の上昇とともに冬眠する種が目覚め、活動が活発になる時期である。
	夏季	7月	植物、両生類、昆虫類等、捕食生物が多くなる時期であり、活動が活発になる。また、幼獣が確認できる時期である。
	秋季	10月	草本類が枯れ始め、フィールドサインが確認しやすい時期である。
	冬季	1月	草本類の冬枯れにより、哺乳類の目撃やフィールドサインの確認が容易となる時期である。
鳥類	春季	4月	調査地域を春の渡りの中継地として利用する渡り鳥を確認できる時期である。
	繁殖期	5月	調査地域を繁殖場所として利用する夏鳥を確認しやすい時期であり、留鳥も含め、さえずり、餌運び、巣立ち雛等、繁殖行動の確認が期待できる時期である。
	夏季	7月	巣立ち時期であり、幼鳥への給餌等により鳥類相を把握するのに適した時期である。
	秋季	10月	調査地域を秋の渡りの中継地として利用する渡り鳥を確認しやすい時期である。
	冬季	1月	越冬する鳥類相を把握するのに適した時期である。
フクロウ	早春季	1月～2月	繁殖初期にあたり、盛んにさえずりを行うことから、生息の有無を確認することができる時期である。
猛禽類	繁殖期	2月～8月	一般に、求愛・造巣は2月から始まり、孵化した幼鳥は7月頃に巣立つことから、繁殖の有無を確認することができる時期である。
昆虫類	春季	5月	気温が上昇し、春に出現する昆虫類が確認しやすい時期である。
	初夏	6月	ホタル類が出現する時期であり、夜間飛翔する成虫が確認しやすい時期である。
	夏季	7月	梅雨明けにあたる時期であるとともに、本格的に暑くなり昆虫類の活動が低下する前であり、夏の昆虫の確認が期待できる時期である。
	秋季	10月	秋に羽化する種が確認できる。また、バッタ類等の鳴き声が確認できる時期である。
両生類 爬虫類	早春季	2月	種によっては両生類の卵塊が確認できる時期である。
	春季	5月	両生類は、繁殖期であり、卵塊、鳴き声、個体の確認に適した時期である。爬虫類は、気温の上昇とともに冬眠から目覚め、活動を開始する時期である。また、草本類がそれほど繁茂しておらず、見つけやすい時期である。
	夏季	7月	両生類は、梅雨明けにあたる時期であり、幼生及び上陸した幼体・成体の確認に適した時期である。爬虫類は、ヘビ類の活動が活発となる気温20～30℃の条件の時期である。
	秋季	10月	両生類は、上陸した個体が分散する時期であり、繁殖期後の生息場所の確認に適した時期である。爬虫類は、トカゲ類やヘビ類は活発に動く時期である。
魚類	春季	5月	水温の上昇により、魚類の活動が活発となり個体を確認しやすい時期である。
	夏季	7月	
	秋季	10月	当歳魚が捕獲しやすいサイズに成長している時期であり、捕獲による確認がしやすい時期である。
底生動物	早春季	3月	終齢幼虫となる種が多く、種の同定がしやすい時期である。
	夏季	7月	夏から秋にかけて羽化する水生昆虫類が終齢に近くなり、確認や同定がしやすい時期である。
	秋季	10月	
	冬季	1月	終齢幼虫となる種が多く、種の同定がしやすい時期である。
クモ類	春季	5月	昆虫類の活動の活発化に伴い、昆虫類を捕食するクモ類の活動も活発となり、個体を確認しやすい時期である。
	夏季	7月	
	秋季	10月	秋季に成熟する種の成体が確認しやすい時期である。
陸産貝類	初夏	7月	梅雨の湿度が高い時期で活動が活発になり、樹木の表面や草木が生い茂った場所にいる個体を確認しやすい時期である。
	秋季	9月	冬眠する環境が石や板の下等に限定されることで、個体が確認しやすい時期である。

イ. 調査地点

各調査項目のうち、調査地点の設定根拠は表 8.9.4 に示すとおりである。また、陸生動物の調査地点及び踏査ルートは図 8.9.1 に、水生生物の調査地点を図 8.9.2 に、猛禽類調査地点は図 8.9.3 に示すとおりである。

表 8.9.4 調査地点の選定根拠

調査対象	調査地点	設定根拠
哺乳類 昆虫類	t1, ac1 bt1, lt1	対象事業実施区域内に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
	t2, ac2 bt2, lt2	対象事業実施区域北側に隣接する須美川周辺のクズ群落に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
	t3, ac3 bt3, lt3	対象事業実施区域西側に位置する湛水域及びその周辺の路傍・空地雑草群落に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
	t4, ac4 bt4, lt4	対象事業実施区域南側に隣接するコナラ群落やシイ・カシ二次林等で構成される二次林に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
	t5, ac5 bt5, lt5	対象事業実施区域東側に位置する竹林及びスギ・ヒノキ植林で構成される人工林に生息する哺乳類及び昆虫類の生息状況を確認する地点として設定した。
鳥類	ps1	対象事業実施区域内及びその周辺に生息する鳥類の生息状況を確認する地点として設定した。
	ps2	対象事業実施区域北側に隣接する須美川等水辺に生息する鳥類の生息状況を確認する地点として設定した。
	ps3	対象事業実施区域北側の水田雑草群落及び畑雑草群落に生息する鳥類の生息状況を広く確認する地点として設定した。
	ps4	対象事業実施区域西側に位置する湛水域及びその周辺の路傍・空地雑草群落に生息する鳥類を確認する地点として設定した。
	ps5	対象事業実施区域南側に隣接するコナラ群落やシイ・カシ二次林等で構成される二次林に生息する鳥類の生息状況を確認する地点として設定した。
	ps6	対象事業実施区域東側に位置する竹林及びスギ・ヒノキ植林で構成される人工林及びその周辺に生息する鳥類の生息状況を確認する地点として設定した。
	ls1	対象事業実施区域南側に位置する竹林やコナラ群落等樹林地内に生息する鳥類の生息状況を確認するルートとして設定した。
ls2	対象事業実施区域南東側に位置する果樹園及び竹林等に生息する鳥類の生息状況を確認するルートとして設定した。	
猛禽類	st1	対象事業実施区域北側に位置し、主に対象事業実施区域北側の耕作地及び対象事業実施区域上空を広く視認することができる地点として設定した。
	st2	対象事業実施区域西側に位置し、主に対象事業実施区域西側周辺及び南側の樹林地上空を広く視認することができる地点として設定した。
	st3	対象事業実施区域南側に位置し、主に対象事業実施区域南側の樹林地上空及びその周辺を視認することができる地点として設定した。
	st4	対象事業実施区域南東側に位置し、主に対象事業実施区域南側の台地上を広く視認することができる地点として設定した。
両生類 爬虫類 魚類 底生動物	w1	本事業における工事中の排水等の放流先となる須美川に生息する両生類、爬虫類、魚類及び底生動物の生息状況を確認する地点として設定した。
	w2	
	w3	対象事業実施区域西側に位置する湛水域に生息する両生類、爬虫類、魚類及び底生動物の生息状況を確認する地点として設定した。
	w4	対象事業実施区域東側に位置する調整池に生息する両生類、爬虫類、魚類及び底生動物の生息状況を確認する地点として設定した。
全種	r1	対象事業実施区域内に生息する動物の生息状況を確認するルートとして設定した。
	r2	対象事業実施区域北側に位置する水田雑草群落や畑雑草群落に生息する動物の生息状況を確認するルートとして設定した。
	r3	対象事業実施区域西側から北側に位置する湛水域及びその周辺の路傍・空地雑草群落、須美川河川敷に生息する動物の生息状況を確認するルートとして設定した。
	r4	対象事業実施区域南側に隣接するコナラ群落やシイ・カシ二次林等で構成される二次林に生息する動物の生息状況を確認するルートとして設定した。
	r5	対象事業実施区域東側から南東側に位置する竹林及びスギ・ヒノキ植林等で構成される人工林に生息する動物の生息状況を確認するルートとして設定した。



凡例 この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和3年11月閲覧)」を使用したものである。

- 対象事業実施区域
- 調査地域

哺乳類調査地点

- トラップ法(t)
- 自動撮影法(ac)

鳥類調査地点

- ポイントセンサス法(ps)
- ラインセンサス法(ls)

昆虫類調査地点

- ベイトトラップ法(bt)
- ライトトラップ法(lt)

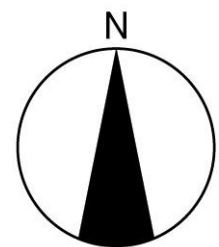
任意踏査ルート(r:哺乳類、鳥類、昆虫類、両生類、爬虫類、クモ類、陸産貝類)

出典:

「第6回、7回自然環境保全基礎調査」

(環境省生物多様性センターホームページ)

- コナラ群落
- シイ・カシ二次林
- アベマキ群落
- ケヤキ群落
- スギ・ヒノキ植林
- クスノキ植林
- 竹林
- 高茎草本群落
- アゼスゲ群落
- クズ群落
- 畑雑草群落
- 水田雑草群落
- 放棄水田雑草群落
- 果樹園
- 造成地
- 開放水域



1:7,500

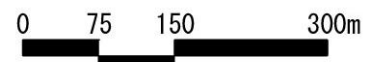




図 8.9.1 調査地点 (陸生動物)



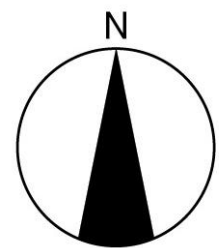


凡例 この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和3年11月閲覧)」を使用したものである。

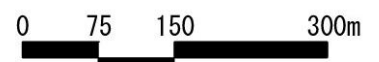
-  対象事業実施区域
-  調査地域

 両生類、爬虫類、魚類、  
底生動物調査地点(W)

-  コナラ群落
-  シイ・カシ二次林
-  アベマキ群落
-  ケヤキ群落
-  スギ・ヒノキ植林
-  クスノキ植林
-  竹林
-  高茎草本群落
-  アゼスゲ群落
-  クズ群落
-  畑雑草群落
-  水田雑草群落
-  放棄水田雑草群落
-  果樹園
-  造成地
-  開放水域



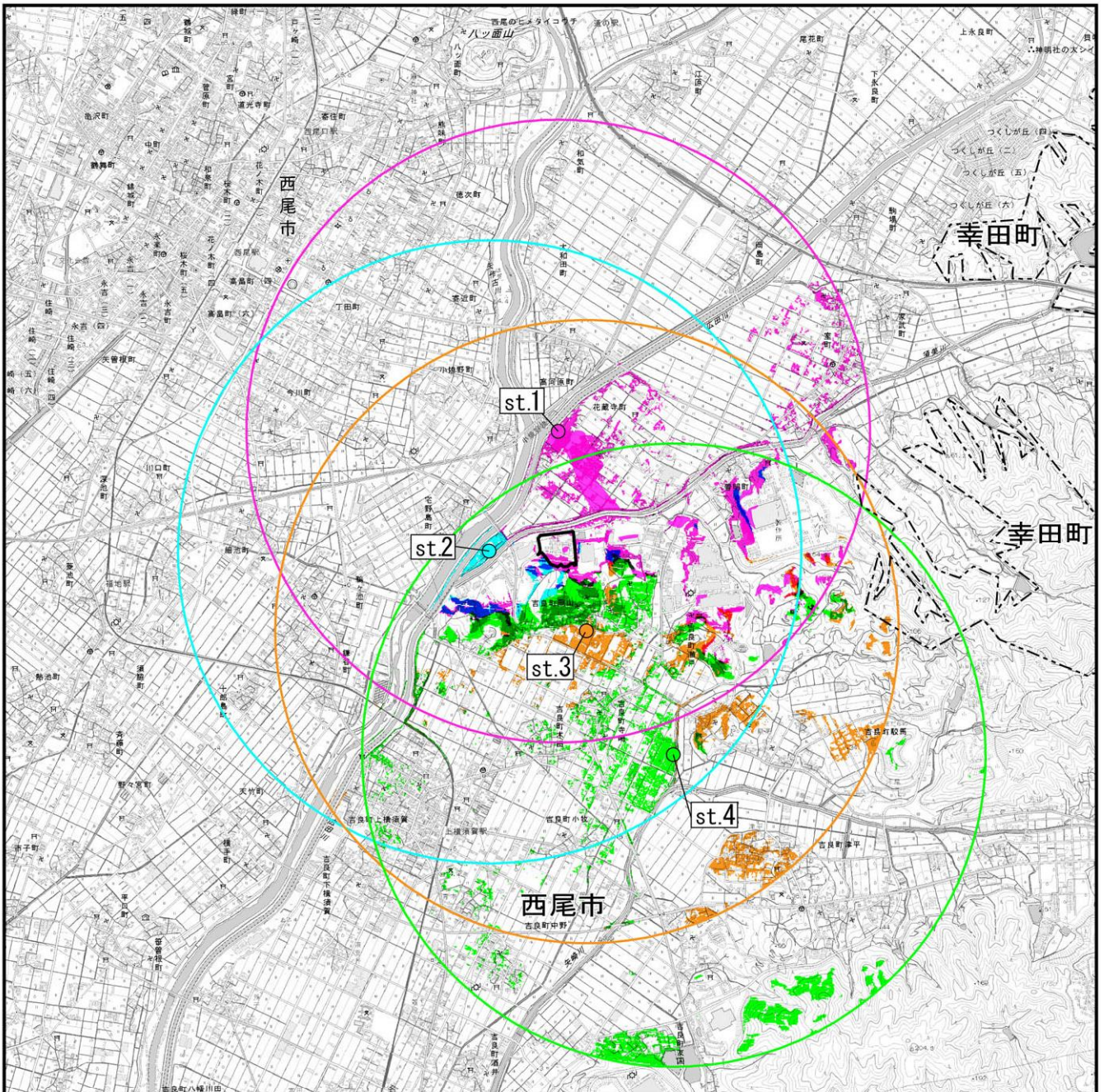
1:7,500









出典：  
「第6回、7回自然環境保全基礎調査」  
(環境省生物多様性センターホームページ)

図 8.9.2 調査地点 (水生生物)



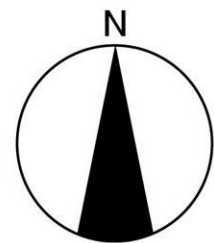


凡 例

-  対象事業実施区域
-  市町境
-  可視範囲（地表面）
-  可視範囲（地表面）
-  可視範囲（地表面）
-  可視範囲（地表面）

注1) 上記以外の色の部分は、複数地点の可視範囲である。  
注2) 各円の内側は、上空の可視範囲である。

この地図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「西尾」「吉田」を使用したものである。



1:40,000

0 400m 800m 1.6km

図 8.9.3 調査地点（猛禽類）



ウ. 調査方法

動物の調査方法は、表 8.9.5(1)～(4)に示すとおりである。

表 8.9.5(1) 動物の調査方法

調査項目	調査方法		調査イメージ
哺乳類	目撃法及びフィールドサイン法	調査地域を任意に踏査し、個体の直接観察の他、鳴き声、死体、足跡、糞、食痕など生息の根拠となるフィールドサインの確認・記録を行い、生息種を把握した。	
	トラップ法	シャーマントラップと呼ばれるライブトラップを用いて小型哺乳類を捕獲した。トラップは、奥の床を踏むことで入り口が閉まる仕掛けとなっており、設置場所は、ネズミ類が活動するような場所を選定した。ネズミ類の通り道になりそうな場所（木の根本や倒木の横など）に1個ずつ、1mほどの間隔をあけて連続的に設置した。	
	自動撮影法	無人撮影カメラによる自動撮影（所定の範囲内に野生動物が通過すると、赤外線センサーが検知し、シャッターとフラッシュが作動する仕組みとなっている。）を行った。	
鳥類	任意観察法	ラインセンサス法及びポイントセンサス法の調査地点以外の鳥類の生息状況を観察するため、調査地域を任意に踏査し、鳥類の種類と繁殖行動等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡又は望遠鏡により行った。	 
	ラインセンサス法	予め選定したルート（ライン）を時速1～2km程度の速度で歩行し、調査者から片側50m程度で確認された全ての鳥類の種類と個体数、繁殖行動等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡により行い、目視が困難な場合は鳴き声による同定もあわせて行った。	
	ポイントセンサス法	調査地域を広く観察できるように予め選定した地点（定点）において、一定時間に確認された鳥類の種類と個体数、繁殖行動等を記録した。鳥類の識別は目視及び双眼鏡又は望遠鏡により行った。調査は、選定した定点より50mの範囲を対象に行った。	

表 8.9.5(2) 動物の調査方法

調査項目	調査方法		調査イメージ
猛禽類	定点調査	<p>各地点において調査員が終日双眼鏡や望遠鏡を用いて観察を行い、出現した鳥類について地図上にその位置を示し、行動内容等を確認・記録した。</p> <p>また、各調査地点間は無線の使用により情報を共有し、個体確認及び行動範囲推定の精度を高めた（生息状況の確認）。</p>	
	林内踏査	<p>定点調査により繁殖を示唆する行動が確認され、営巣可能性のある場所の絞り込みができた場合に踏査を実施し、営巣場所の特定に努めた（繁殖場所の確認）。</p> <p>また、オオタカの繁殖状況にも十分注意をしようえで実施した。</p>	
フクロウ	コールバック法	<p>日没後、あらかじめ録音した音声をCDプレーヤー等で流しながら、調査地域を任意に踏査し、フクロウの反応を確認した。</p> <p>音声の発信は、繁殖に関する攪乱を抑制するため、5分程度を2～3回、最大20分程度とし、反応があればすぐにとりやめた。</p>	
	林内踏査	<p>営巣地の推定（大径木の有無、巣立ち雛の確認）を目的として、林内踏査を行った。</p> <p>営巣地には「うる」のある大径木を用いる事があるが、近年は地面や木の又部等も用いる事があることから、短時間で見つからなかった場合は、推定にとどめた。</p> <p>また、オオタカの繁殖状況にも十分注意をしようえで実施した。</p>	
昆虫類	任意採集法	<p>調査地域を任意に踏査し、捕虫網を用いた見つけ採りのほか、主にチョウ・トンボ類等を目視により確認した。採集においては、同じ場所で連続して捕虫網を振るのではなく、植生等の目的とする環境を決め、その中を移動しながら捕虫網を振るようにした（スウィーピング法）。木の枝、草等についている種類は、枝や草を捕虫網で叩き、落下してくる種を採集した（ビーティング法）。</p> <p>なお、目視により同定が困難な種は持ち帰り、室内分析を行った。</p>	
	ベイトトラップ法	<p>地面と同じレベルに口がくるように、プラスチックコップ（深さ15cm程度）などを埋め、陸生昆虫類などを採集した。なお、コップには少量の餌（酢、ジュース等）を入れた。</p> <p>1晩放置した後に落下した陸上昆虫類等を回収した。</p>	



表 8.9.5(3) 動物の調査方法








調査項目	調査方法		調査イメージ
昆虫類	ライトトラップ法	調査地点においてカーテン法（300W水銀灯）によるライトトラップを実施し夜間、灯火に飛来する昆虫類相を把握した。調査時間は日の入り前から3時間～4時間とした。	
両生類、爬虫類	任意観察法	調査地域を任意に踏査し、鳴き声や死体、抜け殻など生息の根拠となるフィールドサインや個体・卵塊の確認を行うことにより両生類・爬虫類相を把握した。なお、調査時に確認した個体及び痕跡は地図上に位置等を記録するとともに、可能な限り写真撮影を行った。	
	トラップ法	カメ類を対象にかご網（縦約 30cm、横約 30cm 程度、長さ約 1 m）をカメ類の生息の可能性が考えられる河川等に設置し、捕獲調査を実施した。カメ類を捕獲した場合は、種が識別できる写真を撮影したのちに放した。	
魚類 底生動物	任意採集法	<p><u>タモ網（目合約 1mm、網径約 30cm 程度）</u> タモ網を河床及び河岸に対して隙間がないように固定して、上流側から足で踏みながら追い込むようにして採集することにより魚類・底生動物相を把握した。</p> <p><u>セルビン（口径約 3cm、長さ約 30cm）、かご網（縦約 30cm、横約 30cm 程度、長さ約 1m）</u> 流れの緩やかな場所に設置し、小型魚類等を捕獲することにより魚類・底生動物相を把握した。</p> <p><u>投網（目合：12mm 程度、網裾：17m 程度又は、目合：18mm 程度、網裾：17m 程度）</u> 円錐形の袋状の網等を使用して、魚群又は魚が潜んでいるような場所を狙って網を広げようように投げ入れた。</p>	 
	トラップ法	セルビン（口径約 3cm、長さ約 30cm）、かご網（縦約 30cm、横約 30cm 程度、長さ約 1m）を流れの緩やかな場所に設置し、小型魚類等を捕獲することにより魚類・底生動物相を把握した。	



表 8.9.5(4) 動物の調査方法

調査項目	調査方法		調査イメージ
クモ類	任意観察法	調査範囲を踏査し、スウィーピング法や見つけ採り法によりクモ類を確認、捕獲した。なお、目視により同定が困難な種は持ち帰り、室内分析を行った。	
陸産貝類	任意採集法	調査範囲を踏査し、大型の陸産貝類については直接採取することにより確認した。小型・微小陸産貝類は、主要な環境区分で土壌採取法などを実施し、採集した陸産貝類については、室内分析を行った。	

8.9.1.2 調査結果

(1) 脊椎動物、昆虫類その他主な動物に係る動物相の状況

① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による動物の調査結果は「第3章 3.1.8 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況」に示したとおりである。

② 現地調査

a) 哺乳類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.6 に示すとおりである。

現地調査では4目6科7種の哺乳類が確認された。

対象事業実施区域内では、モグラ属の一種、イエコウモリ、ホンドキツネ及びニホンイタチの4種が確認され、対象事業実施区域外では、これらにイエコウモリやハクビシン等を加えた7種が確認された。確認種は、東海地方の平野部に普通に生息する種であり、市街地周辺でも比較的確認される種が多かった。

なお、確認種のうち、外来種はハクビシン及びヌートリアであった。

表 8.9.6 哺乳類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		調査時期				その他 調査
					内	外	春季	夏季	秋季	冬季	
1	モグラ目	モグラ科	モグラ属の一種	<i>Mogera sp.</i>	●	●				●	
2	コウモリ目	ヒナコウモリ科	イエコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i>	●	●	●	●			
3	ネコ目	イヌ科	ホンドキツネ	<i>Vulpes vulpes japonica</i>	●	●	●	●	●	●	
4			ホンドタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i>		●	●	●	●	●	
5		イタチ科	ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi itatsi</i>	●	●			●	●	
-			イタチ属の一種	<i>Mustela sp.</i>	(●)	(●)		(●)	(●)	(●)	
6	(ネコ目)	(ジャコウネコ科)	(ハクビシン)	<i>Paguma larvata</i>		●		●		●	
7	(ネズミ目)	(ヌートリア科)	(ヌートリア)	<i>Myocastor coypus</i>		●	●	●		●	
計	4目	6科	7種		4種	7種	4種	6種	3種	6種	0種

注1) 種名及び配列は以下の出典を参考とした。

「日本の哺乳類[改訂版]」(平成20年 阿部永監修)

「日本の哺乳類」(平成14年 小宮輝之)

「日本産哺乳類全種分類表」(<http://www.ne.jp/asahi/kitutuki/kobo/11ysi/honyu-ru.html>)

注2) (●) は種の同定に至らなかった記録であり、同じ属で確認種がいた場合は種数としてはカウントしていない。

注3) その他調査とは、別項目の調査時に確認されたものである。

注4) 目名、科名、種名の( ) は外来種を示す。

b) 鳥類

ア. 鳥類（フクロウ及び猛禽類を含む。）

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.7(1)、(2)に示すとおりである。

現地調査では、14目32科71種の鳥類（フクロウ及び猛禽類を含む。）が確認された。

確認種の大部分は、東海地方の平野部で普通に見られる種であった。対象事業実施区域北側の河川区域及び水田が広がる耕作地では、アオサギ等がよく見られたほか、オオバンなどの水鳥が見られた。対象事業実施区域南側の樹林地及びその付近では、ツバメやキビタキなどの夏季に繁殖を行う種や、シメやシロハラなどの対象事業実施区域周辺を越冬地として利用する種、サンショウクイなどの渡りの時期に一時的に滞留する種などが確認されたほか、留鳥であるフクロウが確認された。

表 8.9.7(1) 鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業実施区域		調査時期				フクロウ調査	猛禽類調査	
					内	外	春季	繁殖期	夏季	秋季			冬季
1	キジ目	キジ科	キジ	<i>Phasianus colchicus robustipes</i>	●	●	●			●	●	●	
2	カモ目	カモ科	マガモ	<i>Anas platyrhynchos platyrhynchos</i>	●						●	●	
3			カルガモ	<i>Anas zonorhyncha</i>	●	●	●					●	●
4			オナガガモ	<i>Anas acuta</i>	●							●	●
5			コガモ	<i>Anas crecca crecca</i>	●							●	●
6			カイツブリ目	カイツブリ科	カイツブリ	<i>Tachybaptus ruficollis poggei</i>	●						●
7	ハト目	ハト科	キジバト	<i>Streptopelia orientalis orientalis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
8	カツオドリ目	ウ科	カワウ	<i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>	●	●	●	●	●			●	
9	バリカン目	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i>	●							●	
10			アオサギ	<i>Ardea cinerea jouyi</i>	●	●	●	●	●				●
11			ダイサギ	<i>Ardea alba alba</i>	●	●			●				●
12			コサギ	<i>Egretta garzetta garzetta</i>	●								●
13	ツル目	クイナ科	クイナ	<i>Rallus aquaticus indicus</i>	●							●	
14			ヒクイナ	<i>Porzana fusca erythrothorax</i>	●								●
15			バン	<i>Gallinula chloropus chloropus</i>	●					●	●		●
16			オオバン	<i>Fulica atra atra</i>	●	●						●	●
17	チドリ目	チドリ科	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i>	●					●		●	
18			コチドリ	<i>Charadrius dubius curonicus</i>	●								●
19	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus haliaetus</i>	●	●			●			●	
20		タカ科	トビ	<i>Milvus migrans lineatus</i>	●						●		●
21			チュウヒ	<i>Circus spilonotus spilonotus</i>	●								●
22			ツミ	<i>Accipiter gularis</i>	●								●
23			ハイタカ	<i>Accipiter nisus nisosimilis</i>	●								●
24			オオタカ	<i>Accipiter gentilis fujiyamae</i>	●	●	●	●		●			●
25			サシバ	<i>Butastur indicus</i>	●	●	●						●
26			ノスリ	<i>Buteo buteo japonicus</i>	●	●	●				●		●
27	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ	<i>Strix uralensis hondoensis</i>		●						●	
28	ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ	<i>Alcedo atthis bengalensis</i>		●	●	●			●	●	
29	キツツキ目	キツツキ科	コゲラ	<i>Dendrocopos kizuki nippon</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
30			アカゲラ	<i>Dendrocopos major hondoensis</i>		●						●	
31			アオゲラ	<i>Picus awokera awokera</i>	●	●			●	●	●		
32	ハヤブサ目	ハヤブサ科	チョウゲンボウ	<i>Falco tinnunculus interstinctus</i>	●	●	●			●	●	●	
33			ハヤブサ	<i>Falco peregrinus japonensis</i>	●	●	●	●			●		●
34	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus divaricatus</i>		●						●	
35		モズ科	モズ	<i>Lanius bucephalus bucephalus</i>	●	●	●			●	●	●	
36			カケス	<i>Garrulus glandarius japonicus</i>		●					●		●
37		カラス科	ハシボソガラス	<i>Corvus corone orientalis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
38	ハシブトガラス		<i>Corvus macrorhynchos japonensis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●		

表 8.9.7(2) 鳥類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象実施区域		調査時期					猛禽類調査	
					内	外	春季	繁殖期	夏季	秋季	冬季		フクロウ調査
39	スズメ目	シジュウカラ科	ヤマガラ	<i>Poecile varius varius</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
40			シジュウカラ	<i>Parus minor minor</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
41		ヒバリ科	ヒバリ	<i>Alauda arvensis japonica</i>		●	●	●				●	
42		ツバメ科	ツバメ	<i>Hirundo rustica gutturalis</i>		●	●	●	●			●	
43			イワツバメ	<i>Delichon dasypus dasypus</i>		●	●					●	
44		ヒヨドリ科	ヒヨドリ	<i>Hypsipetes amaurotis amaurotis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
45		ウグイス科	ウグイス	<i>Cettia diphone cantans</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
46		エナガ科	エナガ	<i>Aegithalos caudatus trivirgatus</i>	●	●	●	●		●	●	●	
47		メジロ科	メジロ	<i>Zosterops japonicus japonicus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
48		セッカ科	セッカ	<i>Cisticola juncidis bruniceps</i>		●							
49		ミソサザイ科	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes fumigatus</i>		●					●		
50		ムクドリ科	ムクドリ	<i>Spodiopsar cineraceus</i>	●	●	●			●	●	●	
51		ヒタキ科	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>		●						●	
52			シロハラ	<i>Turdus pallidus</i>	●	●	●				●	●	
53			アカハラ	<i>Turdus chrysolaus chrysolaus</i>		●					●	●	
54			ツグミ	<i>Turdus naumanni eunomus</i>	●	●	●				●	●	
55			ルリビタキ	<i>Tarsiger cyanurus cyanurus</i>		●					●		
56			ジョウビタキ	<i>Phoenicurus aureus aureus</i>		●					●	●	
57			キビタキ	<i>Ficedula narcissina narcissina</i>	●	●	●						
58			スズメ科	スズメ	<i>Passer montanus saturatus</i>	●	●	●	●	●	●	●	●
59		セキレイ科	キセキレイ	<i>Motacilla cinerea cinerea</i>		●				●	●		
60			ハクセキレイ	<i>Motacilla alba lugens</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
61			セグロセキレイ	<i>Motacilla grandis</i>	●	●							
62			タヒバリ	<i>Anthus rubescens japonicus</i>		●					●		
63		アトリ科	カワラヒワ	<i>Chloris sinica minor</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
64			ベニマシコ	<i>Uragus sibiricus sanguinolentus</i>		●						●	
65			シメ	<i>Coccothraustes coccothraustes japonicus</i>		●	●				●	●	
66		ホオジロ科	ホオジロ	<i>Emberiza cioides ciopsis</i>	●	●	●	●	●	●	●	●	
67			ホオアカ	<i>Emberiza fucata fucata</i>		●						●	
68	カシラダカ		<i>Emberiza rustica latifascia</i>		●						●		
69	アオジ		<i>Emberiza spodocephala personata</i>	●	●	●				●	●		
70	(キジ目)	(キジ科)	(コジュケイ)			●	●	●	●			●	
71	(ハト目)	(ハト科)	(ドバト)			●	●	●	●	●	●	●	
計	14 目	32 科	71 種		28	71	38	27	20	31	40	1	60

注1) 種名及び配列は「日本鳥類目録第7版」(平成24年9月 日本鳥学会)に準拠した。

注2) 目名、科名、種名の( )は外来種を示す。

イ. 猛禽類

猛禽類調査により確認された猛禽類は表 8.9.8(1)、(2)に示すとおりである。猛禽類調査では2目3科9種の猛禽類が確認された。確認例数が最も多かった猛禽類はオオタカであり、対象事業実施区域周辺で繁殖していることが確認された（令和4年：繁殖中断、令和5年：巢内で幼鳥を確認）。

また、チョウゲンボウについても比較的多く確認されており、幼鳥の確認もあることから対象事業実施区域周辺で繁殖をしている可能性が考えられる。

オオタカ及びチョウゲンボウ以外の種については、繁殖期を通して繁殖を示唆する行動等は確認されなかったことから、対象事業実施区域周辺で営巣している可能性は低いと考えられる。その他、対象事業実施区域周辺はハイタカ及びノスリの越冬地として利用されている。

なお、渡り途中のサシバが確認されていることから、サシバの渡りのルートとなっているものと考えられる。

表 8.9.8(1) 猛禽類の確認例数（令和4年）

No	目名	科名	種名	選定基準					確認状況（確認例）							
				I	II	III	IV	V	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	合計
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ			NT	繁：NT		1回	0回	1回	0回	0回	0回	2回	4回
2		タカ	チュウヒ		国内	EN	繁：CR 越：VU		0回	0回	1回	0回	0回	0回	0回	1回
3			ハイタカ			NT			9回	4回	2回	0回	0回	0回	0回	15回
4			オオタカ			NT	繁：NT 越：NT		3回	3回	10回	10回	3回	1回	1回	31回
5			サシバ			VU	繁：EN 通：NT		0回	0回	3回	0回	0回	0回	0回	3回
6			ノスリ						5回	1回	1回	0回	2回	0回	0回	9回
7	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ						1回	1回	3回	4回	1回	0回	2回	12回
8			ハヤブサ		国内	VU	繁：VU 越：NT		1回	1回	0回	0回	0回	0回	0回	2回
計	2目	3科	8種	0種	2種	6種	5種	0種	-	-	-	-	-	-	-	-

注1) 表中のI～Vは表 8.9.16の番号と対応する。

注2) IVの指定状況の意味は次のとおりである。越：越冬 繁：繁殖 通：通過

注3) 種名及び配列については原則として「日本鳥類目録 改訂第7版」（平成24年9月 日本鳥学会）に準拠した。

表 8.9.8(2) 猛禽類の確認例数（令和5年）

No	目名	科名	種名	選定基準					確認状況（確認例）							
				I	II	III	IV	V	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	合計
1	タカ	ミサゴ	ミサゴ			NT	繁：NT		9回	3回	0回	0回	0回	1回	2回	15回
2		タカ	ツミ				繁：NT		0回	1回	0回	0回	0回	0回	1回	2回
3			ハイタカ			NT			6回	7回	0回	0回	0回	0回	0回	13回
4			オオタカ			NT	繁：NT 越：NT		6回	25回	10回	10回	12回	2回	4回	69回
5			サシバ			VU	繁：EN 通：NT		0回	0回	5回	0回	0回	0回	2回	7回
6			ノスリ						10回	6回	4回	1回	0回	0回	0回	21回
7	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ						5回	3回	5回	3回	4回	2回	4回	26回
8			ハヤブサ		国内	VU	繁：VU 越：NT		4回	0回	3回	0回	1回	2回	0回	10回
計	2目	3科	8種	0種	1種	5種	5種	0種	-	-	-	-	-	-	-	-

注1) 表中のI～Vは表 8.9.16の番号と対応する。

注2) IVの指定状況の意味は次のとおりである。越：越冬 繁：繁殖 通：通過

注3) 種名及び配列については原則として「日本鳥類目録 改訂第7版」（平成24年9月 日本鳥学会）に準拠した。

## c) 昆虫類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.9 に示すとおりである。

現地調査では、19 目 270 科 1,975 種の昆虫類が確認された（詳細は、資料編「資料 7-1 昆虫類確認種一覧」参照）。

確認種の大部分は、東海地方平野部に普通に見られる種が多く、全国的にも普通種とされる種が多かった。対象事業実施区域内に比べ、対象事業実施区域外に多くの種が確認されているが、これは、人為的影響のある環境が多いものの、河川や水田等の水域や果実をつける果樹園・耕作地がまとまって存在するほか、朽ち木がみられるシイ・カシ二次林などの対象事業実施区域内にはない環境が対象事業実施区域外に加わっているためであると考えられた。

また、対象事業実施区域内南側から東側に、人為的な管理により安定的な湿地環境が成立しており、この場所にもみ生息する種が見られた。

表 8.9.9 昆虫類確認種概要

目	科	種	主な確認種
トビムシ	4	14	ミズフシトビムシ、シマツノトビムシ 等
カゲロウ	2	6	フタスジモンカゲロウ、フタバカゲロウ 等
トンボ	7	22	アオモンイトトンボ、ギンヤンマ、シオカラトンボ 等
ハサミムシ	2	2	ヒゲジロハサミムシ、ミジンハサミムシ
カワゲラ	1	1	オナシカワゲラ
ナナフシ	1	1	ナナフシモドキ
カマキリ	1	4	コカマキリ、オオカマキリ、ハラビロカマキリ 等
ゴキブリ	2	3	モリチャバネゴキブリ、オオゴキブリ
シロアリ	1	1	ヤマトシロアリ
バッタ	14	55	エンマコオロギ、マダラスズ、ヒガシキリギリス、ツユムシ、ツチイナゴ 等
チャタテムシ	5	15	ウスベニチャタテ、ヒメチャタテ 等
アザミウマ	3	11	イネクダアザミウマ、ハナクダアザミウマ 等
カメムシ	51	283	ニイニイゼミ、ゴマフハトムネヨコバイ、ゴマフウンカ、コミズムシ、エサキアメンボ、ホソヘリカメムシ、チャバネアオカメムシ、ナガメ 等
コウチュウ	44	474	ホソセスジゲンゴロウ、スジアオゴミムシ、コガタルリハムシ、ヒメカメノコテントウ、クヌギシギゾウムシ、ナミガタチビタマムシ 等
アミメカゲロウ	9	32	ヒロバカゲロウ、ヤマトクサカゲロウ、ウスバカゲロウ 等
ハチ	39	339	セグロカブラハバチ、オオハラボソコマユバチ、トビイロシワアリ、コガタスズメバチ、コマルハナバチ 等
ハエ	47	352	キリウジガガンボ、セスジユスリカ、ホソヒラタアブ、ヤマギシモリノキモグリバエ、キンバエ、マルボシヒラタヤドリバエ 等
トビケラ	8	14	キタガミトビケラ、アオヒゲナガトビケラ 等
チョウ	29	346	ナミホソハマキモドキ、キベリトガリメイガ、アオスジアゲハ、モンシロチョウ、ウラナミシジミ、キタテハ、サトキマダラヒカゲ、キシタホソバ、オオウンモンクチバ 等
合計			19目270科1,975種

注) 目名の配列は、「新訂原色昆虫大圖鑑」(2008年 北隆館)に示される「昆虫の起源と種数」(2003年 森本)の要約に準拠した。また、科以下の配列及び種名は、原則として「日本産野生生物目録-無脊椎動物編Ⅱ」(1995年 環境庁)を参考としたが、コウチュウ目及びチョウ目については、「日本昆虫目録」(日本昆虫学会)に準拠した。

d) 両生類、爬虫類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.10 及び表 8.9.11 に示すとおりである。

現地調査では、両生類は1目3科4種、爬虫類は2目6科6種が確認された。

両生類については、対象事業実施区域内で確認された種は、ニホンアマガエル、トノサマガエル及びウシガエルの3種であり、対象事業実施区域外ではこれらにヌマガエルを加えた4種が確認された。調査地域内には、矢作古川や須美川等の水域が含まれているものの、両生類の生息に好適な沢・細流や止水域が少なかったため、確認種数は少なかった。

また、確認種のうち、外来種はウシガエルのみであった。

表 8.9.10 両生類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業実施区域		調査時期			その他調査	
					内	外	早春	春季	夏季		秋季
1	無尾目	アマガエル科	ニホンアマガエル	<i>Hyla japonica</i>	●	●		●	●	●	●
2		アカガエル科	トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i>	●	●		●	●	●	
3		ヌマガエル科	ヌマガエル	<i>Fejervarya kawamurai</i>		●		●	●	●	●
4	(無尾目)	(アカガエル科)	(ウシガエル)	<i>Lithobates catesbeianus</i>	●	●		●			
計	1目	3科	4種		3種	4種	0種	4種	3種	3種	2種

注1) 種名及び配列は以下の出典を参考とした。  
 「日本の両生爬虫類」(平成14年 内山りゅうら)  
 「[増補改訂] 日本のカエル+サンショウウオ類」(平成27年 奥山風太郎)  
 「日本産両生類図鑑」(平成28年 関慎太郎)  
 「日本のカエル」(平成28年 松井正文)  
 「日本産爬虫両生類標準和名」(<http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>)  
 注2) その他調査とは、別項目の調査時に確認されたものである。  
 注3) 目名、科名、種名の( )は外来種を示す。

爬虫類については、対象事業実施区域内で確認された種は、ニホンイシガメやヒガシニホントカゲ等の4種であり、対象事業実施区域外ではこれらにニホンヤモリ及びニホンマムシを加えた6種が確認された。

また、確認種のうち、外来種はミシシippアカミミガメのみであった。

表 8.9.11 爬虫類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業実施区域		調査時期			その他調査
					内	外	春季	夏季	秋季	
1	カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i>	●	●			●	●
2	有鱗目	ヤモリ科	ニホンヤモリ	<i>Gekko japonicus</i>		●	●	●	●	
3		トカゲ科	ヒガシニホントカゲ	<i>Plestiodon finitimus</i>	●	●	●	●	●	
4		カナヘビ科	ニホンカナヘビ	<i>Takydromus tachydromoides</i>	●	●	●	●	●	
5		クサリヘビ科	ニホンマムシ	<i>Gloydium blomhoffii</i>		●		●		
6	(カメ目)	(ヌマガメ科)	(ミシシippアカミミガメ)	<i>Trachemys scripta elegans</i>	●	●	●	●	●	●
計	2目	6科	6種		4種	6種	4種	5種	5種	2種

注1) 種名及び配列は以下の出典を参考とした。  
 「日本の両生爬虫類」(平成14年 内山りゅうら)  
 「日本産両生類図鑑」(平成28年 関慎太郎)  
 「日本産爬虫両生類標準和名」(<http://zoo.zool.kyoto-u.ac.jp/herp/wamei.html>)  
 注2) その他調査とは、別項目の調査時に確認されたものである。  
 注3) 目名、科名、種名の( )は外来種を示す。

e) 魚類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.12 に示すとおりである。

現地調査では、3目3科10種の魚類が確認され、カワムツやモツゴなどの河川中流から下流域に生息する種が確認された。また、確認種のうち、外来種はコイ（飼育型・品種）やタイリクバラタナゴ、カダヤシ、ブルーギル、オオクチバスの5種であった。

表 8.9.12 魚類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	調査時期			その他調査
					春季	夏季	秋季	
1	コイ目	コイ科	フナ類	<i>Carassius buergeri</i>	●	●		
2			オイカワ	<i>Opsariichthys platypus</i>	●	●	●	
3			カワムツ	<i>Candidia temminckii</i>				●
4			モツゴ	<i>Pseudorasbora parva</i>	●	●	●	
5			スゴモロコ類	<i>Squalidus chankaensis</i>	●	●	●	
6	(コイ目)	(コイ科)	(コイ(飼育型・品種))	<i>Cyprinus carpio</i>	●	●	●	
7			(タイリクバラタナゴ)	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>		●	●	
8	(カダヤシ目)	(カダヤシ科)	(カダヤシ)	<i>Gambusia affinis</i>	●	●	●	●
9	(スズキ目)	(サンフィッシュ科)	(ブルーギル)	<i>Lepomis macrochirus crochirus</i>	●	●	●	●
10			(オオクチバス)	<i>Micropterus salmoides</i>	●		●	
計	3目	3科	10種		8種	8種	8種	3種

注1) 出現種の種名及び配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト(令和4年度)」(令和4年 国土交通省)に準拠した。  
 注2) フナ類は、従来より形態的識別点とされる鰓耙数には重複があること、近年では中間種も知られており、ゲンゴロウブナ以外は形態で識別すること困難とされる。  
 注3) スゴモロコ類は、スゴモロコおよびコウライモロコと識別される個体をスゴモロコ類として記載した。  
 注4) その他調査とは、別項目の調査時に確認されたものである。  
 注5) 目名、科名、種名の( )は外来種を示す。

f) 底生動物

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.13 に示すとおりである。

現地調査では、2綱5目6科6種の底生動物が確認された。

確認種は、ヒメタニシやヒメモノアラガイなどの流れが少なく、汚濁の進んだ場所に生息する種が多く、確認種のうち、外来種はアメリカザリガニの1種であった。

表 8.9.13 底生動物確認種一覧

No.	綱名	目名	科名	種名	学名	調査時期			
						早 春 季	夏 季	秋 季	冬 季
1	腹足綱	新生腹足目	タニシ科	ヒメタニシ	<i>Sinotaia histrica</i>			●	
2		汎有肺目	モノアラガイ科	ヒメモノアラガイ	<i>Orientogalba ollula</i>				●
3	軟甲綱	ヨコエビ目	マミズヨコエビ科	マミズヨコエビ科の一種	<i>Crangonyctidae</i> sp.	●			●
4		ワラジムシ目	ミズムシ科(甲)	ミズムシ(甲)	<i>Asellus hilgendorffi hilgendorffi</i>	●			●
5		エビ目	テナガエビ科	スジエビ	<i>Palaemon paucidens</i>	●	●	●	●
6	(軟甲綱)	(エビ目)	(アメリカザリガニ科)	(アメリカザリガニ)	<i>Procambarus clarkii</i>	●	●	●	●
計	2綱	5目	6科	6種	4種	2種	3種	5種	

注1) 綱名の配列は、「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年版」(令和5年 国土交通省)に、目名の配列は、「新訂原色昆虫大図鑑」(2008年 北隆館)に示される「昆虫の起源と種数」(2003年 森本)の要約に、科以下の配列及び種名は、原則として「日本産野生生物目録-無脊椎動物編II」(1995年 環境庁)に準拠した。  
 注2) 綱名、目名、科名、種名の( )は外来種を示す。



g) クモ類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.14(1)～(3)に示すとおりである。

現地調査では、1目20科87種が確認された。

対象事業実施区域内で確認された種は、センショウグモやジョロウグモなどの38種であり、対象事業実施区域外ではこれらにオナガグモやコガネグモなどを加えた82種が確認された。

確認種の大部分は、東海地方平野部に普通に見られる種が多く、市街地周辺でも比較的普通に見られる種が多かった。調査地域内で共通して確認された種が多く、環境別に際立った生息状況等は見出されなかった。

表 8.9.14(1) クモ類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		調査時期			
					内	外	春季	夏季	秋季	
1	クモ目	センショウグモ科	センショウグモ	<i>Ero japonica</i>	●		●			
2			オオセンショウグモ	<i>Mimetus testaceus</i>		●	●			
3		ウズグモ科	マネキグモ	<i>Miagrammopes orientalis</i>	●	●	●		●	
4			カタハリウズグモ	<i>Octonoba sybotides</i>		●		●		
5		ヒメグモ科	アシプトヒメグモ	<i>Anelosimus crassipes</i>	●		●			
6			シロカネイソウロウグモ	<i>Argyrodes bonadea</i>	●	●	●	●		
7			オナガグモ	<i>Ariamnes cylindrogaster</i>		●	●			
8			シモフリミジグモ	<i>Dipoena punctisparsa</i>		●	●			
9			ムナボシヒメグモ	<i>Keijia sterninotata</i>		●			●	
10			ニホンヒメグモ	<i>Parasteatoda japonica</i>	●	●	●	●		
11			オオヒメグモ	<i>Parasteatoda tepidariorum</i>		●	●	●	●	
12			カニミジグモ	<i>Phycosoma mustelinum</i>		●	●			
13			ムネグロヒメグモ	<i>Theridion pinastri</i>		●	●			
-				ヒメグモ科の一種	Theridiidae		(●)	(●)	(●)	
14			サラグモ科	クロナンキングモ	<i>Hylyphantes graminicola</i>	●	●	●		
15		チビアカサラグモ		<i>Nematogmus sanguinolentus</i>		●		●		
16		セスジアカムネグモ		<i>Ummeliata insecticeps</i>		●	●			
-				サラグモ科の一種	Linyphiidae		(●)	(●)		
17		アシナガグモ科	チュウガタシロカネグモ	<i>Leucauge blanda</i>	●	●	●	●	●	
18			コシロカネグモ	<i>Leucauge subblanda</i>		●		●		
-				Leucauge 属の一種	<i>Leucauge sp.</i>	(●)	(●)	(●)	(●)	
19			ジョロウグモ	<i>Nephila clavata</i>	●	●		●	●	
20			トガリアシナガグモ	<i>Tetragnatha caudicula</i>	●	●	●	●	●	
21			アシナガグモ	<i>Tetragnatha praedonia</i>	●	●	●	●	●	
22			ウロコアシナガグモ	<i>Tetragnatha squamata</i>	●	●	●			
-				Tetragnatha 属の一種	<i>Tetragnatha sp.</i>	(●)	(●)	(●)	(●)	(●)
23		コガネグモ科	ヤエンオニグモ	<i>Araneus macacus</i>	●	●	●			
24			ビジョオニグモ	<i>Araneus mitificus</i>		●			●	
25			アオオニグモ	<i>Araneus pentagrammicus</i>		●	●			
26			マルヅメオニグモ	<i>Araneus semilunaris</i>		●		●		
27			コガネグモ	<i>Argiope amoena</i>		●	●			
28			ナガコガネグモ	<i>Argiope bruennichi</i>	●	●		●	●	
29			コガタコガネグモ	<i>Argiope minuta</i>		●		●	●	
-				Argiope 属の一種	<i>Argiope sp.</i>		(●)	(●)	(●)	(●)
30			ギンメッキゴミグモ	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	●	●	●			
31	ヤマトゴミグモ		<i>Cyclosa japonica</i>		●	●				
32	ゴミグモ		<i>Cyclosa octotuberculata</i>		●	●				
33	シロオビトリノフンダマシ		<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i>		●		●			
34	ヨツボシショウジョウグモ		<i>Hypsosinga pygmaea</i>		●		●			
35	コガネグモダマシ	<i>Larinia argiopiformis</i>		●			●			
-		Larinia 属の一種	<i>Larinia sp.</i>		●			●		

表 8.9.14(2) クモ類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		調査時期		
					内	外	春季	夏季	秋季
36	クモ目	コガネグモ科	ドヨウオニグモ	<i>Neoscona adianta</i>	●	●	●	●	●
37			ワキグロサツマノミダマシ	<i>Neoscona mellottei</i>		●		●	
38			イエオニグモ	<i>Neoscona nautica</i>	●				●
39			ヤマシロオニグモ	<i>Neoscona scylla</i>	●	●	●	●	
40			サツマノミダマシ	<i>Neoscona scylloides</i>		●		●	
-			Neoscona 属の一種	<i>Neoscona sp.</i>		(●)		(●)	
-			コガネグモ科の一種	Araneidae	(●)	(●)	(●)		(●)
41		コモリグモ科	エビチャコモリグモ	<i>Arctosa ebicha</i>		●	●		
42			クロココモリグモ	<i>Arctosa subamylacea</i>		●	●	●	
43			ハラクロコモリグモ	<i>Lycosa coelestis</i>	●	●	●	●	●
44	イナダハリゲコモリグモ		<i>Pardosa agraria</i>		●	●	●		
45	ウツキコモリグモ		<i>Pardosa astrigera</i>		●	●	●	●	
46	キクヅキコモリグモ		<i>Pardosa pseudoannulata</i>		●	●		●	
-	Pardosa 属の一種		<i>Pardosa sp.</i>		(●)	(●)	(●)		
47	クラークコモリグモ		<i>Pirata clercki</i>		●	●			
48	キバラコモリグモ		<i>Pirata subpiraticus</i>	●		●			
-	Pirata 属の一種		<i>Pirata sp.</i>		(●)	(●)	●		
49		ヒノマルコモリグモ	<i>Tricca japonica</i>	●	●	●		●	
50	キシダグモ科	イオウイロハシリグモ	<i>Dolomedes sulfureus</i>	●	●	●	●	●	
51		アズマキシダグモ	<i>Pisaura lama</i>		●			●	
52	ササグモ科	ササグモ	<i>Oxyopes sertatus</i>	●	●	●	●	●	
53	シボグモ科	シボグモ	<i>Anahita fauna</i>		●		●		
54	タナグモ科	クサグモ	<i>Agelena silvatica</i>	●	●	●	●		
55		コクサグモ	<i>Allagelena opulenta</i>	●	●		●	●	
-		タナグモ科	Agelenidae	(●)	(●)	(●)	(●)		
56	ハグモ科	ネコハグモ	<i>Dictyna felis</i>	●	●		●	●	
57	ウエムラグモ科	イタチグモ	<i>Itatsina praticola</i>		●			●	
58		Phrurolithus 属の一種	<i>Phrurolithus sp.</i>		●			●	
59	フクログモ科	アシナガコマチグモ	<i>Chiracanthium eutittha</i>		●	●			
-		Chiracanthium 属の一種	<i>Chiracanthium sp.</i>	●	(●)	(●)		●	
60		マダラフクログモ	<i>Clubiona deletrix</i>		●	●		●	
61		ヒメフクログモ	<i>Clubiona kurilensis</i>	●	●	●		●	
62		カギフクログモ	<i>Clubiona pseudogermanica</i>	●				●	
-	Clubiona 属の一種	<i>Clubiona sp.</i>	(●)	(●)	(●)		(●)		
63	ネコグモ科	ネコグモ	<i>Trachelas japonicus</i>						
64	ワシグモ科	ムナキワシグモ	<i>Cladothela unciinsignita</i>		●	●			
65		メキリグモ	<i>Gnaphosa kompirensis</i>		●		●		
-		Gnaphosa 属の一種	<i>Gnaphosa sp.</i>	●		●			
66	アシダカグモ科	コアシダカグモ	<i>Sinopoda forcipata</i>		●			●	
67	エビグモ科	アサヒエビグモ	<i>Philodromus subaureolus</i>	●	●	●			
-		Philodromus 属の一種	<i>Philodromus sp.</i>		(●)	(●)	●		
68		ヤマトヤドカリグモ	<i>Thanatus nipponicus</i>		●			●	
69	カニグモ科	コハナグモ	<i>Diaea subdola</i>		●	●		●	
70		ハナグモ	<i>Ebrechtella tricuspidata</i>	●	●	●	●	●	
71		アズチグモ	<i>Thomisus labefactus</i>	●	●	●	●	●	
72		ヤミイロカニグモ	<i>Xysticus croceus</i>	●	●	●			
73		チュウカカニグモ	<i>Xysticus ephippiatus</i>		●	●			
74		ゾウシキカニグモ	<i>Xysticus saganus</i>		●		●		
-		Xysticus 属の一種	<i>Xysticus sp.</i>	(●)	(●)	(●)	(●)	●	

表 8.9.14(3) クモ類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業 実施区域		調査時期				
					内	外	春季	夏季	秋季		
75	クモ目	ハエトリグモ科	ネコハエトリ	<i>Carrhotus xanthogramma</i>		●			●		
76			ヨダンハエトリ	<i>Marpissa pulla</i>		●	●				
77			オスクロハエトリ	<i>Mendoza canestrinii</i>	●	●	●	●			
78			ヤハズハエトリ	<i>Mendoza elongata</i>	●	●	●	●	●		
-			Mendoza 属の一種	<i>Mendoza sp.</i>		(●)	(●)		(●)		
79			ヤガタアリグモ	<i>Myrmarachne elongata</i>	●	●	●	●	●		
80			ヤサアリグモ	<i>Myrmarachne inermichelis</i>	●	●		●	●		
81			クワガタアリグモ	<i>Myrmarachne kuwagata</i>		●	●	●			
-			Myrmarachne 属の一種	<i>Myrmarachne sp.</i>	(●)	(●)		(●)	(●)		
82			アシプトハエトリ	<i>Pancorius crassipes</i>		●	●				
83			デーニッツハエトリ	<i>Plexippoides doenitzi</i>		●		●			
84			クロツヤハエトリ	<i>Sibianor nigriculus</i>		●		●			
85			キレワハエトリ	<i>Sibianor pullus</i>		●	●				
86			アオオビハエトリ	<i>Siler vittatus</i>	●	●	●	●			
87			シラホシコゲチャハエトリ	<i>Sitticus penicillatus</i>		●			●		
-			ハエトリグモ科の一種	Salticidae		(●)		(●)			
計			1 目	20 科	87 種		38 種	82 種	56 種	44 種	39 種

注1) 種名及び分類は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度版」(令和5年 国土交通省)に準拠した。

注2) (●)は種の同定に至らなかった記録であり、同じグループで確認種がいた場合は種数としてはカウントしていない。

h) 陸産貝類

現地調査での確認種一覧は、表 8.9.15 に示すとおりである。

現地調査では、1目11科30種の陸産貝類が確認された。

対象事業実施区域内では、ホソオカチョウジガイ、ミカワギセル、コハクガイ及びヒラマイマイなどの10種が確認され、対象事業実施区域外ではこれらにナガオカモノアラガイやヒメベッコウなどを加えた30種が確認された。

表 8.9.15 陸産貝類確認種一覧

No.	目名	科名	種名	学名	対象事業実施区域		調査時期	
					内	外	夏季	秋季
1	マイマイ目	アフリカマイマイ科	オカチョウジガイ	<i>Allopeas kyotoense</i>		●	●	●
2			ホソオカチョウジガイ	<i>Allopeas pyrgula</i>	●	●	●	●
3			サツマオカチョウジガイ類似種	<i>Allopeas cf. satsumense</i>		●		●
4			トクサオカチョウジガイ	<i>Paropeas achatinaceum</i>		●	●	●
5		イシノシタ科	ノハラノイシノシタ	<i>Lucilla singleyana</i>		●	●	
6		オカモノアラガイ科	ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i>		●	●	●
7			ヒメオカモノアラガイ	<i>Succinea lyrata</i>		●		●
8		キセルガイ科	ミカワギセル	<i>Stereophaedusa mikawa</i>	●	●	●	●
9			ナミコギセル	<i>Tauphaedusa tau</i>		●	●	●
10		コウラナメクジ科	チャコウラナメクジ類似種	<i>Ambigolimax cf. valentianus</i>		●		●
11		コハクガイ科	コハクガイ	<i>Zonitoides arboreus</i>	●	●		●
12		エゾエンザ科	ヒメコハクガイ	<i>Hawaiiia minuscula</i>	●	●	●	●
13		シタラ科	ヒメベッコウ	<i>Discoconulus sinapidium</i>		●	●	●
14			ヤクシマヒメベッコウ	<i>Discoconulus yakuensis</i>		●	●	●
15			キビガイ	<i>Gastrodontella multivolvis</i>		●	●	●
16			ウスイロシタラ	<i>Parasitala pallida</i>		●	●	
17			マルシタラ	<i>Parasitala reinhardti</i>		●	●	
18			コシタカシタラ	<i>Sitalina circumcincta</i>		●	●	●
19			カサキビ	<i>Trochochlamys crenulata</i>		●		●
20			オオウエキビ	<i>Trochochlamys fraterna</i>		●	●	●
21			ヒメカサキビ	<i>Trochochlamys subcrenulata</i>		●	●	●
22			ベッコウマイマイ科	ウラジロベッコウ	<i>Urazirochlamys doenitzii</i>	●	●	●
23		ナメクジ科	ナメクジ類似種	<i>Meghimatium cf. bilineatum</i>	●	●	●	●
24		ナンバンマイマイ科	ウスカワマイマイ	<i>Acusta sieboldiana</i>	●	●	●	●
25			マメマイマイ類似種	<i>Aegista cf. commoda</i>		●		●
26			オオケマイマイ	<i>Aegista vulgivaga</i>	●	●	●	●
27			オナジマイマイ	<i>Bradybaena similaris</i>	●	●	●	●
28			ヒラマイマイ	<i>Euhadra eoa</i>	●	●	●	●
29			ピロウドマイマイ	<i>Nipponochloritis oscitans</i>		●	●	●
30			ニッポンマイマイ	<i>Satsuma japonica</i>		●	●	●
計	1目	11科	30種		10種	30種	24種	27種

注) 科以上の分類・配列は福田(2021)に準拠し、種の和名や学名は下記を参考とした。

「Biology and Evolution of the Mollusca で提唱された軟体動物の分類体系と和名の対応. Molluscan Diversity 6(2): 89-180.」(令和3年 福田宏)

「陸・淡水産腹足類日本固有種目録(2018年3月版)」(平成30年 亀田勇一)

[https://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot\\_japan/endemic\\_list/](https://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot_japan/endemic_list/)

「MolluscaBase (2022年11月アクセス)」<https://www.molluscabase.org/>

## (2) 動物の重要な種の分布、生息の状況及び生息環境の状況等

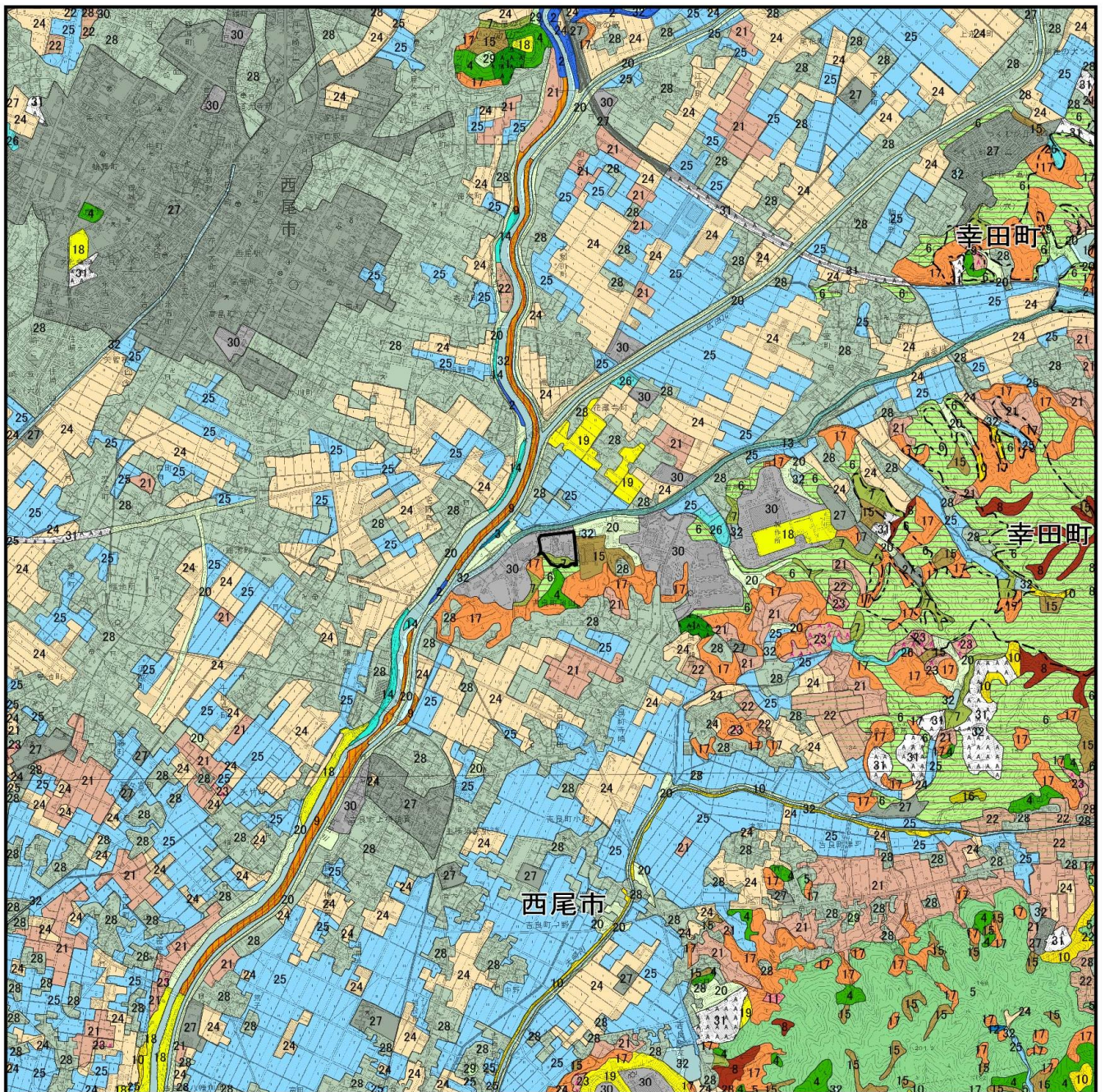
## ① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による動物の調査結果は、「第3章 3.1.8 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況」に示したとおりである。

確認された重要な種のうち、オオタカについて机上調査を実施し、現存植生図及び空中写真などの既存資料から、スギ・ヒノキ植林やシイ・カシ二次林などの高木林の分布状況を確認し、それらをオオタカの生息好適地として抽出した。なお、生息好適地の抽出にあたっては、オオタカの生態なども考慮した。

対象事業実施区域周辺における現存植生図は、図 8.9.4 に示すとおりである。また、対象事業実施区域周辺における空中写真等を判読し、抽出した生息好適地は希少種保護の観点から、非公開とする。



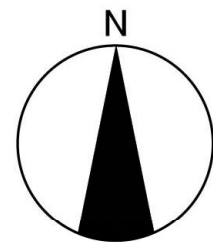


凡例

○ 対象事業実施区域

----- 市町境

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 1 カナメモチーコジイ群集       | 17 竹林                |
| 2 ヤナギ高木群落 (VI)      | 18 ゴルフ場・芝地           |
| 3 ヤナギ低木群落 (VI)      | 19 牧草地               |
| 4 シイ・カシ二次林          | 20 路傍・空地雑草群落         |
| 5 コナラ群落 (VII)       | 21 果樹園               |
| 6 ケネザサーコナラ群集        | 22 茶畑                |
| 7 アカメガシワールカスザンショウ群落 | 23 常緑果樹園             |
| 8 モチツツジアカマツ群集       | 24 畑雑草群落             |
| 9 メダケ群落             | 25 水田雑草群落            |
| 10 ススキ群団 (VII)      | 26 放棄水田雑草群落          |
| 11 伐採跡地群落 (VII)     | 27 市街地               |
| 12 ヨシクラス            | 28 緑の多い住宅地           |
| 13 ツルヨシ群集           | 29 残存・植栽樹群をもった公園、墓地等 |
| 14 オギ群集             | 30 工場地帯              |
| 15 スギ・ヒノキ・サワラ植林     | 31 造成地               |
| 16 その他植林(常緑広葉樹)     | 32 開放水域              |



1:40,000



出典：「第6、7回自然環境保全基礎調査」（環境省生物多様性センターホームページ）  
この地図は、国土地理院発行の1：25,000地形図「西尾」「吉田」を使用したものである。

図 8.9.4 現存植生図



② 現地調査

調査結果を踏まえ、表 8.9.16 に示す基準により重要な種の抽出を行うとともに、重要な種及び注目すべき生息地の状況等を把握した。

表 8.9.16 重要な種及び注目すべき生息地の選定基準

番号	法令・文献等	選定基準
I	「文化財保護法」 「愛知県文化財保護条例」 「西尾市文化財保護条例」 「幸田町文化財保護条例」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別天然記念物（特天）</li> <li>・国指定天然記念物（国天）</li> <li>・愛知県指定天然記念物（県天）</li> <li>・西尾市指定天然記念物（市天）</li> <li>・幸田町指定天然記念物（町天）</li> </ul>
II	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際希少野生動植物種（国際）</li> <li>・国内希少野生動植物種（国内）</li> <li>・特定第一種国内希少野生動植物種（特1）</li> <li>・特定第二種国内希少野生動植物種（特2）</li> <li>・緊急指定種（緊急）</li> </ul>
III	「環境省レッドリスト2020」 (令和2年3月27日 環境省報道発表資料)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）</li> <li>・絶滅危惧ⅠA類（CR）</li> <li>・絶滅危惧ⅠB類（EN）</li> <li>・絶滅危惧Ⅱ類（VU）</li> <li>・準絶滅危惧（NT）</li> <li>・情報不足（DD）</li> <li>・地域個体群（LP）</li> </ul>
IV	「レッドリストあいち2020」（令和2年3月 愛知県）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絶滅危惧ⅠA類（CR）</li> <li>・絶滅危惧ⅠB類（EN）</li> <li>・絶滅危惧Ⅱ類（VU）</li> <li>・準絶滅危惧（NT）</li> <li>・情報不足（DD）</li> <li>・地域個体群（LP）</li> </ul>
V	「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指定希少野生動植物種（希少）</li> </ul>

a) 哺乳類

調査結果を踏まえ、表 8.9.16 に示した基準により重要な種の抽出を行ったが、対象事業実施区域及びその周辺では、重要な種は確認されなかった。

b) 鳥類

鳥類の重要な種一覧は、表 8.9.17 に示すとおりであり、6目10科16種の重要な種が確認された。詳細は、資料編「資料7-2 重要な種の概要」に示すとおりである。

なお、オオタカは対象事業実施区域周辺で繁殖しており、対象事業実施区域及びその周辺を行動圏として利用していることが明らかになった。また、営巣地は確認されていないものの、繁殖期にフクロウの鳴き声が確認されたことから、フクロウも対象事業実施区域周辺で繁殖していると考えられる。

表 8.9.17 重要な種一覧（鳥類）

No.	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	ツル目	クイナ科	クイナ				越：NT			●
2			ヒクイナ			NT	繁：NT/通：NT			●
3			バン				繁：VU/越：NT			●
4	チドリ目	チドリ科	ケリ			DD				●
5	タカ目	ミサゴ科	ミサゴ			NT	繁：NT			●
6		タカ科	チュウヒ		国内	EN	繁：CR/越：VU			●
7			ツミ				繁：NT			●
8			ハイタカ			NT				●
9			オオタカ			NT	繁：NT/越：NT		●	●
10			サシバ			VU	繁：EN/通：NT		●	●
11	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ				繁：NT/越：NT			●
12	ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ		国内	VU	繁：VU/越：NT		●	●
13	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ			VU				●
14		ミソサザイ科	ミソサザイ				繁：NT			●
15		ヒタキ科	アカハラ				繁：CR			●
16		ホオジロ科	ホオアカ				繁：CR			●
計	6目	10科	16種	0種	2種	9種	13種	0種	3種	16種

注1) 選定基準のI～Vは表 8.9.16の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。

注2) 種名及び配列は「日本鳥類目録第7版」(平成24年9月 日本鳥学会)に準拠した。



c) 昆虫類

昆虫類の重要な種一覧は、表 8.9.18 に示すとおりであり、5目10科10種の重要な種が確認された。詳細は、資料編「資料7-2 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.9.18 重要な種一覧（昆虫類）

No	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	ゴキブリ	オオゴキブリ	オオゴキブリ				NT			●
2	カメムシ	タイコウチ	ヒメタイコウチ				NT		●	●
3		コオイムシ	コオイムシ			NT				●
4		アメンボ	エサキアメンボ			NT	NT			●
5	コウチュウ	ゲンゴロウ	コマルケシゲンゴロウ			NT				●
6		ガムシ	コガムシ			DD				●
7		ハネカクシ	オオツノハネカクシ			DD	VU			●
8	ハチ	スズメバチ	ヤマトアシナガバチ			DD				●
9	チョウ	ドクガ	スゲドクガ			NT				●
10		ヤガ	キシタアツバ			NT				●
計	5目	10科	10種	0種	0種	8種	4種	0種	1種	10種

注1) 選定基準のI~Vは表 8.9.16の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。  
注2) 目名の配列は、「新訂原色昆虫大圖鑑」(2008年 北隆館)に示される「昆虫の起源と種数」(2003年 森本)の要約に準拠した。また、科以下の配列及び種名は、原則として「日本産野生生物目録-無脊椎動物編II」(1995年 環境庁)を参考としたが、コウチュウ目及びチョウ目については、「日本昆虫目録」(日本昆虫学会)に準拠した。

d) 両生類、爬虫類

両生類の重要な種一覧は表 8.9.19 に、爬虫類の重要な種一覧は表 8.9.20 に示すとおりであり、それぞれ1目1科1種の重要な種が確認された。詳細は、資料編「資料7-2 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.9.19 重要な種一覧（両生類）

No	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	無尾目	アカガエル科	トノサマガエル			NT			●	●
計	1目	1科	1種	0種	0種	1種	0種	0種	1種	1種

注1) 選定基準のI~Vは表 8.9.16の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。  
注2) 種名及び配列は以下の出典を参考とした。  
「日本の両生爬虫類」(平成14年 内山りゅうら)

表 8.9.20 重要な種一覧（爬虫類）

No	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	カメ目	イシガメ科	ニホンイシガメ			NT	NT		●	●
計	1目	1科	1種	0種	0種	1種	1種	0種	1種	1種

注1) 選定基準のI~Vは表 8.9.16の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。  
注2) 種名及び配列は以下の出典を参考とした。  
「日本の両生爬虫類」(平成14年 内山りゅうら)

e) 魚類

調査結果を踏まえ、表 8.9.16 に示した基準により重要な種の抽出を行ったが、対象事業実施区域及びその周辺では、重要な種は確認されなかった。

f) 底生動物

調査結果を踏まえ、表 8.9.16 に示した基準により重要な種の抽出を行ったが、対象事業実施区域及びその周辺では、重要な種は確認されなかった。

g) クモ類

クモ類の重要種一覧は、表 8.9.21 に示すとおりであり、1目2科3種の重要な種が確認された。詳細は、資料編「資料7-2 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.9.21 重要な種一覧（クモ類）

No	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	クモ	コガネグモ	コガネグモ				NT			●
2			シロオビトリノフンダマシ				NT			●
3		コモリグモ	エビチャコモリグモ				EN			●
計	1目	2科	3種	0種	0種	0種	3種	0種	0種	3種

注1) 選定基準のI~Vは表 8.9.16 の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。  
 注2) 種名及び配列は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 令和5年度版」(令和5年 国土交通省)に準拠した。

h) 陸産貝類

陸産貝類の重要な種一覧は、表 8.9.22 に示すとおりであり、1目4科5種の重要な種が確認された。詳細は、資料編「資料7-2 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.9.22 重要な種一覧（陸産貝類）

No	目名	科目	種名	選定基準					対象事業実施区域	
				I	II	III	IV	V	内	外
1	マイマイ目	オカモノアラガイ科	ナガオカモノアラガイ			NT	NT			●
2		キセルガイ科	ミカワギセル			NT	NT		●	●
3		シタラ科	オオウエキビ			DD				●
4			ヒメカサキビ			NT	NT			●
5		ナンバンマイマイ科	ピロウドマイマイ			DD	NT			●
計	1目	4科	5種	0種	0種	5種	4種	0種	1種	5種

注1) 選定基準のI~Vは表 8.9.16 の番号と対応し、当該法令・文献における指定状況を示している。  
 注2) 科以上の分類・配列は福田(2021)に準拠し、種の和名や学名は下記を参考とした。  
 「Biology and Evolution of the Mollusca で提唱された軟体動物の分類体系と和名の対応. Molluscan Diversity 6(2): 89-180.」(令和3年 福田宏)  
 「陸・淡水産腹足類日本固有種目録(2018年3月版)」(平成30年 亀田勇一)  
[https://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot\\_japan/endemic\\_list/](https://www.kahaku.go.jp/research/activities/project/hotspot_japan/endemic_list/)  
 「MolluscaBase (2022年11月アクセス)」<https://www.molluscabase.org/>

- (3) 注目すべき生息地の分布並びに当該生息地が注目される理由である動物の種の生息の状況及び生息環境の状況

対象事業実施区域及びその周辺では、特に多様な種の生息地である、又は重要な種が多く生息する等の注目すべき生息地は確認されなかった。

- (4) 代償措置を検討する場合における対象となる動物の特性や現生息地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況

対象事業実施区域及びその周辺では、代償措置を検討する対象となる動物は確認されなかった。

8.9.2 予測

予測の対象は表 8.9.23 のとおり、調査で生息が確認された動物の重要な種とした。

表 8.9.23 予測対象種

区分	種数	現地で確認された重要な種
哺乳類	—	確認種なし
鳥類	6目10科16種	クイナ、ヒクイナ、バン、ケリ、ミサゴ、チュウヒ、ツミ、ハイタカ、オオタカ、サシバ、フクロウ、ハヤブサ、サンショウクイ、ミソサザイ、アカハラ、ホオアカ
昆虫類	5目10科10種	オオゴキブリ、ヒメタイコウチ、コオイムシ、エサキアメンボ、コマルケシゲンゴロウ、コガムシ、オオツノハネカクシ、ヤマトアシナガバチ、スゲドクガ、キシタアツバ
両生類	1目1科1種	トノサマガエル
爬虫類	1目1科1種	ニホンイシガメ
魚類	—	確認種なし
底生動物	—	確認種なし
クモ類	1目2科3種	コガネグモ、シロオビトリノフンダマシ、エビチャコモリグモ
陸産貝類	1目4科5種	ナガオカモノアラガイ、ミカワギセル、オオウエキビ、ヒメカサキビ、ビロウドマイマイ

8.9.2.1 工事の実施

(1) 予測方法

① 予測事項

予測事項は、表 8.9.24 に示すとおりである。

なお、既存の工作物等の除去と比べて動物への影響が大きくなると考えられる掘削・盛土等の土工を予測対象となる要因とした。

表 8.9.24 予測事項（建設機械の稼働等及び掘削・盛土等の土工）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
建設機械の稼働等	動物やその生息環境への影響	建設機械の稼働等に伴い発生する騒音・振動に対する哺乳類や鳥類の忌避行動
掘削・盛土等の土工		掘削・盛土等の土工に伴い発生する生息環境への直接改変及び生息環境の変化

② 予測地域

予測地域は、調査地域のうち動物の生息の特性を踏まえて、重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約300mの範囲を基本とした。なお、行動範囲の広い種については、生態的特性を考慮し、適切な予測地域を選定した。

③ 予測対象時期

予測対象時期は、動物の生息の特性を踏まえて重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を的確に把握できる時期として、動物へ及ぼす影響が最も大きくなる時期である掘削等の土工の時期とした。

④ 予測方法

予測方法は、重要な種及び注目すべき生息地について、事業計画の策定時における環境配慮事項を踏まえた上で定性的に予測した。

(2) 予測結果

① 哺乳類

重要な種の生息が確認されなかったことから、工事の実施による哺乳類への影響はないものと予測する。

② 鳥類

a) オオタカ

予測対象種のうち繁殖が確認されたオオタカについて、行動圏解析を行った（解析方法はマニュアルによった）。行動圏解析結果は、表 8.9.25 に示すとおりである。

営巣中心域は、令和5年に幼鳥の飛翔が古巣周辺で確認されたことから、古巣及びR5営巣地から300mの範囲内にある樹林地とした。対象事業実施区域内には高利用域が0.45%、営巣中心域が3.64%含まれているものの、いずれも工事の実施による改変はない。よって、工事によるオオタカへの影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.25 行動圏解析結果

項目	面積・距離等
行動圏(R5営巣地から3km)の面積	2,827.31ha
うち樹林地面積	303.43ha
うち主要な採食地面積	189.54ha
高利用域の面積	990.95ha
うち対象事業実施区域内の面積	約4.5ha
高利用域の割合	0.45%
営巣中心域の面積	24.47ha
うち対象事業実施区域内の面積	0.89ha
営巣中心域の割合	3.64%

b) 予測対象種（オオタカ含む。）

予測対象種について、建設機械の稼働等及び掘削・盛土等の土工による影響を予測した。その結果は表 8.9.26 に示すとおりである。

予測対象種のうち、クイナ、ヒクイナ、バン、ケリ、ミサゴ、チュウヒ、ツミ、ハヤブサ、サンショウクイ、ミソサザイ、アカハラ、ホオアカについては主要な生息環境は対象事業実施区域外であり、工事の実施による主要な生息環境の改変はない。

ハイタカについては、対象事業実施区域周辺を越冬地として利用していると考えられるが、工事の実施による主要な利用範囲の改変はない。

オオタカについては、対象事業実施区域周辺での繁殖が確認され、対象事業実施区域内には高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、いずれも工事の実施による改変はない。

サシバについては、対象事業実施区域周辺を渡りのルートとして利用していると考えられるが、工事の実施による主要な利用範囲の改変はない。

フクロウについては、対象事業実施区域周辺で繁殖をしている可能性が考えられる。また、確認箇所及びその周辺の樹林地を採餌場所等として利用していると考えられるが、該当箇所は工事の実施による改変はない。

なお、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努め、仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する。

以上のことから、工事の実施による鳥類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.26 予測対象種の確認状況及び予測結果（鳥類）

種名	確認状況	予測結果
クイナ ヒクイナ バン ケリ ミサゴ チュウヒ ツミ ハヤブサ サンショウクイ ミソサザイ アカハラ ホオアカ	対象事業実施区域外で確認された。	【建設機械の稼働等】 現在も既存施設の稼働による騒音がある状況であることから、建設機械の稼働による影響は極めて小さいものと予測する。 【掘削・盛土等の土工】 工事の実施により主要な生息環境は改変されない。また、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから、掘削・盛土等の土工による影響は極めて小さいものと予測する。
ハイタカ	猛禽類調査時に対象事業実施区域南側の樹林上空で確認され、対象事業実施区域周辺で越冬していると考えられる。	【建設機械の稼働等】 現在も既存施設の稼働による騒音がある状況であることから、建設機械の稼働による影響は極めて小さいものと予測する。 【掘削・盛土等の土工】 対象事業実施区域周辺を越冬地として利用していると考えられるが、工事の実施により主要な利用範囲と考えられる河川敷や周辺の耕作地等は改変されない。また、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから、掘削・盛土等の土工による影響は極めて小さいものと予測する。
オオタカ	春季、繁殖期、秋季、猛禽類調査時など、ほぼ周年で確認された。対象事業実施区域周辺の樹林地で繁殖が確認され、2羽の幼鳥が確認された。	【建設機械の稼働等】 現在も既存施設の稼働による騒音がある状況であることから、建設機械の稼働による影響は極めて小さいものと予測する。 【掘削・盛土等の土工】 対象事業実施区域内における狩場などの利用はなく、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、いずれも工事による改変はない。さらに、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから、掘削・盛土等の土工による影響は極めて小さいものと予測する。
サシバ	春季及び猛禽類調査時に確認されているが、いずれも移動中と考えられる個体が確認される程度であったことから、対象事業実施区域周辺を渡りのルートとして利用していると考えられる。	【建設機械の稼働等】 現在も既存施設の稼働による騒音がある状況であることから、建設機械の稼働による影響は極めて小さいものと予測する。 【掘削・盛土等の土工】 対象事業実施区域周辺を渡りのルートとして利用していると考えられるが、工事の実施による主要な利用範囲と考えられる樹林地の改変はない。また、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから、掘削・盛土等の土工による影響は極めて小さいものと予測する。
フクロウ	令和5年2月に実施したフクロウ調査時に、対象事業実施区域南側の樹林地で確認された。	【建設機械の稼働等】 現在も既存施設の稼働による騒音がある状況であることから、建設機械の稼働による影響は極めて小さいものと予測する。 【掘削・盛土等の土工】 対象事業実施区域周辺で繁殖をしている可能性が考えられる。また、確認箇所及びその周辺の樹林地を採餌場所等として利用していると考えられるが、該当箇所は工事の実施による改変はない。また、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから、掘削・盛土等の土工による影響は極めて小さいものと予測する。

③ 昆虫類

予測対象種について、掘削・盛土等の土工による影響を予測した。その結果は表 8.9.27 に示すとおりである。

予測対象種のうち、ヒメタイコウチについては、対象事業実施区域内での繁殖が確認されているものの、工事の実施による確認箇所の改変はない。

オオゴキブリ、コガムシ、オオツノハネカクシ、ヤマトアシナガバチ、スゲドクガ及びキシタアツバについては対象事業実施区域外で確認されており、工事の実施による主要な生息環境の改変はない。

コオイムシ、エサキアメンボ及びコマルケシゲンゴロウについては、対象事業実施区域内で生息している可能性が考えられるものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残る。

なお、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

以上のことから、工事の実施による昆虫類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.27 予測対象種の確認状況及び予測結果（昆虫類）

種名	確認状況	予測結果
オオゴキブリ コガムシ オオツノハネカクシ ヤマトアシナガバチ スゲドクガ キシタアツバ	対象事業実施区域外で確認された。	対象事業実施区域内では確認されておらず、工事の実施により主要な生息環境は改変されないことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。
ヒメタイコウチ	事前踏査、春季及び秋季調査時に対象事業実施区域内の湿地環境で成虫及び幼虫が複数個体確認され、対象事業実施区域内で繁殖しているものと考えられる。なお、夏季調査時に対象事業実施区域西側の湿地環境でも確認されたが、確認個体数は1個体のみであった。	対象事業実施区域内の確認箇所は、継続的に安定した生息地であると考えられ、工事の実施による改変はない。また、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。
コオイムシ	対象事業実施区域周辺の水域で確認され、対象事業実施区域外で繁殖しているものと考えられる。また、ライトトラップ調査で飛来個体を確認した。	対象事業実施区域内においても生息している可能性が考えられるものの、生息環境となりうる箇所は工事の実施により改変されない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることや、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。以上のことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。
エサキアメンボ コマルケシゲンゴロウ	対象事業実施区域周辺の水域で確認された。	対象事業実施区域内においても生息している可能性が考えられるものの、生息環境となりうる箇所は工事の実施により改変されない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることや、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。以上のことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

④ 両生類、爬虫類

予測対象種について、掘削・盛土等の土工による影響を予測した。その結果は表 8.9.28 及び表 8.9.29 に示すとおりである。

トノサマガエル及びニホンイシガメは、対象事業実施区域内で確認されているものの工事の実施による確認箇所の改変はない。

また、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

以上のことから、工事の実施による両生類及び爬虫類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.28 予測対象種の確認状況及び予測結果（両生類）

種名	確認状況	予測結果
トノサマガエル	春季から秋季に対象事業実施区域内及び対象事業実施区域外の止水域など複数個所で確認されており、夏季には幼体も確認されている。	夏季に対象事業実施区域内で2個体確認されているものの、工事の実施による確認箇所の改変はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることや、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。以上のことから工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.29 予測対象種の確認状況及び予測結果（爬虫類）

種名	確認状況	予測結果
ニホンイシガメ	秋季に対象事業実施区域内で幼体が確認されたことから、対象事業実施区域及びその周辺で繁殖しているものと考えられる。また、その他調査時に対象事業実施区域南側の止水域で確認された。	秋季に対象事業実施区域内で確認されているものの、工事の実施による確認箇所の改変はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることや、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。以上のことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

⑤ 魚類

重要な種の生息が確認されなかったことから、工事の実施による魚類への影響はないものと予測する。

⑥ 底生動物

重要な種の生息が確認されなかったことから、工事の実施による底生動物への影響はないものと予測する。



⑦ クモ類

予測対象種について、掘削・盛土等の土工による影響を予測した。その結果は表 8.9.30 に示すとおりである。

予測対象種は、いずれも対象事業実施区域外で確認されており、工事の実施による主要な生息環境の改変はないことから、工事の実施によるクモ類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.30 予測対象種の確認状況及び予測結果（クモ類）

種名	確認状況	予測結果
コガネグモ シロオビトリノフンダマシ エビチャコモリグモ	対象事業実施区域外で確認された。	対象事業実施区域内では確認されておらず、工事の実施により主要な生息環境は改変されないことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

⑧ 陸産貝類

予測対象種について、掘削・盛土等の土工による影響を予測した。その結果は表 8.9.31 に示すとおりである。

予測対象種のうち、ナガオカモノアラガイ、オオウエキビ、ヒメカサキビ及びビロウドマイマイについては対象事業実施区域外で確認されており、工事の実施による主要な生息環境の改変はない。

ミカワギセルについては、生息環境の一部が工事の実施により改変されるものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残る。

なお、工事にあたっては改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

以上のことから、工事の実施による陸産貝類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.31 予測対象種の確認状況及び予測結果（陸産貝類）

種名	確認状況	予測結果
ナガオカモノアラガイ オオウエキビ ヒメカサキビ ビロウドマイマイ	対象事業実施区域外で確認された。	確認地点はいずれも対象事業実施区域外であり、その生息環境は改変されないことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。
ミカワギセル	夏季及び秋季調査時に対象事業実施区域内の植栽帯の林床及び対象事業実施区域南側の樹林の林床などで複数個体確認された。	対象事業実施区域内で確認されており、生息環境の一部が工事の実施により改変されるものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残る。また、工事にあたっては改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。以上のことから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

### 8.9.2.2 施設の存在

#### (1) 予測方法

##### ① 予測事項

予測事項は表 8.9.32 に示すとおりである。

なお、地形改変による影響については、「8.9.2.1 工事の実施」に示した内容と同様であり、供用時は施設の存在による影響を予測する。

表 8.9.32 予測事項（地形の改変並びに施設の存在）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
施設の存在	動物やその生息環境への影響	施設の存在による生息地の減少及び分断

##### ② 予測地域

予測地域は、調査地域のうち動物の生息の特性を踏まえて重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約300mの範囲を基本とした。なお、行動範囲の広い種については、生態的特性を考慮し、適切な予測地域を選定した。

##### ③ 予測対象時期

予測対象時期は、動物の生息の特性を踏まえて重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響を的確に把握できる時期として、計画施設の稼働が定常の状態となる時期とした。

##### ④ 予測方法

予測方法は、重要な種及び注目すべき生息地について、定性的に予測した。

#### (2) 予測結果

##### ① 哺乳類

哺乳類の重要な種の生息が確認されなかったことから、施設の存在による哺乳類の重要な種及び注目すべき生息地への影響はないものと予測する。

② 鳥類

予測対象種について、施設の存在による影響を予測した。その結果は表 8.9.33 に示すとおりである。

予測対象種のうちオオタカ以外の種については、生息環境の変化はない。オオタカについては、施設の存在に伴い行動圏の一部が改変されるが、その割合は極めて小さい。

以上のことから、施設の存在による鳥類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.33 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（鳥類）

種名	予測結果
クイナ、ヒクイナ、バン、ケリ、ミサゴ、チュウヒ、ツミ、ハヤブサ、サンショウクイ、ミソサザイ、アカハラ、ホオアカ	生息環境は対象事業実施区域から離れており、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
ハイタカ	主要な利用範囲と考えられる河川敷や周辺の耕作地等は対象事業実施区域外であり、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
オオタカ	対象事業実施区域周辺で繁殖が確認され、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
サシバ	主要な利用範囲と考えられる樹林地は対象事業実施区域外であり、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
フクロウ	確認箇所及び採餌場所と考えられる樹林地は対象事業実施区域から離れており、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

③ 昆虫類

予測対象種について、施設の存在による影響を予測した。その結果は表 8.9.34 に示すとおりである。

予測対象種のうちオオゴキブリ、コガムシ、オオツノハネカクシ、ヤマトアシナガバチ、スゲドクガ及びキシタアツバについては、生息環境の変化はない。ヒメタイコウチについては、対象事業実施区域内で確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はない。コオイムシ、エサキアメンボ及びコマルケシゲンゴロウについては対象事業実施区域内においても生息している可能性が考えられるものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残る。

以上のことから、施設の存在による昆虫類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.34 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（昆虫類）

種名	予測結果
オオゴキブリ、コガムシ、オオツノハネカクシ、ヤマトアシナガバチ、スゲドクガ、キシタアツバ	生息環境は対象事業実施区域から離れており、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
ヒメタイコウチ	対象事業実施区域内で確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
コオイムシ エサキアメンボ コマルケシゲンゴロウ	対象事業実施区域内においても生息している可能性が考えられるものの、施設の存在に伴う生息環境となりうる箇所の変化はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

④ 両生類、爬虫類

予測対象種について、施設の存在による影響を予測した。その結果は表 8.9.35 及び表 8.9.36 に示すとおりである。

予測対象種であるトノサマガエル及びニホンイシガメの生息環境に対する、施設の存在による変化はないことから、施設の存在による両生類及び爬虫類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.35 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（両生類）

種名	予測結果
トノサマガエル	対象事業実施区域内で確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.36 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（爬虫類）

種名	予測結果
ニホンイシガメ	対象事業実施区域内で幼体が確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

⑤ 魚類

魚類の重要な種の生息が確認されなかったことから、施設の存在による魚類の重要な種及び注目すべき生息地への影響はないものと予測する。

⑥ 底生動物

底生動物の重要な種の生息が確認されなかったことから、施設の存在による底生動物の重要な種及び注目すべき生息地への影響はないものと予測する。

⑦ クモ類

予測対象種について、施設の存在による影響を予測した。その結果は表 8.9.37 に示すとおりである。

予測対象種の生息環境に対する、施設の存在による変化はないことから、施設の存在によるクモ類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.37 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（クモ類）

種名	予測結果
コガネグモ シロオビトリノフンダマシ エビチャコモリグモ	確認地点はいずれも対象事業実施区域外であり、施設の存在による生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

⑧ 陸産貝類

予測対象種について、施設の存在による影響を予測した。その結果は表 8.9.38 に示すとおりである。

予測対象種のうちナガオカモノアラガイ、オオウエキビ、ヒメカサキビ及びビロウドマイマイについては、生息環境の変化はない。ミカワギセルについては、施設の存在により生息環境の一部は改変されるものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残る。

以上のことから、施設の存在による陸産貝類への影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.9.38 施設の存在に伴う予測対象種への影響に係る予測結果（陸産貝類）

種名	予測結果
ナガオカモノアラガイ オオウエキビ ヒメカサキビ ビロウドマイマイ	確認地点はいずれも対象事業実施区域外であり、施設の存在による生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。
ミカワギセル	施設の存在により、生息地は減少するものの、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

**8.9.3 評価**

**8.9.3.1 評価方法**

(1) 環境影響の回避・低減による評価

工事の実施及び施設の存在による動物の重要な種及び注目すべき生息地（以下「重要な動物等」という。）に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避又は低減されているかどうかについて評価した。

**8.9.3.2 環境保全措置**

(1) 工事の実施

① 建設機械の稼働等及び掘削・盛土等の土工

事業計画の策定時における環境配慮事項のうち、予測に反映されている環境配慮事項は以下のとおりである。

- ・工事中は、排出ガス対策型及び低騒音型の建設機械の使用に努め、仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する。
- ・改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

また、工事の実施に伴う重要な動物等への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.9.39(1)、(2)に示すとおりである。

なお、今後重要な種の環境保全措置を検討する必要がある場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.9.39(1) 環境保全措置（建設機械の稼働等）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
建設機械の作業待機時におけるアイドルングストップを徹底する。	事業者	動物全般への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
工事関係者に対し定期的に地域の自然環境や周辺環境への配慮事項について講習・指導を行う。	事業者	動物全般への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。

表 8.9.39(2) 環境保全措置（掘削・盛土等の土工）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
コンクリート工事による排水は、必要に応じて中和処理等を行う。	事業者	水域・水辺に依存する動物への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
台風、集中豪雨等が予想される場合には土工事は行わない。	事業者	水域・水辺に依存する動物への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
必要に応じて造成面へのシート、土嚢による養生等を行う。	事業者	水域・水辺に依存する動物への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
堆砂容量を確保するために、必要に応じて仮設沈砂池の堆砂を除去するなど維持管理に努め、適切に濁水対策を実施する。	事業者	水域・水辺に依存する動物への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
現地調査において確認されたヒメタイコウチについて、生息環境の保護に努める。	事業者	ヒメタイコウチへの影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。

## (2) 施設の存在

施設の存在に伴う重要な動物等への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.9.40 に示すとおりである。

なお、今後重要な種の環境保全措置を検討する必要がある場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.9.40 環境保全措置（施設の存在）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
植栽樹木の選定にあたっては、鳥類や昆虫類等の餌となる実をつけたり、樹液を出すような在来種（郷土種）を採用する。	事業者	動物全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
施設では不要な照明の早期消灯、昆虫類の誘因性が低いとされるナトリウム灯・LED等の使用に努めるとともに、可能な限り、照明の向きを建物側に向ける等の対策により、夜行性動物類の行動や生態系の攪乱防止に努める。	事業者	動物全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
現地調査において確認されたヒメタイコウチについて、生息環境の保護に努める。	事業者	ヒメタイコウチへの影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。

### 8.9.3.3 評価結果

#### (1) 工事の実施

予測対象種のうち対象事業実施区域周辺で繁殖が確認されたオオタカについては、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、工事の実施による改変はない。また、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、工事の実施による影響は極めて小さいものと判断する。

対象事業実施区域内で繁殖が確認されたヒメタイコウチについては、確認箇所は工事の実施により改変されない。また、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、工事の実施による影響は極めて小さいものと判断する。

対象事業実施区域外で繁殖していると考えられるフクロウ及びコオイムシ、対象事業実施区域及びその周辺で繁殖していると考えられるニホンイシガメを含むその他の予測対象種については、対象事業実施区域を生息環境として利用している種がいるものの、主要な生息環境は対象事業実施区域外でも確認されており、これらは改変されない。また、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、工事の実施による影響は極めて小さいものと判断する。

さらに、環境保全措置を実施することから、重要な動物等に係る環境影響は事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られている。

#### (2) 施設の存在

重要な動物等のうち対象事業実施区域周辺で繁殖が確認されたオオタカについては、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと判断する。

対象事業実施区域内で繁殖が確認されたヒメタイコウチについては、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと判断する。

オオタカ及びヒメタイコウチ以外の予測対象種については、対象事業実施区域を生息環境として利用している種がいるものの、主要な生息環境は対象事業実施区域外でも確認され、施設の存在に伴う生息環境の変化はない。また、施設の上空又は周辺を移動することにより、生息環境への移動は妨げられる可能性は低いと考えられることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと判断する。

さらに、環境保全措置を実施することから、重要な動物等に係る環境影響が事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られている。



## 8.10 植物



## 8.10 植物

### 8.10.1 調査

#### 8.10.1.1 調査方法

##### (1) 調査項目

植物の調査項目は、表 8.10.1 に示すとおりである。

表 8.10.1 植物の調査項目

調査項目	文献その他の資料調査	現地調査
維管束植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況	植物相	○
	水生植物相	○
	植生	○
重要な種及び群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況	○	○
特に重要で、なおかつ大きな影響を受けるおそれがある種が存在する場合におけるその種の集団構造及び繁殖特性	○	○
代償措置を検討する場合における対象となる植物の特性、現生育地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況	—	○

##### (2) 調査地域

調査地域は、植物の生育及び植生の特性を踏まえて、重要な種及び群落に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300m の範囲とし、図 8.10.1 に示すとおりとした。

##### (3) 調査方法

###### ① 文献その他の資料調査

対象事業実施区域及びその周辺等における植物の生育状況について、文献その他の資料を収集・整理した。

###### ② 現地調査

###### a) 調査期間

植物の調査期間は、表 8.10.2 に示すとおりである。

表 8.10.2 植物の調査期間

調査項目	調査日	
	植物相	早春季
春季		令和 5 年 5 月 18 日 (木)
夏季		令和 5 年 7 月 21 日 (金)
秋季		令和 5 年 9 月 28 日 (木)
植生	秋季	令和 5 年 9 月 28 日 (木)
水生植物相	春季	令和 5 年 5 月 18 日 (木)
	夏季	令和 5 年 7 月 21 日 (金)
	秋季	令和 5 年 9 月 28 日 (木)

注) 上記のほか、夏季(令和 5 年 7 月 21 日(金))に植生に関する補足調査を実施した。

b) 調査地点

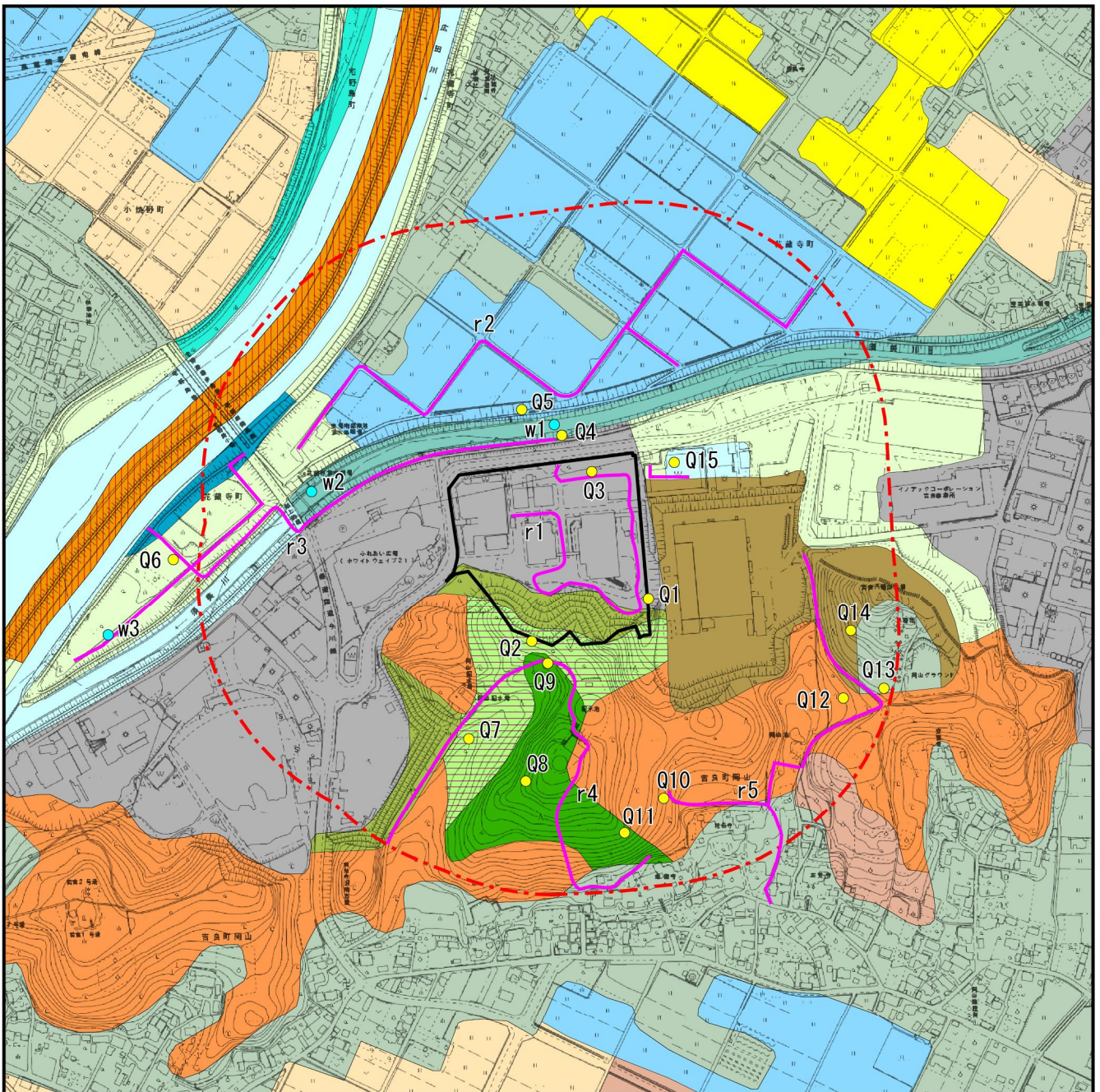
調査地点は、図 8.10.1 に示すとおりであり、調査地域の植物群落を空中写真及び現地踏査から優占種等の外観により区分し、各群落を代表していると考えられる地点とした。

c) 調査方法

植物の調査方法は、表 8.10.3 に示すとおりである。

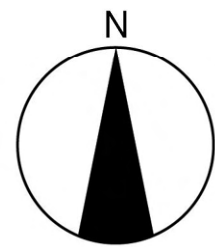
表 8.10.3 植物の調査方法

調査項目	調査方法	詳細説明
植物相	任意観察調査	調査地域を任意に踏査し、出現する植物種を記録した。重要な種を確認した場合は位置及び確認状況を記録した。
水生植物相	任意観察調査	調査地域の水生植物相調査地点付近を任意に踏査し、出現する水生植物種を記録した。
植生	植生図作成調査 植生調査 (コドラート法)	<p>コドラート（方形の調査区）を設定し、植物社会学的手法に基づく植生調査を実施した。</p> <p>植生調査の手順を以下に示す。</p> <p>①調査区の設定 調査地域の植物群落を、空中写真及び現地踏査から優占種等の外観により区分し、種組成的にも区分した植物集団を代表していると考えられる地点においてコドラートを設定した。 各コドラートの設定に際しては、各植物集団の平均植生高を目安に面積や一辺の長さを決定した。</p> <p>②立地環境の把握 調査地点の地形、土壌、斜面方位及び傾斜角度、風当たり、日当たり、土湿等の立地環境条件を把握した。</p> <p>③階層区分の把握 コドラート内の植物集団を、その植生高の違いから高木層、亜高木層、低木層、草本層に区分し、階層別に優占種、高さ（m）、植被率（%）を把握した。</p> <p>④出現種及び被度・群度の判定 コドラート内を踏査して各階層別に出現した全種を記録し、ブラウン・ブランケの全推定法により被度（優占度）と群度（個体数密度）を判定した。</p>

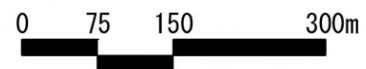


凡例 この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和3年11月閲覧)」を使用したものである。

- |   |  |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li> 対象事業実施区域</li> <li> 調査地域</li> <li> 植生調査地点(Q)</li> <li> 水生植物調査地点(w)</li> <li> 任意踏査ルート(r)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li> ヤナギ低木群落 (V I)</li> <li> シイ・カシ二次林</li> <li> ケネザサーコナラ群集</li> <li> アカメガシワーカーラスザンショウ群落</li> <li> メダケ群落</li> <li> ツルヨシ群集</li> <li> オギ群集</li> <li> スギ・ヒノキ・サワラ植林</li> <li> 竹林</li> <li> 牧草地</li> <li> 路傍・空地雑草群落</li> <li> 果樹園</li> <li> 畑雑草群落</li> <li> 水田雑草群落</li> <li> 緑の多い住宅地</li> <li> 工場地帯</li> <li> 開放水域</li> </ul> |
|---|--|



1:7,500



出典：  
「第6回、7回自然環境保全基礎調査」  
(環境省生物多様性センターホームページ)

図 8.10.1 植物調査地点

**8.10.1.2 調査結果**

(1) 維管束植物に関する植物相及び植生の状況

① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による植物の調査結果は、「第3章 3.1.8 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況」に示したとおりである。

② 現地調査

a) 植物相

現地調査での植物確認種の概要は表 8.10.4 に示すとおりである。

現地調査では、早春季調査において 81 科 200 種、春季調査において 94 科 269 種、夏季調査において 97 科 244 種、秋季調査において 92 科 260 種の植物が確認され、合計 112 科 452 種であった（詳細は、資料編「資料 8-1 植物確認種一覧」参照）。

なお、水生植物相としてはオギやツルヨシ等の抽水植物は確認されたものの、安定した水域に生育する浮葉植物や沈水植物は確認されなかった。

**表 8.10.4 植物確認種の概要**

分類群			確認数	
門和名	亜門和名	綱和名	科数	種数
シダ植物門		大葉シダ綱	12	22
種子植物門	裸子植物亜門		4	8
	被子植物亜門		5	9
		単子葉類	13	109
		真正双子葉類	78	304
合計			112科	452種

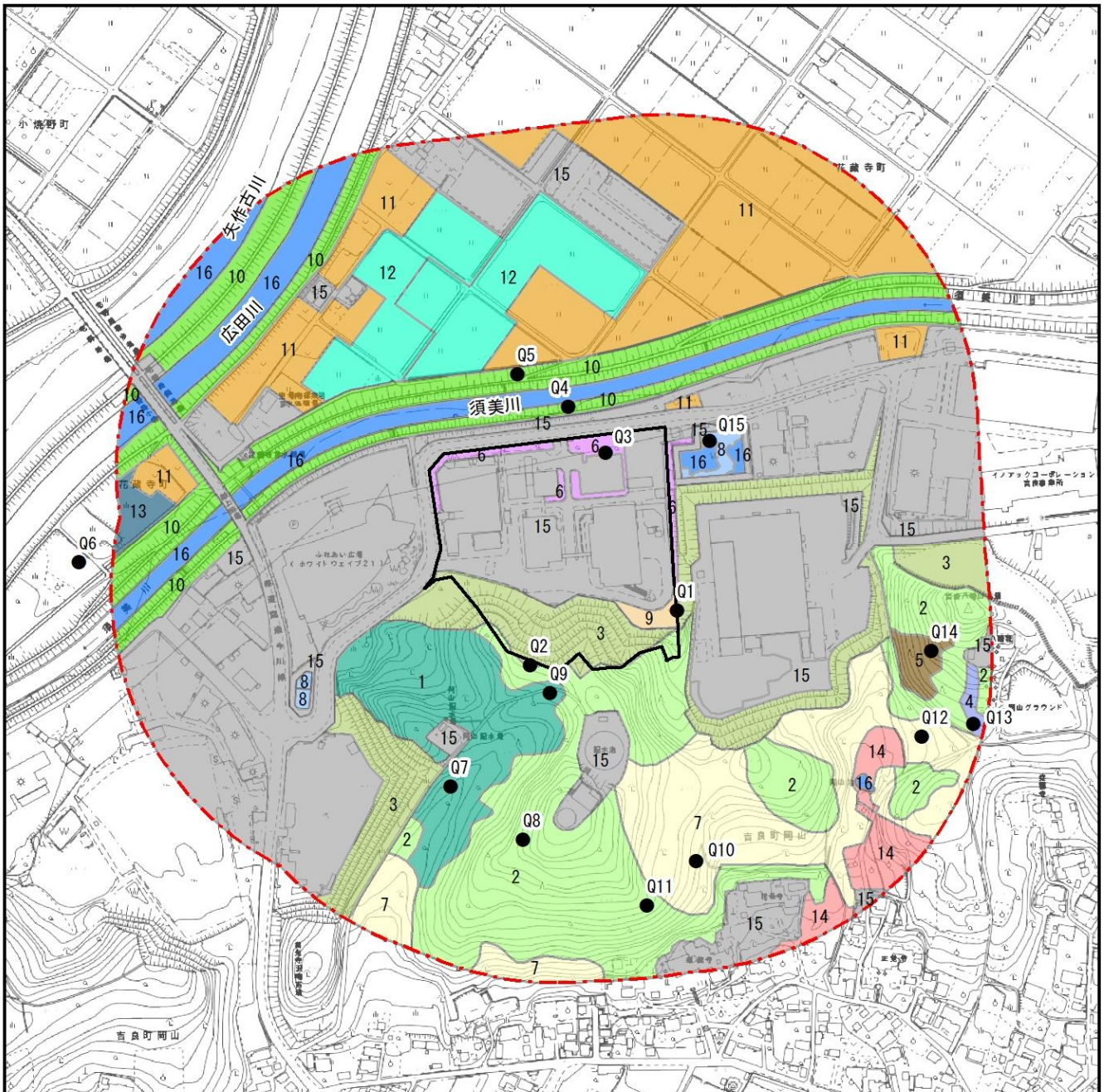
b) 水生植物相

水生植物相の結果については、植物相の結果にあわせて記載した。

c) 植生

現地調査で確認された植物群落一覧及び面積は表 8.10.5 に、調査の結果をもとに作成した植生図は、図 8.10.2 に示すとおりである。植物群落は、木本群落 7 群落、草本群落 3 群落の合計 10 群落及び土地利用区分と合わせて 16 区分であった。





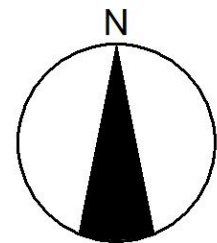
凡 例

- 対象事業実施区域
- 調査地域
- 植生調査地点

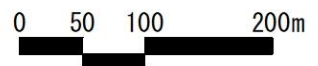
- |          |          |
|----------|----------|
| コナラ群落    | アゼスゲ群落   |
| シイ・カシ二次林 | クズ群落     |
| アベマキ群落   | 畑雑草群落    |
| ケヤキ群落    | 水田雑草群落   |
| スギ・ヒノキ植林 | 放棄水田雑草群落 |
| クスノキ植林   | 果樹園      |
| 竹林       | 造成地      |
| 高茎草本群落   | 開放水域     |

この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図（令和 3 年 11 月閲覧）」を使用したものである。

図 8.10.2 植生図



1:6,000



ア. 対象事業実施区域内の植生

対象事業実施区域内は、大部分が人工構造物など造成地で占められているものの、対象事業実施区域内南側は既存施設の建設時以前に造成された切土法面となっており、アベマキやクヌギなどの植栽樹で構成されるアベマキ群落が成立している。また、対象事業実施区域内の南東側には切土法面など周辺からの浸出水により維持されている狭域の湿性草地がみられ、アゼスゲやポントクタデ、ヌメリグサなどの湿生植物で構成されるアゼスゲ群落が成立している。

その他、対象事業実施区域内北側のクスノキ植林には、クスノキのほかクロマツなどが植栽されており、その林床にはススキやチガヤ、メヒシバなどの草本植物が確認されている。なお、ツツジといった園芸品種やセイタカアワダチソウ、メリケンカルカヤといった外来種も確認されている。

イ. 対象事業実施区域外の植生

対象事業実施区域外の植生について、対象事業実施区域南側には樹林が存在していることから、対象事業実施区域の南北で植生が区分される。

対象事業実施区域北側には水田雑草群落及び畑雑草群落が広がっており、水田付近ではアゼナやミズワラビ、カズノコグサなどの湿生草本植物が、耕作地付近ではヒガンバナやカヤツリグサ、ホトケノザなどの草本植物や樹木の実生が確認されている。

また、須美川沿いにはクズ群落が帯状に分布しており、クズやカナムグラなどのつる性植物が広く確認されたほか、セイタカアワダチソウやホシアサガオ、アレチウリなどの外来種も多く確認されている。

対象事業実施区域南側の樹林には、シイ・カシ二次林やモウソウチクからなる竹林が広く分布している。シイ・カシ二次林では、アラカシやツブラジイなどのブナ科の常緑広葉樹が優占している。その他、ヤブツバキやヒサカキ、クロバイなどの常緑広葉樹、カラタチバナやセンリョウなどの常緑低木が確認されている。竹林についてはモウソウチクが優占しており、その他には、アリドオシ、ムクノキ、カクレミノなどの実生が確認されている。

樹林の斜面上部や一部の谷に分布しているコナラ群落では、コナラやアベマキなどが優占する落葉広葉樹林が確認されているものの、亜高木層は常緑広葉樹の割合が高く遷移が進行している。なお、コナラやアベマキは、以前は薪として利用されていたが、近年その利用がなくなったことにより、当該樹林は二次遷移が進んだ典型的な二次林であると考えられる。

その他、樹林の下部は市街地と隣接するため、シュロやトウネズミモチ、ヤツデなどの外来種や園芸品種が多く確認されている。



## ウ. 確認された群落の概要

調査地域は、畑雑草群落や造成地など人為的影響の強い場所が調査地域の約 60%を占めている。続いてコナラ群落及びシイ・カシ二次林といった二次林が約 16%、アベマキ群落や竹林などの植林地が約 15%、高茎草本群落やクズ群落などの草本植物が約 9%を占めており、人為的な関与はあるものの、樹林や河川敷の草地など緑地が広がっている。

対象事業実施区域内は造成地が約 67%と大部分を占めている。続いて植栽であるアベマキ群落が約 22%、ススキやチガヤが優占する緑地にまばらに植栽されているクスノキ植林が約 8%、アゼスゲ群落といった草本植物が約 2%、シイ・カシ二次林が約 2%となっており、対象事業実施区域内南側に緑地が成立している。

なお、各植物群落の概要は表 8.10.6(1)～(8)に示すとおりである（各植物群落の詳細は、資料編「資料8-2 植生調査結果（地点別調査票）」参照）。

表 8.10.5 確認された植物群落一覧及び面積

区分	群落等	凡例番号	調査地域		対象事業実施区域内		
			面積 (ha)	面積比 (%)	面積 (ha)	面積比 (%)	
大本	二次林	コナラ群落	2.5	4.3	0.0	0.0	
		シイ・カシ二次林	6.8	11.7	0.1	1.5	
		小計	—	9.3	0.1	1.5	
	植林地	アベマキ群落	3	3.8	6.6	1.0	21.6
		ケヤキ群落	4	0.1	0.2	0.0	0.0
		スギ・ヒノキ植林	5	0.2	0.4	0.0	0.0
		クスノキ植林	6	0.4	0.8	0.3	7.6
		竹林	7	4.1	7.0	0.0	0.0
		小計	—	8.7	14.9	1.3	29.3
		草本	湿性	高茎草本群落	8	0.2	0.3
アゼスゲ群落	9			0.1	0.2	0.1	2.4
乾性	クズ群落		10	4.8	8.3	0.0	0.0
小計	—		5.1	8.8	0.1	2.4	
その他	畑雑草群落	11	6.9	11.8	0.0	0.0	
	水田雑草群落	12	3.1	5.3	0.0	0.0	
	放棄水田雑草群落	13	0.2	0.4	0.0	0.0	
	果樹園	14	0.8	1.3	0.0	0.0	
	造成地	15	21.5	36.9	3.0	66.8	
	開放水域	16	2.7	4.6	0.0	0.0	
	小計	—	35.1	60.3	3.0	66.8	
合計	16 群落（植生調査：15 地点）		58.2	100.0	4.5	100.0	

注)面積及び面積比は、四捨五入の関係で小計及び合計が一致しないことがある。

表 8.10.6(1) 確認された植物群落の概要

調査地点 1	アゼスゲ群落		主な構成種
階 層	樹高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	-	-	-
草本層	0.8m	80%	アゼスゲ・ボントクタデ・ヌメリグサ・イボクサ・ニガナ・イヌタデ等
立地環境	対象事業実施区域内南東側の湿性環境		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域内南東側に限定的に分布している湿性草地である。</li> <li>アゼスゲが優占するほか、ボントクタデ、ヌメリグサ、イボクサなど湿性に特徴的に生育する草本植物が高被度に生育する。</li> </ul>
調査地点 2	アベマキ群落		主な構成種
階 層	樹高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	5.0m	60%	アベマキ・クヌギ・ヒサカキ等
草本層	0.5m	25%	アベマキ・ツブラジイ・トラノオシダ、イタドリ等
立地環境	対象事業実施区域内南側等の切土法面		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域内南側の切土法面や対象事業実施区域周辺に広く分布している。</li> <li>アベマキ及びクヌギが植栽された低木林である。</li> <li>低木層にはアベマキやヒサカキなどが、草本層にはツブラジイなどの広葉樹及びエニシダやトラノオシダ、イタドリなどの草本植物が生育する。</li> </ul>

表 8.10.6(2) 確認された植物群落の概要

調査地点 3	クスノキ植林		主な構成種
階 層	樹高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	6.0m	10%	クスノキ・クロマツ・ヤマモモ
低木層	2.0m	20%	ツツジ（園芸品種）・アカメガシワ
草本層	1.0m	80%	ススキ・チガヤ・メヒシバ・スギナ・オッタチカタバミ・メドハギ・コニシキソウ・ヒメジョオン等
分布状況	対象事業実施区域内北側の植栽帯		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域内北側に分布しており、植栽樹種で構成されている。</li> <li>・クスノキのほか、クロマツやヤマモモ、ツツジ（園芸品種）が植栽されている。</li> <li>・草本層にはススキやチガヤが優占するほか、メヒシバやオッタチカタバミなどの草本植物が低被度に生育する。</li> </ul>
調査地点 4	クズ群落		主な構成種
階 層	樹 高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	-	-	-
草本層	1.0m	100%	クズ・カナムグラ・メヒシバ・コツブキンエノコロ
立地環境	対象事業実施区域北側の河川堤防		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域北側の須美川及び矢作古川沿いの河川堤防に広く分布している。</li> <li>・つる植物のクズが優占する草本植物群落である。</li> <li>・クズのほか、つる植物であるカナムグラや、メヒシバ、コツブキンエノコロといった草本植物が低被度に生育する。</li> </ul>



表 8.10.6(3) 確認された植物群落の概要

調査地点 5	クズ群落		主な構成種
階 層	樹高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	-	-	-
草本層	1.4m	100%	クズ・ヒメムカシヨモギ・セイタカアワダチソウ・マメアサガオ・カラスウリ・コセンダングサ・メヒシバ等
分布状況	対象事業実施区域北側の河川堤防		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域北側の須美川及び矢作古川沿いの河川堤防に広く分布している。</li> <li>・河川堤防の法面につる性植物のクズが優占する草本植物群落である。</li> <li>・クズのほか、ヒメムカシヨモギ、セイタカアワダチソウなどの草本植物が高被度に生育するほか、コセンダングサやマメアサガオなどの草本植物が低被度に生育する。</li> </ul>
調査地点 6	水田雑草群落		主な構成種
階 層	樹高	植被率	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	-	-	-
草本層	0.6m	100%	ホシアサガオ・スギナ・アレチウリ・マメアサガオ・コセンダングサ・ノハカタカラクサ等
立地環境	対象事業実施区域西側の放棄水田		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域西側の放棄水田に分布している。</li> <li>・放棄された水田につる性植物のホシアサガオが優占する草本植物群落である。</li> <li>・ホシアサガオのほか、つる性植物のアレチウリやマメアサガオ、コセンダングサ、ノハカタカラクサなどの外来種が高被度生育する。</li> </ul>

表 8.10.6(4) 確認された植物群落の概要

調査地点 7	コナラ群落		主な構成種
階 層	樹 高	植被率	
高木層	15m	75%	アベマキ
亜高木層	10m	30%	カキノキ・キヅタ・ヤブツバキ等
低木層	4.0m	45%	アオキ・ツブラジイ・エゴノキ・ヒサカキ・カマツカ・タブノキ等
草本層	0.8m	10%	イノコヅチ・フユイチゴ・ナガバジャノヒゲ・ネザサ・イヌツゲ等
分布状況	対象事業実施区域南側の樹林斜面		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林に分布している。</li> <li>アベマキが優占する落葉広葉樹林である。</li> <li>亜高木層にはヤブツバキなどの常緑広葉樹やカキノキなどの落葉広葉樹が、低木層には、アオキやヒサカキなどの常緑広葉樹が生育する。</li> <li>林床は薄暗く、イヌツゲ等の常緑樹の実生が低被度に生育するほか、草本層にはイノコヅチやフユイチゴなどの草本植物が生育する。</li> </ul>
調査地点 8	シイ・カシ二次林		主な構成種
階 層	樹 高	植被率	
高木層	13m	98%	ツブラジイ・アベマキ
亜高木層	-	-	-
低木層	4.0m	20%	ツブラジイ・ヒサカキ・カクレミノ・クロガネモチ・モチノキ・ヤブニッケイ等
草本層	2.0m	0.6%	コ克蘭・アラカシ・センリョウ・ソヨゴ・マンリョウ等
分布状況	対象事業実施区域南側の樹林斜面		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林地に広く分布している。</li> <li>ツブラジイが優占する常緑広葉樹林である。</li> <li>低木層にはヒサカキやクロガネモチなどの常緑広葉樹が低被度に生育する。</li> <li>林床は薄暗く、草本層にはアラカシやセンリョウ、マンリョウなどの常緑広葉樹が低被度で生育する。</li> </ul>



表 8.10.6(5) 確認された植物群落の概要


調査地点9		コナラ群落		主な構成種
階層	樹高	植被率		
高木層	12m	95%		コナラ・ツブラジイ・アベマキ
亜高木層	8.0m	30%		ツブラジイ・ハゼノキ・カスミザクラ・スギ・ヒノキ
低木層	4.0m	40%		ツブラジイ・ヒサカキ・クスノキ・ヒメユズリハ等
草本層	0.8m	4.0%		アラカシ・センリョウ・マンリョウ・ヤブコウジ・リョウブ等
分布状況		対象事業実施区域南側の樹林斜面		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林に分布している。</li> <li>コナラが優占する落葉広葉樹林である。</li> <li>亜高木層には常緑広葉樹であるツブラジイやハゼノキ、カスミザクラといった落葉広葉樹が生育する。</li> <li>低木層には、ヒサカキやヒメユズリハといった常緑広葉樹が生育する。</li> <li>林床は薄暗く、草本層にはアラカシ、やセンリョウ、ヤブコウジなどの常緑広葉樹の実生が低被度に生育する。</li> </ul>		
調査地点10		竹林		主な構成種
階層	樹高	植被率		
高木層	12m	100%		モウソウチク
亜高木層	-	-		-
低木層	3.0m	5.0%		モウソウチク
草本層	0.5m	5.0%		ムクノキ・カクレミノ・タマサンゴ・ナガバジャノヒゲ・ササクサ・ミツバアケビ等
立地環境		対象事業実施区域南側の樹林の斜面		
		<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林地に広く分布している。</li> <li>モウソウチクが優占する竹林である。</li> <li>モウソウチクが密に優占するため、亜高木、低木層はほぼ欠如している。</li> <li>林床は薄暗く、モウソウチクの落葉が堆積しており、草本層にはムクノキやカクレミノなどの広葉樹の実生のほか、ササクサやミツバアケビなどの草本植物が低被度に生育する。</li> </ul>		

表 8.10.6(6) 確認された植物群落の概要

調査地点11		シイ・カシ二次林		主な構成種
階層	樹高	植被率		
高木層	22m	100%		ツブラジイ
亜高木層	10m	30%		ツブラジイ・カクレミノ・ヤブツバキ
低木層	4.0m	30%		ヒサカキ・カクレミノ・ツブラジイ・ヤブツバキ等
草本層	0.7m	3.0%		アラカシ・イヌマキ・ヤツデ・シラカシ・センリョウ・マンリョウ・モチノキ等
分布状況		対象事業実施区域南側の樹林斜面		
				<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林に広く分布している。</li> <li>ツブラジイが優占する常緑広葉樹林である。</li> <li>亜高木層にはツブラジイやカクレミノ、ヤブツバキといった常緑広葉樹が低被度に生育する。</li> <li>低木層にはヒサカキやツブラジイなどの常緑広葉樹が低被度に生育する。</li> <li>林床は薄暗く、草本層にはアラカシなどが生育するほか、センリョウやマンリョウなどの常緑広葉樹が低被度で生育する。</li> </ul>
調査地点12		竹林		主な構成種
階層	樹高	植被率		
高木層	12m	98%		モウソウチク、ツブラジイ
亜高木層	-	-		-
低木層	2.0m	2.0%		モウソウチク
草本層	0.5m	3.0%		アリドオシ・ツブラジイ・アラカシ・カクレミノ・キヅタ・ツルグミ・ムクノキ・ヤブツバキ等
立地環境		対象事業実施区域南側の樹林斜面		
				<ul style="list-style-type: none"> <li>対象事業実施区域南側の樹林に広く分布している。</li> <li>モウソウチクが優占する竹林である。</li> <li>モウソウチクが密に優占するため、亜高木、低木層はほぼ欠如している。</li> <li>林床は薄暗く、モウソウチクの落葉が堆積するため、草本層にはアラカシやカクレミノ、ムクノキなどの広葉樹の実生のほか、キヅタやツルグミといったつる性植物が低被度に生育する。</li> </ul>




表 8.10.6(7) 確認された植物群落の概要

調査地点13	ケヤキ植林		主な構成種
階層	樹高	植被率	
高木層	12m	95%	ケヤキ・アラカシ
亜高木層	8.0m	20%	ケヤキ・ヤブツバキ
低木層	3.0m	10%	ケヤキ・ヤブツバキ・ヤマノイモ
草本層	1.0m	85%	ネザサ・イノコヅチ・コチヂミザサ・アケビ・カニクサ・エノキ・クサイチゴ・ヘクソカズラ・ヤマノイモ等
立地環境	対象事業実施区域南東側の斜面中部		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域南東側に限定的に分布している。</li> <li>・ケヤキが優占する落葉広葉樹林である。</li> <li>・亜高木層、低木層にはケヤキのほか、ヤブツバキやヤマノイモが低被度で生育する。</li> <li>・林床は明るく、ネザサが優占するほか、イノコヅチやコチヂミザサ、アケビ、カニクサなど比較的多くの草本植物が生育する。</li> </ul>
調査地点14	スギ・ヒノキ植林		主な構成種
階層	樹高	植被率	
高木層	13m	95%	スギ・ヒノキ・ツブラジイ
亜高木層	7.0m	15%	アラカシ・ツブラジイ
低木層	2.0m	15%	ツブラジイ・アラカシ・ヒサカキ・ヤブツバキ・ヤブニッケイ
草本層	0.5m	5.0%	ベニシダ・カクレミノ・ツブラジイ・カラタチバナ・アラカシ・ナガバジャノヒゲ・マンリョウ等
立地環境	対象事業実施区域南東側の斜面中部		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域南東側に限定的に分布している。</li> <li>・スギ、ヒノキが優占する常緑針葉樹林である。</li> <li>・亜高木層及び低木層にはツブラジイやアラカシなどの常緑広葉樹が低被度に生育する。</li> <li>・林床は薄暗く、草本層にはベニシダやカクレミノ、ツブラジイなどの常緑広葉樹の実生が低被度に生育する。</li> </ul>



表 8.10.6(8) 確認された植物群落の概要

調査地点15	高茎草本群落		主な構成種
	階層	樹高	
高木層	-	-	-
亜高木層	-	-	-
低木層	-	-	-
草本層	1.5m	100%	ガマ・クサヨシ・トクサ・イグサ
立地環境	対象事業実施区域東側の調整池等水域付近		
			<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象事業実施区域東側の調整池等対象事業実施区域周辺にある水域付近に分布している。</li> <li>・ガマが優占するほか、クサヨシやトクサ、イグサなどの湿生植物が生育する草地である。</li> </ul>

また、調査地域の植生自然度を整理した結果は、表 8.10.7 及び図 8.10.3 に示すとおりである。

調査地域は、対象事業実施区域及びその西側から北側に造成地や畑雑草群落などの自然度の低い植生自然度 1 及び 2 が分布し、調査地域の約 50% を占めている。また、須美川沿いや対象事業実施区域南側の住宅地周辺では、竹林や放棄水田雑草群落、クズ群落などの人為的影響を受けている植生である植生自然度 3～5 が調査地域の約 18% を占めている。さらに、対象事業実施区域南側の樹林にはスギ・ヒノキ植林やクスノキ植林などの植林地である植生自然度 6 やコナラ群落といった二次林である植生自然度 7、シイ・カシ二次林といった自然植生に近い二次林である植生自然度 8 が調査地域の約 24% を占めている。

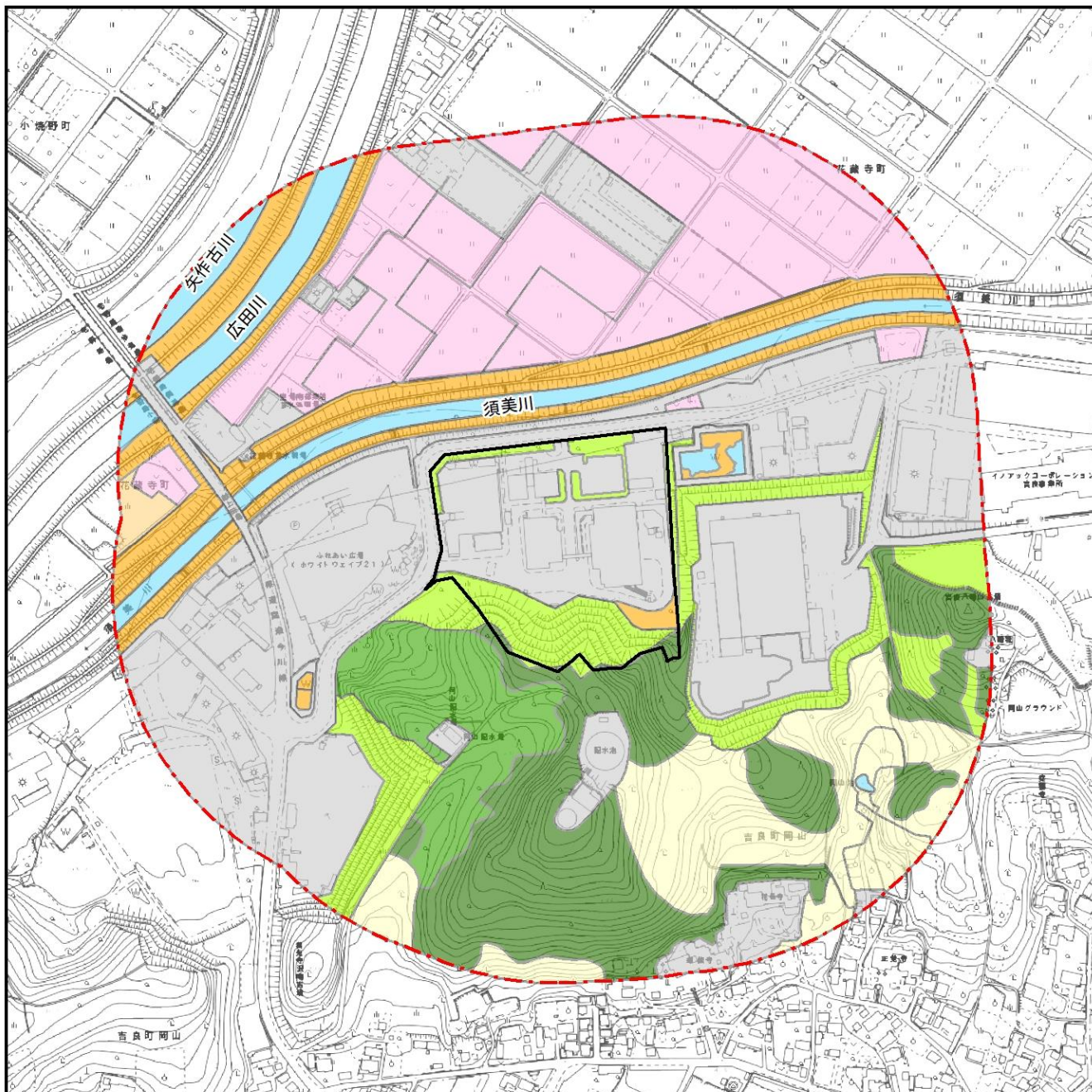
対象事業実施区域内は、造成地である植生自然度 1 が約 67% を占めている。続いて、アベマキ群落などの植林地である植生自然度 6 が約 30%、アゼスゲ群落といった人為的影響を受けながらも湿生草が維持されている植生自然度 5 及びシイ・カシ二次林といった自然植生に近い二次林である自然植生度 8 がそれぞれ調査地域の約 2% を占めている。

表 8.10.7 植生自然度



自然度	区分基準	群落等	調査地域		対象事業実施区域	
			面積 (ha)	面積比 (%)	面積 (ha)	面積比 (%)
10	高山ハイデ、風衝草原、自然草原等、自然植生のうち単層の植物社会を形成する地区	—	0.0	0.0	0.0	0.0
9	エゾマツトドマツ群集、ブナ群落等、自然植生のうち低木林、高木林の植物社会を形成する地区	—	0.0	0.0	0.0	0.0
8	ブナミズナラ群集、シイ・カシ二次林等、代償植生であっても特に自然植生に近い地区	シイ・カシ二次林	6.8	11.7	0.1	1.5
7	クリーミズナラ群集、コナラ群落等、繰り返し伐採されている一般に二次林と呼ばれている代償植生地区	コナラ群落	2.5	4.3	0.0	0.0
6	常緑針葉樹、落葉針葉樹、常緑広葉樹等の植林地、アカメガシワ等の低木林	アベマキ群落 ケヤキ群落 スギ・ヒノキ植林 クスノキ植林	4.6	7.9	1.3	29.3
5	ササ群落、ススキ群落等の背丈の高い草原、伝統的な管理を受けて持続している構成種の多い草原	高茎草本群落 アゼスゲ群落 クズ群落	5.1	8.8	0.1	2.4
4	シバ群落等の背丈の低い草原、伐採直後の草原、路傍・空地雑草群落、放棄畑雑草群落	放棄水田雑草群落	0.2	0.4	0.0	0.0
3	竹林、外来種の植林・二次林・低木林、果樹園、茶畑、残存・植栽樹群をもった公園、墓地等	竹林 果樹園	4.8	8.3	0.0	0.0
2	外来種の草原、畑、水田等の耕作地、緑の多い住宅地	畑雑草群落 水田雑草群落	10.0	17.1	0.0	0.0
1	市街地、造成地等の植生のほとんど存在しない地区	造成地	21.5	36.9	3.0	66.8
—	開放水域		2.7	4.6	0.0	0.0
	合計		58.2	100.0	4.5	100.0

注 1) 面積及び面積比は、四捨五入の関係で小計及び合計が一致しないことがある。

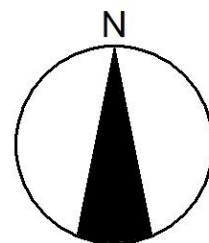
注 2) 各群落の自然度は、現地調査結果を踏まえた上で「1/2.5 万植生図を基にした植生自然度について」(平成 28 年 環境省)を参考に設定した。



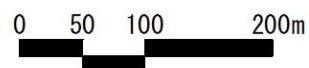
凡 例

-  対象事業実施区域
-  調査地域

- |  |  |
|--|--|
|  植生自然度8 |  植生自然度3 |
|  植生自然度7 |  植生自然度2 |
|  植生自然度6 |  植生自然度1 |
|  植生自然度5 |  開放水域   |
|  植生自然度4 |  |



1:6,000



この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。

図 8.10.3 植生自然度図



(2) 重要な種及び群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況

① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による植物の調査結果は、「第3章 3.1.8 動植物の生息又は生育、植生及び生態系の状況」に示したとおりである。

② 現地調査

a) 重要な種

調査結果を踏まえ、表 8.10.8 に示す基準により重要な種の抽出を行った結果は、表 8.10.9 に示すとおりである。

対象事業実施区域及びその周辺では、対象事業実施区域北側の水田でカワヂシャが確認された。詳細は、資料編「資料8-3 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.10.8 重要な植物の選定基準

番号	法令・文献等	選定基準
I	「文化財保護法」 「愛知県文化財保護条例」 「西尾市文化財保護条例」 「幸田町文化財保護条例」	・特別天然記念物（特天） ・国指定天然記念物（国天） ・愛知県指定天然記念物（県天） ・西尾市指定天然記念物（市天） ・幸田町指定天然記念物（町天）
II	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」	・国際希少野生動植物種（国際） ・国内希少野生動植物種（国内） ・特定第一種国内希少野生動植物種（特1） ・特定第二種国内希少野生動植物種（特2） ・緊急指定種（緊急）
III	「環境省レッドリスト2020」 （令和2年3月27日 環境省報道発表資料）	・絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） ・絶滅危惧ⅠA類（CR） ・絶滅危惧ⅠB類（EN） ・絶滅危惧Ⅱ類（VU） ・準絶滅危惧（NT） ・情報不足（DD） ・地域個体群（LP）
IV	「レッドリストあいち2020」（令和2年3月 愛知県）	・絶滅危惧ⅠA類（CR） ・絶滅危惧ⅠB類（EN） ・絶滅危惧Ⅱ類（VU） ・準絶滅危惧（NT） ・情報不足（DD） ・地域個体群（LP）
V	「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」	・指定希少野生動植物種（希少）

表 8.10.9 重要な種一覧

No.	門	綱	科名	種名	重要な種選定基準 <sup>注)</sup>					対象事業実施区域		調査時期			
					I	II	III	IV	V	内	外	早春 季	春 季	夏 季	秋 季
1	種子植物門	双子葉植物綱	オオバコ科	カワヂシャ			NT				●		●		
計	1門	1綱	1科	1種	0種	0種	1種	0種	0種	0種	1種	0種	1種	0種	0種

注) 「重要な種選定基準」のⅠ～Ⅴは、表 8.10.8 に示す番号と一致する。

b) 重要な群落

調査結果を踏まえ、表 8.10.10 に示す基準により重要な群落の抽出を行ったが、対象事業実施区域及びその周辺では、重要な群落は確認されなかった。

表 8.10.10 重要な群落の選定根拠

番号	法令・文献等	選定基準
①	「第2回自然環境保全基礎調査動植物分布図」(昭和56年 環境庁) 「第3回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書全国版」(昭和63年 環境庁) 「第5回自然環境保全基礎調査特定植物群落調査報告書」(平成12年3月 環境庁)に掲載されている特定植物群落	A: 原生林もしくはそれに近い自然林 B: 国内若干地域に分布するが、極めて稀な植物群落または個体群 C: 比較的普通に見られるものであっても、南限・北限・隔離分布等分布限界になる産地に見られる植物群落または個体群 D: 砂丘、断崖地、塩沼地、湖沼、河川、湿地、高山、石灰岩地等の特殊な立地に特有な植物群落または個体群で、その群落の特徴が典型的なもの E: 郷土景観を代表する植物群落で、特にその群落の特徴が典型的なもの F: 過去において人工的に植栽されたことが明らかな森林であっても、長期にわたって伐採等の手が入っていないもの G: 乱獲、その他人為の影響によって、当該都道府県内で極端に少なくなるおそれのある植物群落または個体群 H: その他、学術上重要な植物群落または個体群
②	「1/2.5万植生図を基にした植生自然度について」(平成28年 環境省)	植生自然度 10 植生自然度 9

(3) 特に重要で、なおかつ大きな影響を受けるおそれがある種が存在する場合におけるその種の集団構造及び繁殖特性

対象事業実施区域及びその周辺では特に重要で、なおかつ大きな影響を受けるおそれがある種は確認されなかった。

(4) 代償措置を検討する場合における対象となる植物の特性、現生育地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況

対象事業実施区域及びその周辺では、代償措置を検討する対象となる植物は確認されなかった。

8.10.2 予測

予測の対象は表 8.10.11 に示すとおりであり、調査で生育が確認された植物の重要な種とした。

表 8.10.11 予測対象

区分	確認数	現地で確認された予測対象
重要な種	1科1種	カワヂシャ
重要な群落	—	確認なし

8.10.2.1 工事の実施

(1) 予測方法

① 予測事項

予測事項は表 8.10.12 に示すとおりである。

なお、既存の工作物等の除去と比べて植物への影響が大きくなると考えられる掘削・盛土等の土工を予測対象となる要因とした。

表 8.10.12 予測事項（掘削・盛土等の土工）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
掘削・盛土等の土工	植物やその生育環境への影響	建設機械の稼働により発生する粉じんによる植物種の生体機能への影響
		掘削・盛土等の土工に伴う土地の改変による植物種の減少及び生育環境の変化

② 予測地域

予測地域は、植物の生育及び植生の特性を踏まえて重要な種及び群落に係る環境影響を受けのおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300mの範囲を基本とし、図 8.10.1 に示したとおりである。

③ 予測対象時期

予測対象時期は、植物の生育及び植生の特性を踏まえて重要な種及び群落に係る環境影響を的確に把握できる時期として、植物へ及ぼす影響が最も大きくなる時期である掘削等の土工の時期とした。

④ 予測方法

予測方法は、重要な種及び群落について、分布又は生育環境の改変の程度及び事業計画の策定時における環境配慮事項を踏まえた定性的予測とした。



(2) 予測結果

① 維管束植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況

a) 植物相

工事の実施に伴う植物相への影響に係る予測結果は表 8.10.13 に示すとおりである。

表 8.10.13 工事の実施に伴う植物相への影響に係る予測結果

項目	確認状況	予測結果
植物相	<p>現地調査では、452種の植物が確認された。</p> <p>対象事業実施区域内の南東側には狭域の湿性草地がみられ、アゼスゲやポントクタデ、ヌメリグサなどの湿生植物が確認されている。また、対象事業実施区域内南側の切土法面では植栽されたアベマキやクヌギなどの低木林が確認されたほか、対象事業実施区域内北側にはクスノキやクロマツなどの植栽樹種が確認されている。</p> <p>対象事業実施区域北側の水田付近では、アゼナやミズワラビ、カズノコグサなどの湿生草本植物が、耕作地付近では、ヒガンバナやカヤツリグサ、ホトケノザなどの草本植物が確認され、須美川等河川沿いではクズやカナムグラなどのつる性植物が広く確認されている。</p> <p>また、対象事業実施区域南側の樹林には、主にシイ・カシ二次林や竹林が広く分布している。シイ・カシ二次林では、アラカシやツブラジイ、ヤブツバキ、ヒサカキ、クロバイなどの常緑広葉樹、カラタチバナやセンリョウなどの常緑低木が確認されている。その他、樹林斜面の上部や一部の谷にはコナラやアベマキなどが優占する落葉広葉樹林が確認されている。</p>	<p><b>【建設機械の稼働】</b></p> <p>工事の実施に伴う建設機械の稼働により、発生する粉じんによって、対象事業実施区域及びその周辺の植物種の生体機能に変化する可能性があると考えられるが、粉じんが飛散すると考えられる場合には、適宜散水を行って粉じんの飛散を防止することから、建設機械の稼働による植物相への影響は極めて小さいものと予測する。</p> <p><b>【掘削・盛土等の土工】</b></p> <p>対象事業実施区域内には、アゼスゲやポントクタデ、ヌメリグサなどの湿生植物やアベマキやクヌギなどの低木林が確認されているが、これらは改変区域外であることから、掘削・盛土等の土工による植物相への影響は極めて小さいものと予測する。</p>

b) 植生

工事の実施に伴う予測地域における植物群落の面積の増減は表 8.10.14 に、工事の実施に伴う植生への影響に係る予測結果は表 8.10.15 に示すとおりである。また、調査時の植生図は図 8.10.4 に、予測時期の植生図は図 8.10.5 に示すとおりである。

表 8.10.14 調査地域内の植物群落の面積の増減

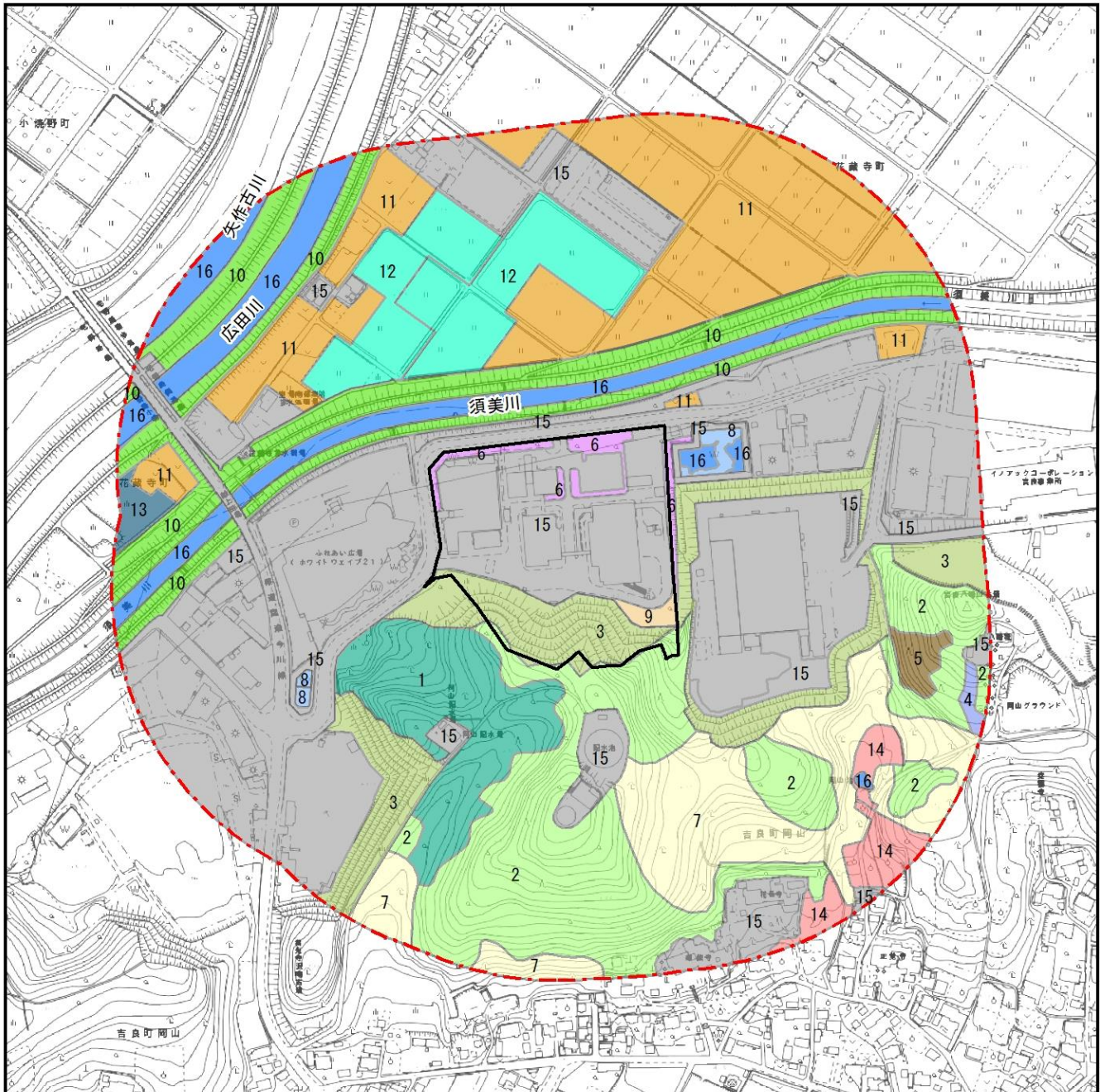
区 分	群 落	番号	工事前		工事後		増減		
			面積 (ha)	面積比 (%)	面積 (ha)	面積比 (%)	面積 (ha)	面積比 (%)	
木本	二次林	コナラ群落	2.5	4.3	2.5	4.3	0.0	0.0	
		シイ・カシ二次林	6.8	11.7	6.8	11.7	0.0	0.0	
		小計	9.3	16.0	9.3	16.0	0.0	0.0	
	植林林	アベマキ群落	3	3.8	6.5	3.8	6.5	0.0	0.0
		ケヤキ群落	4	0.1	0.2	0.1	0.2	0.0	0.0
		スギ・ヒノキ植林	5	0.2	0.3	0.2	0.3	0.0	0.0
		クスノキ植林	6	0.4	0.7	0.2	0.3	-0.2	50.0
		竹林	7	4.1	7.0	4.1	7.0	0.0	0.0
		小計	—	8.6	14.8	8.4	14.4	-0.2	2.3
		草本	湿生	高茎草本群落	8	0.2	0.3	0.2	0.3
アゼスゲ群落	9			0.1	0.2	0.1	0.2	0.0	0.0
乾性	クズ群落		10	4.8	8.3	4.8	8.3	0.0	0.0
小計	—		5.1	8.8	5.1	8.8	0.0	0.0	
その他	畑雑草群落	11	6.9	11.9	6.9	11.9	0.0	0.0	
	水田雑草群落	12	3.1	5.3	3.1	5.3	0.0	0.0	
	放棄水田雑草群落	13	0.2	0.3	0.2	0.3	0.0	0.0	
	果樹園	14	0.8	1.4	0.8	1.4	0.0	0.0	
	造成地	15	21.5	36.9	21.7	37.3	0.2	0.9	
	開放水域	16	2.7	4.6	2.7	4.6	0.0	0.0	
	小計	—	35.2	60.5	35.4	60.8	0.2	0.6	
16 群落 (植生調査: 15 地点)			58.2	100.0	58.2	100.0	-	-	

注1) 面積及び面積比は、四捨五入の関係で小計及び合計が一致しないことがある。

注2) 増減の面積比は予測範囲における増減面積の割合を算出している。

表 8.10.15 工事の実施に伴う植生への影響に係る予測結果

項目	予測結果
植生	<p><b>【建設機械の稼働】</b>                      工事の実施に伴う建設機械の稼働により、発生する粉じんによって、対象事業実施区域及びその周辺の植物種の生体機能が変化する可能性があると考えられるが、粉じんが飛散すると考えられる場合には、適宜散水を行って粉じんの飛散を防止することから、建設機械の稼働による植生への影響は極めて小さいものと予測する。</p> <p><b>【掘削・盛土等の土工】</b>                      工事の実施に伴う掘削・盛土等の土工により、予測地域の植生についてはクスノキ植林が約50%減少するものの、すべて植栽樹木であるうえ、高木は少ない。また、対象事業実施区域内南側で確認されているアゼスゲ群落及びシイ・カシ二次林は、工事の実施に伴う掘削・盛土等の土工による直接的改変はないことから、群落の種類や各群落の階層構造については大きな変化は生じない。                      よって、掘削・盛土等の土工による植生への影響は極めて小さいものと予測する。</p>

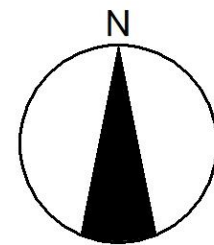


凡 例

- 対象事業実施区域
- 予測地域

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1 コナラ群落    | 9 アゼスゲ群落    |
| 2 シイ・カシ二次林 | 10 クズ群落     |
| 3 アベマキ群落   | 11 畑雑草群落    |
| 4 ケヤキ群落    | 12 水田雑草群落   |
| 5 スギ・ヒノキ植林 | 13 放棄水田雑草群落 |
| 6 クスノキ植林   | 14 果樹園      |
| 7 竹林       | 15 造成地      |
| 8 高茎草本群落   | 16 開放水域     |

この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。



1:6,000

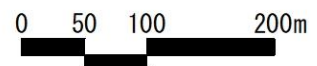
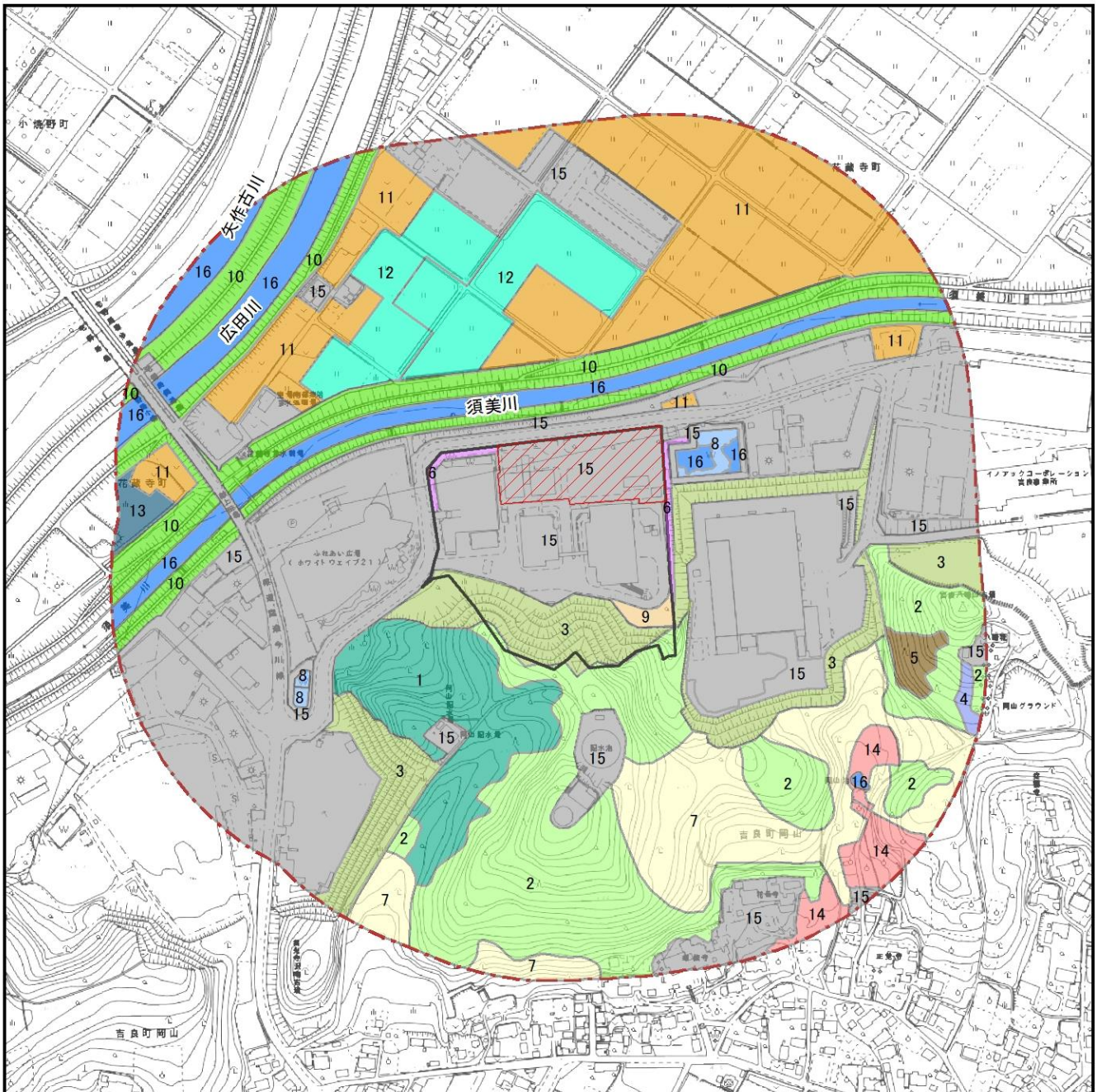





図 8.10.4 調査時の植生図

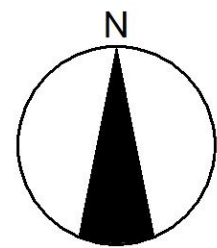




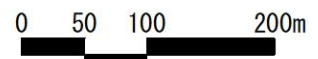
凡 例

-  対象事業実施区域
-  予測地域
-  改変区域

- |  |   |
|--|---|
|  1 コナラ群落    |  9 アゼスゲ群落    |
|  2 シイ・カシ二次林 |  10 クズ群落     |
|  3 アベマキ群落   |  11 畑雑草群落    |
|  4 ケヤキ群落    |  12 水田雑草群落   |
|  5 スギ・ヒノキ植林 |  13 放棄水田雑草群落 |
|  6 クスノキ植林   |  14 果樹園      |
|  7 竹林       |  15 造成地      |
|  8 高茎草本群落   |  16 開放水域     |



1:6,000



この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。

図 8.10.5 予測対象時期の植生図

② 重要な種及び群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況

a) 重要な種

工事の実施に伴う重要な種への影響に係る予測結果は表 8.10.16 に示すとおりである。

対象事業実施区域内では、重要な種は確認されていない。詳細は、資料編「資料 8-3 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.10.16 工事の実施に伴う重要な種への影響に係る予測結果

種名	確認状況	予測結果
カワヂシャ	春季に対象事業実施区域外で1箇所5株確認された。	対象事業実施区域内では確認されておらず、直接的な改変は行われぬ。また、本種の確認位置は対象事業実施区域北側の須美川の対岸であり、生育環境への影響もないと考えられることから、生育状況は変化せず、工事の実施による影響はないものと予測する。

b) 重要な群落

対象事業実施区域及びその周辺では、重要な群落は確認されていないことから、工事の実施に伴う重要な群落への影響はないものと予測する。



**8.10.2.2 施設の存在**

(1) 予測方法

① 予測事項

予測事項は表 8.10.17 に示すとおりである。

なお、地形改変による影響については、「8.10.2.1 工事の実施」に示した内容と同様であり、供用時は施設の存在による影響を予測する。

表 8.10.17 予測事項（地形改変並びに施設の存在）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
施設の存在	植物やその生育環境への影響	施設の存在に伴い生じる日影による生育環境の変化

② 予測地域

予測地域は、植物の生育及び植生の特性を踏まえて重要な種及び群落に係る環境影響を受けるとおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300m の範囲を基本とし、図 8.10.1 に示したとおりである。

③ 予測対象時期

予測対象時期は、植物の生育及び植生の特性を踏まえて重要な種及び群落に係る環境影響を的確に把握できる時期として、計画施設の稼働が定常の状態となる時期及び保全対策の効果が安定したと考えられる時期とした。

④ 予測方法

予測方法は、重要な種及び群落について、定性的に予測した。

(2) 予測結果

① 維管束植物その他主な植物に関する植物相及び植生の状況

a) 植物相

施設の存在に伴う植物相への影響に係る予測結果の概要は表 8.10.18 に示すとおりである。

表 8.10.18 施設の存在に伴う植物相への影響に係る予測結果

項目	予測結果
植物相	施設の存在に伴い生じる日影により、日照量が減少するなどの生育環境の変化が考えられるものの、日照障害の予測結果から、長時間日影となる範囲は主に対象事業実施区域の北側となり、植物の生育場所にかかる可能性はわずかである。以上のことから、施設の存在による植物相への影響は極めて小さいものと予測する。

注)日照障害の予測結果については、「第8章 8.8 日照障害」参照。

b) 植生

施設の存在に伴う植生への影響に係る予測結果の概要は表 8.10.19 に示すとおりである。

表 8.10.19 施設の存在に伴う植生への影響に係る予測結果

項目	予測結果
植生	施設の存在に伴い生じる日影により、日照量が減少するなどの生育環境の変化が考えられるものの、日照障害の予測結果から、長時間日影となる範囲は主に対象事業実施区域の北側となり、植物の生育場所にかかる可能性はわずかである。以上のことから、施設の存在による植生への影響は極めて小さいものと予測する。

注)日照障害の予測結果については、「第8章 8.8 日照障害」参照。

② 重要な種及び群落の分布、生育の状況及び生育環境の状況

a) 重要な種

施設の存在に伴う重要な種及び群落への影響に係る予測結果の概要は表 8.10.20 に示すとおりである。

カワヂシャに対する施設の存在による生育環境の変化はないことから、施設の存在に伴う影響はないものと予測する。詳細は、資料編「資料8-3 重要な種の概要」に示すとおりである。

表 8.10.20 施設の存在に伴う重要な種への影響に係る予測結果

種名	予測結果
カワヂシャ	生育地は長時間日影となる範囲から離れていることから、施設の存在に伴い生じる日影による生育環境の変化はない。よって、施設の存在による影響はないものと予測する。

注)日照障害の予測結果については、「第8章 8.8 日照障害」参照。

b) 重要な群落

対象事業実施区域及びその周辺では、重要な群落は確認されていないことから、施設の存在に伴う重要な群落への影響はないものと予測する。

**8.10.3 評価**

**8.10.3.1 評価方法**

(1) 環境影響の回避・低減による評価

工事の実施及び施設の存在による植物の重要な種及び注目すべき生息地に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避又は低減されているかどうかについて評価した。

**8.10.3.2 環境保全措置**

(1) 工事の実施

事業計画の策定時における環境配慮事項のうち、予測に反映されている環境配慮事項は以下のとおりである。

- ・適宜散水を行って粉じんの飛散を防止する。
- ・改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

また、工事の実施に伴う重要な種及び群落への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.10.21 に示すとおりである。

なお、今後新たに重要な種が確認されるなど、環境保全措置を検討する必要が生じた場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.10.21 環境保全措置（掘削・盛土等の土工）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
工事事業者へ定期的な講習・指導を行う（草地等への不用意な立ち入りや屋外へのごみ捨て禁止等について工事従事者に指導する）。	事業者	植物全般への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。

(2) 施設の存在

施設の存在に伴う重要な植物及び群落への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.10.22 に示すとおりである。

なお、今後新たに重要な種が確認されるなど、環境保全措置を検討する必要がある場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.10.22 環境保全措置（施設の存在）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
本事業の緑地における植栽樹種等には、対象事業実施区域周辺の構成樹種や在来種等を可能な限り利用する。	事業者	植物全般への影響の低減及び緑化率の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
民間事業者（施設運営者）等へ地域の自然環境や配慮事項について供用開始の際に教育や情報共有等を行う。	事業者	植物全般への影響の低減及び生育環境の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
可能な範囲で駐車場等の緑化等、緑化率の向上に努める。	事業者	植物全般への影響の低減及び緑化率の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。

8.10.3.3 評価結果

(1) 工事の実施

建設機械の稼働により発生する粉じんにより植物種の生体機能に影響を及ぼすと考えられるが、適切な粉じんの飛散防止対策を講じることにより植物相への影響の程度は極めて小さいものと判断する。

また、掘削・盛土等の土工による影響については、対象事業実施区域内において確認された植物のうち、アベマキやクヌギなどのアゼスゲ群落は本事業により改変されることはない。さらに、重要な種及び群落は対象事業実施区域内において確認されていないことから、これら植物相への影響の程度は極めて小さいものと判断する。

以上のことから、植物に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られているものと評価する。

(2) 施設の存在

日照障害の予測結果から、長時間日影となる範囲は主に対象事業実施区域の北側となり、植物の生育場所にかかる可能性はわずかであることから、施設の存在に伴う植物相及び植生への影響は極めて小さいものと判断する。

また、対象事業実施区域及びその周辺で確認された重要な種の生育地は長時間日影となる範囲から離れていることから、施設の存在に伴い生じる日影による生育環境の変化はない。さらに、対象事業実施区域及びその周辺では重要な群落は確認されていない。以上のことから、施設の存在に伴う重要な種及び群落への影響の程度はないものと判断する。

さらに、環境保全措置を実施することから植物に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られているものと評価する。



## 8.11 生態系



## 8.11 生態系

### 8.11.1 調査

#### 8.11.1.1 調査方法

##### (1) 調査項目

生態系の調査項目は、表 8.11.1 に示すとおりである。

表 8.11.1 生態系の調査項目

調査項目	文献その他の資料調査	現地調査
動植物その他の自然環境に係る概況	○	○
複数の注目種等の生態、他の動植物との関係又は生息環境若しくは生育環境の状況	○	○
代償措置を検討する場合における注目される動植物の種又は生物群集の特性、現生息・生育地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況	○	○

##### (2) 調査地域

調査地域は、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて、注目種等に係る環境が影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及びその周囲約 300m の範囲とした。

##### (3) 調査方法

###### ① 動植物その他の自然環境に係る概況

文献その他の資料及び動植物の現地調査結果を踏まえた定性的、定量的情報の収集並びに当該情報を整理・解析することにより、対象事業実施区域及びその周囲の生態系の地域特性を把握した。

###### ② 複数の注目種等の生態、他の動植物との関係又は生息環境若しくは生育環境の状況

###### a) 複数の注目種等の検討

生態系の概況把握結果に基づき、現地調査で確認された種及び生物群集のうち、調査地域の生態系の特性を的確に把握することができる種及び生物群集を、上位性、典型性、特殊性の観点から抽出した。また、それらの生態、他の動植物との関係、現地調査における確認状況を整理した。

###### b) 注目種等の調査

選定した注目種等について、調査地域の生態系に係る影響を予測及び評価する上で必要な現地調査を実施した。

###### ③ 代償措置を検討する場合における注目される動植物の種又は生物群集の特性、現生息・生育地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況

調査の結果、代償措置が必要と判断された場合において、対象種等の特性や現在の生息・生育環境、代償措置の候補地等の条件について整理した。

##### (4) 調査期間

調査期間は、動植物の調査期間に準じた時期とした。

## 8.11.1.2 調査結果

## (1) 動植物その他自然環境に係る概況

## ① 生態系に係る環境要素の概況

生態系に係る環境要素である、地形、表層地質、水系、植生及び土地利用の各項目の概況は、表 8.11.2 に示すとおりである。

表 8.11.2 生態系に係る環境要素の概況

項目	環境要素の概況
地形	対象事業実施区域を含む調査地域の大部分は、小起伏山地となっており、その中でも対象事業実施区域の標高が最も低い。また、対象事業実施区域北側には須美川が流れ、その周辺には谷底平野・氾濫平野及び河川堤防が広がっている。
表層地質	対象事業実施区域を含む調査地域の表層地質の大部分は、変成岩の珪質片麻岩となっているほか、対象事業実施区域北側には未固結堆積物の礫・砂・泥を主とする層が広く広がっている。
水系	対象事業実施区域北側には須美川が、西側には広田川及び矢作古川などの一級河川があるほか、周辺には多数の幹線水路が存在している。
植生	対象事業実施区域内は大部分が造成地であり、主な植生はクスノキやクロマツなどの植栽樹やアベマキ及びクヌギなどの植栽樹で構成されるアベマキ群落といった樹林地、切土法面など周辺からの浸出水により維持されている狭域のアゼスゲ群落といった湿性草地である。 対象事業実施区域周辺には、須美川を挟んだ北側に水田雑草群落などの湿生草本及び畑雑草群落などの乾性草本が広がっているほか、対象事業実施区域南側には樹林地があり、シイ・カシ二次林や竹林といった二次林が広く分布するほか、コナラ群落といった広葉樹林も分布している。
土地利用	対象事業実施区域南側の平野には集落があり、住宅のほか、寺院や公共施設などが存在している。また、樹林地に分布している竹林は、現在もタケノコを利用するための管理が継続されている林分も見られるものの、全般的には管理が放棄されている。そのほか、以前はコナラやアベマキなどの落葉広葉樹を薪として利用し、樹林及びその周辺を里山利用していたものと考えられるが、近年はそのような利用はなくなっている。

## ② 自然環境類型区分

調査地域における環境特性を把握するため、生態系に係る環境要素に基づき、自然環境類型区分を整理した。

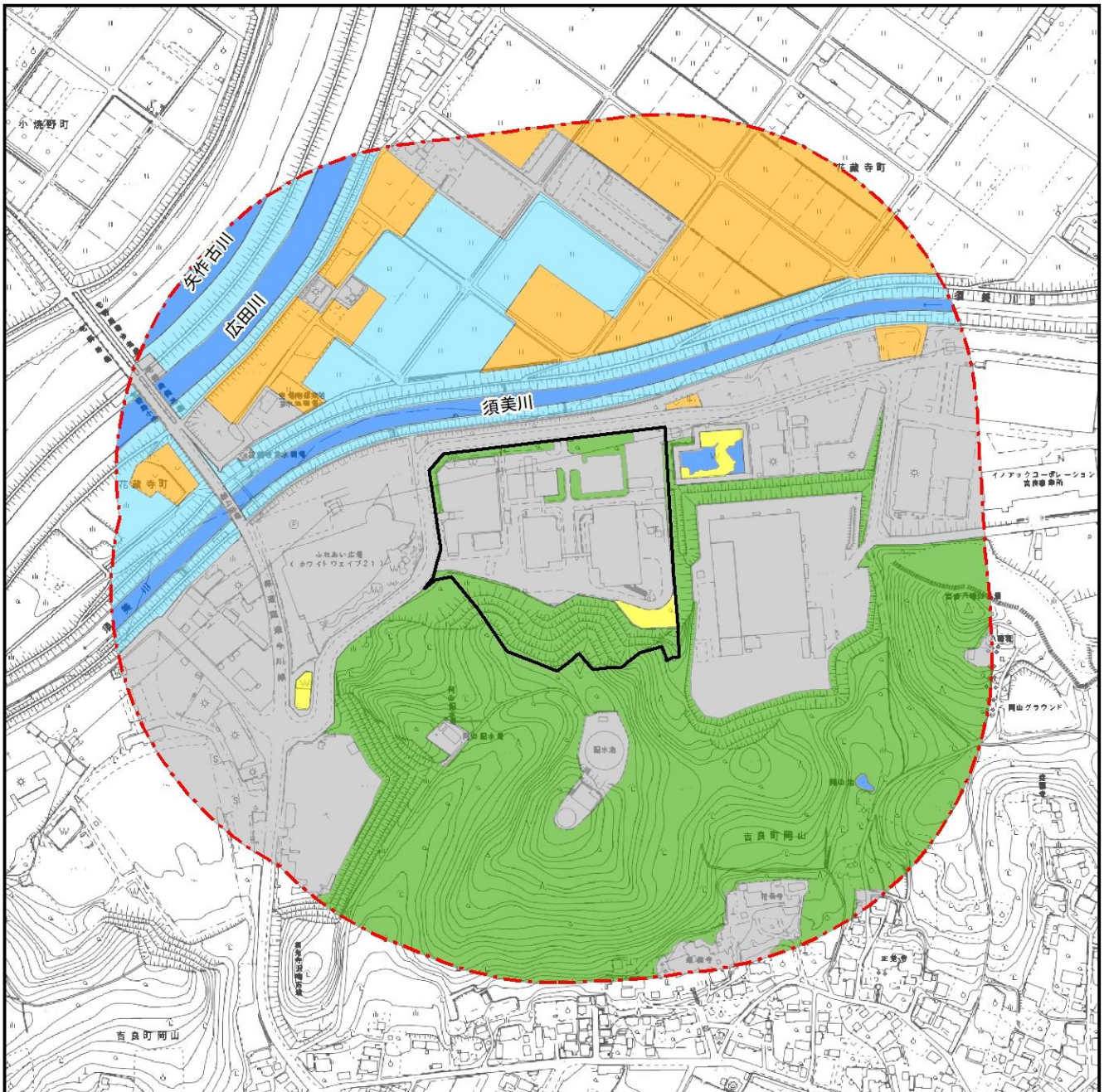
調査地域を大きく小起伏山地、平野及び河川に区分し、それぞれに成立する樹林地、草地又は改変地に区分し、計6区分とした。

自然環境類型区分は表 8.11.3 及び図 8.11.1 に示すとおりである。



表 8.11.3 自然環境類型区分

地形	環境類型区分		植生－土地利用	特 徴
小起伏 山地	樹林地		アベマキ群落 ケヤキ群落 コナラ群落 シイ・カシ二次林 スギ・ヒノキ植林 果樹園 竹林 クスノキ植林	主に、シイ・カシ二次林が対象事業実施区域南側の緩斜面に広く分布しているほか、斜面上部にはコナラ群落分布している。 また、対象事業実施区域南側の切土法面にはアベマキ群落分布しているほか、対象事業実施区域内にはクスノキやクロマツが植栽されたクスノキ植林が分布している。
	草地	湿生 草地	アゼスゲ群落 高茎草本群落	対象事業実施区域内には切土法面など周辺からの浸出水により維持されているアゼスゲ群落分布している。 そのほか、対象事業実施区域東側などには高茎草本群落分布している。
	改変地		造成地 人工構造物 道路 調整池	対象事業実施区域内の大部分は造成地及び人工構造物で占められており、対象事業実施区域外にも一定のまとまりをもった造成地、人工構造物等が見られる。なお、対象事業実施区域の北側に東西に伸びる道路が見られる。
平野	草地	乾性 草地	畑雑草群落	対象事業実施区域北側の平野に広く分布している。
		湿生 草地	クズ群落 放棄水田雑草群落 水田雑草群落	対象事業実施区域北側の河川敷にクズ群落が带状に分布しているほか、平野に水田雑草群落が広く分布している。 対象事業実施区域西側に位置する湛水域には小規模な放棄水田雑草群落分布している。
河川	水域		須美川 矢作古川 広田川	対象事業実施区域北側には須美川が流れ、対象事業実施区域の西側で矢作古川及び広田川に合流している。

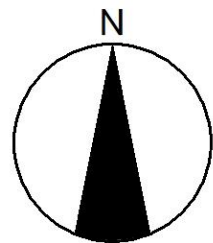




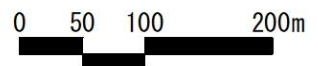
凡 例

-  対象事業実施区域
-  調査地域

小起伏山地	樹林地	
	草地 湿生草地	
平野	草地 乾性草地	
	湿生草地	
河川	水域	



1:6,000



この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図（令和 3 年 11 月閲覧）」を使用したものである。

図 8.11.1 環境類型区分図

③ 基盤環境及び生物群集

調査地域を南北に横断する断面を想定し、基盤環境と生物群集との関係を表した模式図は、図 8.11.2 に示すとおりである。

行動範囲の広いオオタカ等の猛禽類は小起伏山地から平野にわたり、対象事業実施区域及びその周辺を広く利用しているが、そのような広い行動圏をもつ種以外は、各環境に依存又は適応した種が生息・生育している。

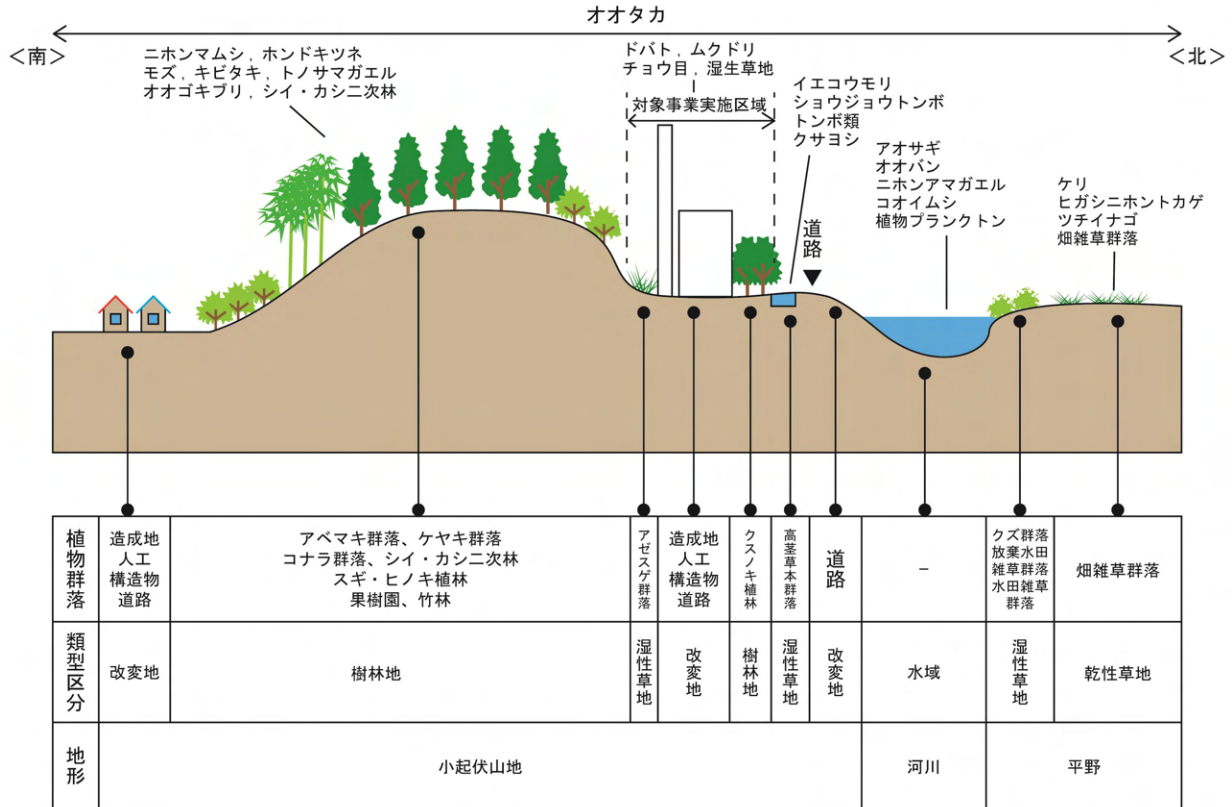


図 8.11.2 基盤環境と生物群集の模式図

④ 食物網の状況

調査地域の生態系を構成する動植物の生態的な特性を踏まえ、捕食・被食関係を整理した食物網想定図は、図 8.11.3 に示すとおりである。

調査地域は、小起伏山地、平野及び河川に区分される。

対象事業実施区域は小起伏山地に位置し、造成地等が大部分を占めるほか、一部に湿生草地在り分布しており、水生昆虫や両生類などの生息環境として成立している。また、対象事業実施区域南側の樹林地には照葉樹林であるシイ・カシ二次林や竹林が広く分布し、全体的に乾燥した環境となっている。また、動植物の生息・生育環境として樹林性の動植物による食物網が存在する。なお、この樹林地を中心として、行動圏の広い動物は小起伏山地を広く利用している。

平野には、耕作地といった乾燥した環境で成立する食物網が存在するとともに、水田といった湿潤な環境で成立する食物網が存在している。

なお、行動圏の広い中型哺乳類や猛禽類は、小起伏山地から平野の広い範囲を網羅する食物網が存在していると考えられる。

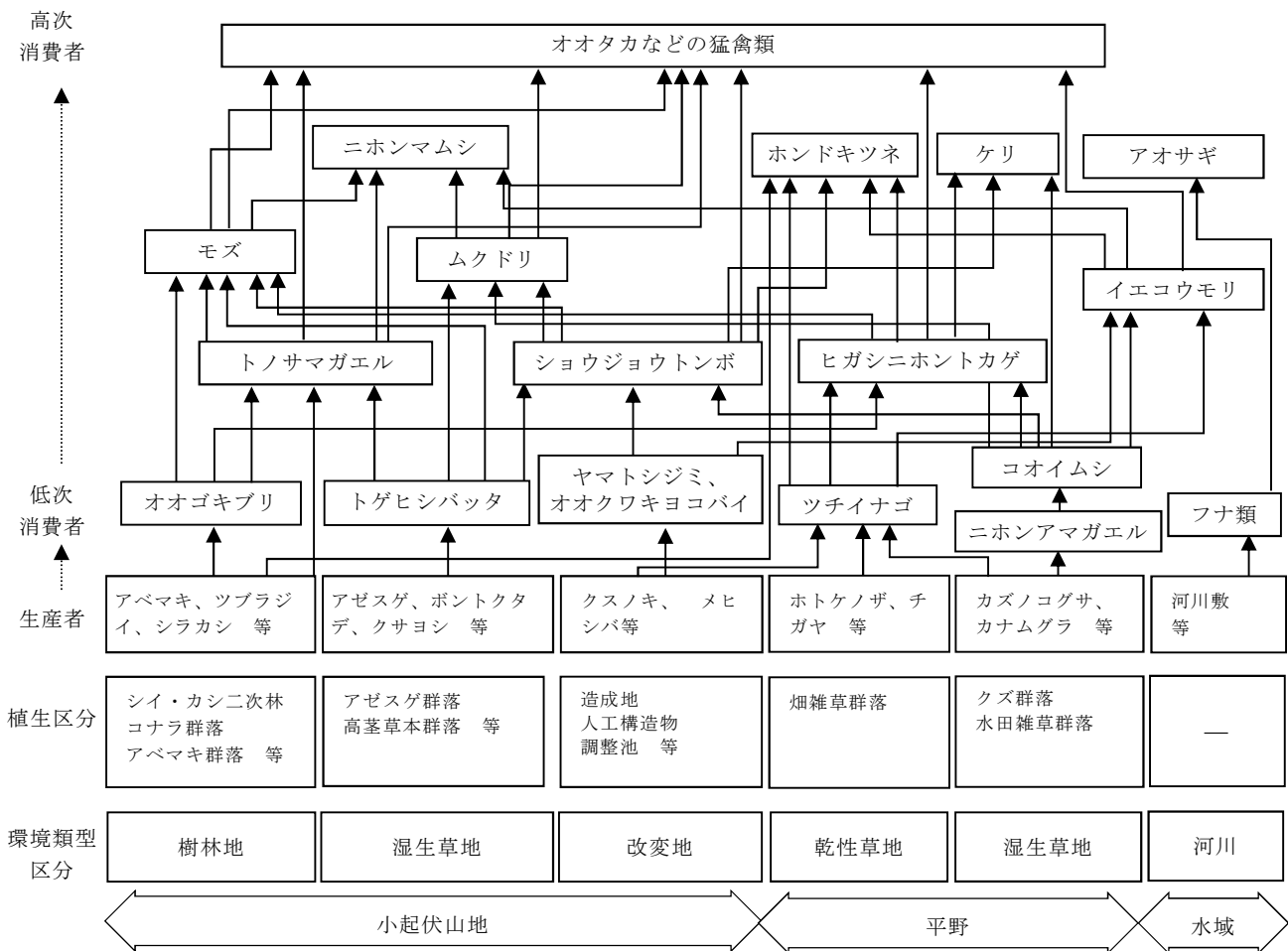


図 8.11.3 食物網想定図

(2) 複数の注目種等の生態、他の動植物との関係又は生息環境若しくは生育環境の状況

① 複数の注目種等の検討

調査地域を特徴づける生態系の指標となる注目種等を選定するに当たり、上位性、典型性、特殊性の観点は、表 8.11.4 に示すとおりである。

また、注目種等の検討結果は、表 8.11.5(1)、(2)に示すとおりである。

表 8.11.4 調査地域を特徴づける生態系における注目種等の観点

区分	考え方
上位性	生態系を形成する生物群集において栄養段階の上位に位置する種を対象とする。該当する種は相対的に栄養段階の上位の種で、生態系の攪乱や環境変動等の影響を受けやすい種が対象となる。
典型性	対象地域の生態系の中で重要な機能的役割をもつ種・群集や、生物の多様性を特徴づける種・群集を対象とする。該当するものは、生物間の相互作用や生態系の機能に重要な役割を担うような種・群集（例えば、植物では現存量や占有面積の大きい種、動物では個体数が多い種や個体重が大きい種等）、生物群集の多様性を特徴づける種や生態遷移を特徴づける種等が対象となる。
特殊性	小規模な湿地、洞窟、噴気口の周辺、石灰岩地域等の特殊な環境において、占有面積が小規模で周囲には見られない環境に着目し、そこに生息する種・群集を選定する。該当する種・群集としては、これらの環境要素や環境条件に生息が強く依存する種・群集があげられる。

出典：「自然環境のアセスメント技術（I）」（平成9年 環境庁）

表 8.11.5(1) 注目種等の検討

区分	分類	種名	検討結果	理由
上位性	哺乳類	ホンドキツネ	×	現地調査では、調査地域の広い範囲で確認されたものの、確認数は少なく、当該地域を主要な生息環境としているとは言えないことから、選定しなかった。
		イエコウモリ	×	現地調査では、調査地域の広い範囲で確認されたものの、確認数は少なく、当該地域を主要な生息環境としているとは言えないことから、選定しなかった。
	鳥類	オオタカ	○	現地調査では、対象事業実施区域周辺で繁殖が確認された。対象事業実施区域内における狩場等の利用はないものの、高利用域及び営巣中心域を含むこと、調査地域の広い範囲で狩り行動や食痕が確認されていることから選定した。
		ハイタカ ノスリ	×	現地調査では、飛翔が確認されたものの冬季に越冬するための一時利用であると推察されることから、選定しなかった。
		フクロウ	×	現地調査では、対象事業実施区域周辺で繁殖している可能性が考えられたものの、主要な利用場所は限定的であるため、選定しなかった。
		アオサギ	×	現地調査では、対象事業実施区域周辺の河川区域及び水田が広がる耕作地での飛翔や採餌等が確認されているが、主要な利用場所は調査地域外であるため、選定しなかった。

表 8.11.5(2) 注目種等の検討

区分	分類	種名	検討結果	理由
典型性	哺乳類	ホンダタヌキ	×	現地調査では、調査地域の広い範囲で確認されたものの、確認数は少なく、当該地域を主要な生息環境としているとは言えないことから、選定しなかった。
	鳥類	ヒヨドリ、スズメ、ムクドリ、キジバト	×	現地調査では、調査地域全域で広く確認されたものの、これらの種は都市部から草地まで多様な環境に生息することから、選定しなかった。
	両生類	カエル類	○	現地調査では、調査地域全域で広く確認され、水田環境や樹林環境において生態系の栄養段階の中位に位置することから注目種として選定した。
	爬虫類	ヒガシニホントカゲ	×	現地調査では、調査地域の広い範囲で確認されたものの、確認数は少なかったことから、選定しなかった。
	昆虫類	ツチイナゴ	×	現地調査では、成虫が確認されているものの主要な生息環境は河川敷の草地や畑地の限定的な範囲であるため、注目種として選定しなかった。
	魚類	—	—	調査地域には須美川などの水域が存在するものの、通年魚類が確認される環境ではないことから、選定しなかった。
	植物	照葉樹林 (シイ・カシ二次林)	○	対象事業実施区域南側の樹林に広く分布しており、対象地域を特徴づける動物の生息基盤となっていることから、典型性の群集として選定した。
特殊性	昆虫類	ヒメタイコウチ	○	調査地域内での生息が確認されたことから、特殊性の注目種として選定した。
	植物	湿生草地	○	対象事業実施区域内及びその周辺で確認され、重要な水生昆虫や両生類などの生息環境となっていることから、特殊性の群集として選定した。



② 複数の注目種等の調査

a) 調査項目

調査項目は、表 8.11.6 に示すとおりである。

表 8.11.6 調査項目

区分	注目種	文献その他の資料調査	現地調査
上位性	オオタカ	○	○
典型性	カエル類	○	○
	照葉樹林（シイ・カシ二次林）	○	○
特殊性	ヒメタイコウチ	○	○
	湿生草地	○	○

b) 調査地域

調査地域は、「8.9 動物」及び「8.10 植物」と同様とした。

c) 調査方法

ア. 文献その他の資料調査

文献その他の資料をもとに、注目種の生態や分布に関する知見を整理した。

イ. 現地調査

i. 調査期間

調査期間は、表 8.11.7 に示すとおりである。

表 8.11.7 調査期間

区分	注目種等	現地調査期間	
上位性	オオタカ	1 営巣期	令和4年2月15日(火)、16日(水) 令和4年3月22日(火)、23日(水) 令和4年4月15日(金)、16日(土) 令和4年5月27日(金)、28日(土) 令和4年6月21日(火)、22日(水) 令和4年7月11日(月)、12日(火) 令和4年8月11日(木)、12日(金)
		2 営巣期	令和5年2月14日(火)、15日(水) 令和5年3月14日(火)、15日(水) 令和5年4月6日(木)、7日(金) 令和5年5月10日(水)、11日(木) 令和5年6月17日(土)、18日(日) 令和5年7月14日(金)、15日(土) 令和5年8月22日(火)、23日(水)
		林内踏査	令和4年4月16日(土) 令和4年5月28日(土) 令和4年6月22日(水)、24日(金) 令和4年7月12日(火) 令和5年6月20日(火)
典型性	カエル類	早春季	令和5年2月16日(木)
		春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
		夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
		秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
	照葉樹林 (シイ・カシ二次林)	早春季	令和5年4月14日(金)
		春季	令和5年5月18日(木)
		夏季	令和5年7月21日(金)
		秋季	令和5年9月28日(木)
特殊性	ヒメタイコウチ	春季	令和5年5月12日(金)～21日(日)
		夏季	令和5年7月12日(水)～24日(月)
		秋季	令和5年10月3日(火)～15日(日)
	湿生草地	早春季	令和5年4月14日(金)
		春季	令和5年5月18日(木)
		夏季	令和5年7月21日(金)
		秋季	令和5年9月28日(木)

ii. 調査地点

調査地点は、「8.9 動物」及び「8.10 植物」と同様とした。

iii. 調査方法

調査方法は、「8.9 動物」及び「8.10 植物」と同様とした。

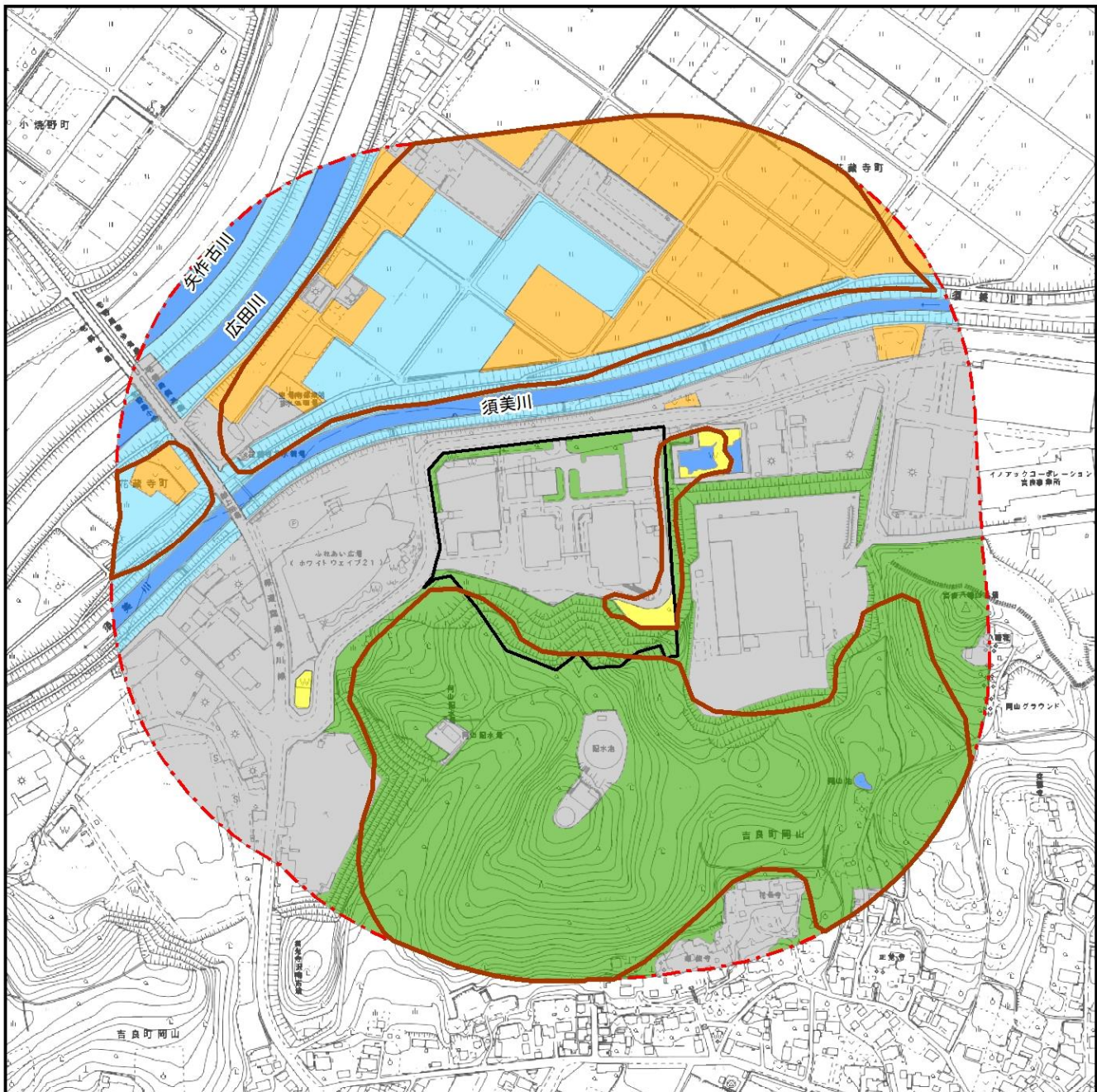
d) 調査結果

調査地域の生態系に関する影響を予測及び評価する上で必要な注目種等の生態等と生息・生育状況は、表 8.11.8 に示すとおりである。

また、注目種等の確認位置は図 8.11.4～図 8.11.6 に示すとおりである（オオタカ及びヒメタイコウチは重要な種保護の観点から非公開とする）。


表 8.11.8 注目種等の生態等と生息・生育状況

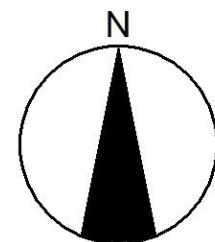
区分	種名	生態等	生息・生育状況
上位性	オオタカ	<p>平地から山地の樹林地に生息する。全長は、雄で約50cm、雌では約56cmだが、個体差が目立つ。成鳥では上面が灰褐色、下面が白色で褐色の横斑がある。雌は褐色味が強く、雄は青味があることが多い。白色の眉斑と、黒色の眼帯が特徴的である。主として鳥類を捕食する。</p> <p>北海道と本州に周年生息して繁殖し、四国、九州では主に冬期に生息する。愛知県内では、繁殖期に山地から山麓、丘陵地、平野部の緑地から河川敷まで広く分布するが、山地で姿を見られる頻度は、平地や丘陵地、山麓に比較するとかなり低い。</p>	<p>春季、繁殖期、秋季、猛禽類調査時など、ほぼ周年で確認された。対象事業実施区域周辺の樹林地で繁殖が確認された（令和4年：繁殖中断、令和5年：巢内幼鳥確認）。</p>
典型性	カエル類	<p>水田・池沼・河川等の止水・緩流域に生息し、地表で活動することも多い。産卵のピークは5～6月頃であり、卵から孵化後、オタマジャクシとして水中に生息する。変態し、成体のカエルとなった後は、呼吸をするとき以外は水中で暮らす水棲と、ほとんど陸上だけで暮らす地上棲の2種類に分けられる。</p>	<p>対象事業実施区域及びその周辺の水田や止水域、樹林地など様々な環境で広く確認された。</p>
	照葉樹林 (シイ・カシ二次林)	<p>年間を通して温暖で降水量が多い環境に生育する樹林であり、西日本を中心に広く分布している。常緑広葉樹林で構成されており、厚いクチクラ層を持つ葉によって光沢のある林冠を形成する。</p> <p>スダジイやタブノキ、カシ類などが高木層を形成し、亜高木層や低木層にはヤブツバキやサカキ、ヒサカキなどが多く見られる。また、古くから薪炭林として利用されてきた森林では人為的影響を受けており、二次林となっている。</p>	<p>対象事業実施区域南側の樹林内で広く確認され、アラカシやツブラジイなどのブナ科の常緑広葉樹が優占している。</p>
特殊性	ヒメタイコウチ	<p>湿地、水田や用水路、溜め池の水辺などで常に水の流入が認められる環境に生息する。体長は約18～22mmである。体型は長卵形で光沢ない暗褐色を呈し、尾端の呼吸管は非常に短い。前脚は捕獲脚になっている。小石や植物の堆積物の下などに潜み、クモ類やゴミムシ類など徘徊性の小動物を捕食する。飛翔しないため移動性が乏しい。</p> <p>本州及び四国に分布し、愛知県内では幸田町や西尾市（旧市域、旧吉良町、旧幡豆町）など県内各地に分布している。</p>	<p>事前踏査、春季及び秋季調査時に対象事業実施区域内の湿地環境で成虫及び幼虫が確認され、対象事業実施区域内で繁殖しているものと考えられる。なお、夏季調査に対象事業実施区域西側の湿地帯でも確認されたが、確認個体数は1個体のみであった。</p>
	湿生草地	<p>周辺からの浸出水や雨水により維持されている、日当たりの良い湿地や小川の縁などの水辺や平地から山間の河畔などに特徴的に生育する草本植物で構成される草地である。</p> <p>湿生草地はトンボ類やヒメタイコウチなどの水生昆虫、トノサマガエルなどの両生類の生育環境となる。</p>	<p>対象事業実施区域内で確認されたアゼスグ群落及び周辺で確認された高茎草本群落が該当する。雨水や周辺からの浸出水などにより維持されている。アゼスグ群落は、アゼスグやボントクタデ、ヌメリグサなど、高草本群落はクサヨシやガマなどの湿生植物で構成される。</p>



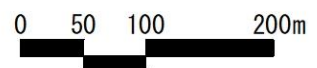
凡 例

-  対象事業実施区域
-  調査地域
-  カエル類確認範囲

小起伏山地	樹林地	
	草地 湿生草地	
平野	改変地	
	草地 乾性草地 湿生草地	
河川	水域	



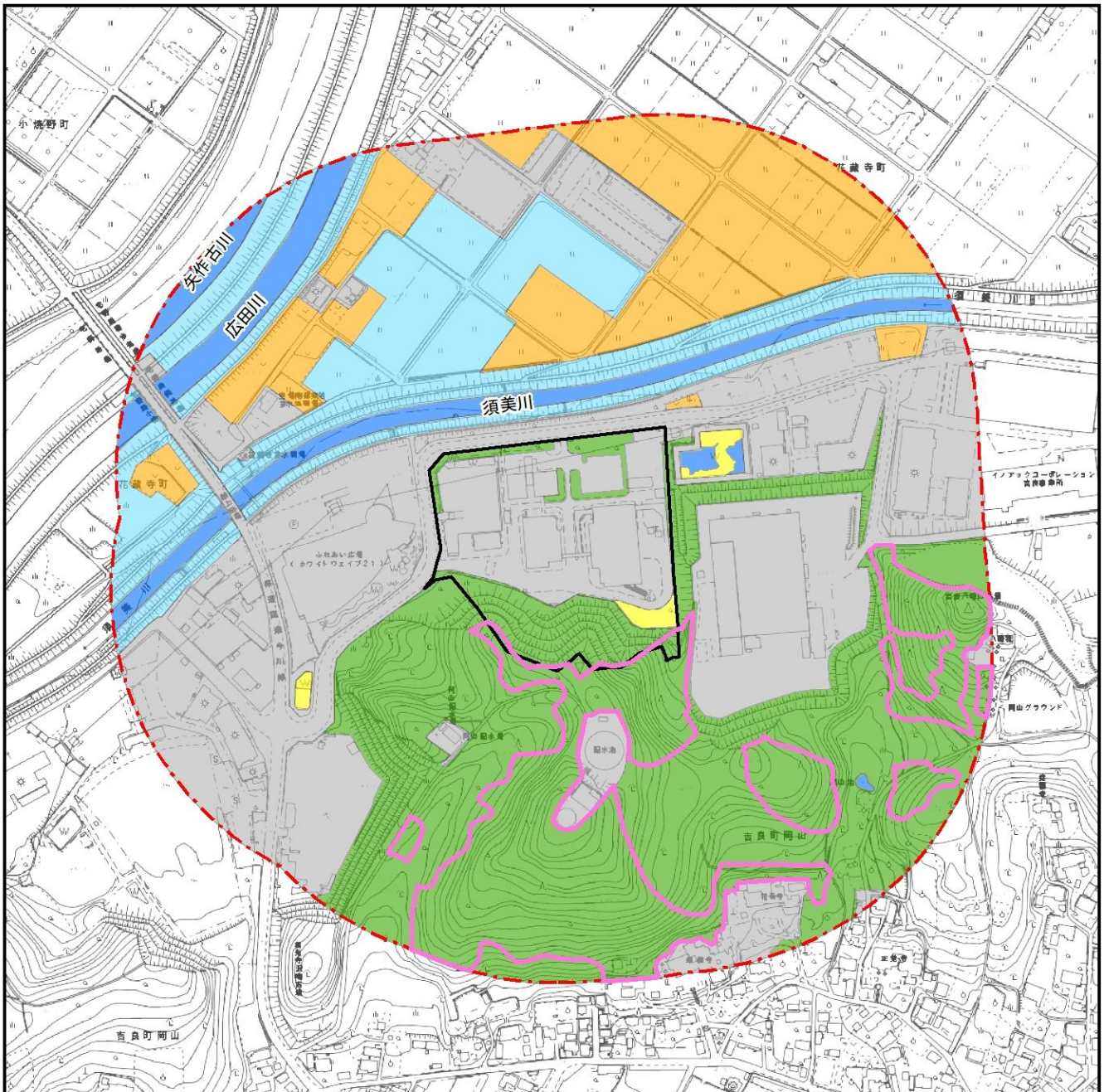
1:6,000






この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。

図 8.11.4 典型性 (カエル類) の確認状況





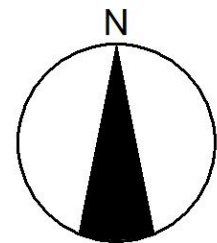
凡 例

-  対象事業実施区域
-  調査地域
-  照葉樹林(シイ・カシ二次林)確認範囲

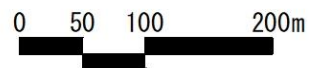
	樹林地		
小起伏山地	草地	湿生草地	
	改変地		
平野	草地	乾性草地	
		湿生草地	
河川	水域		

この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。

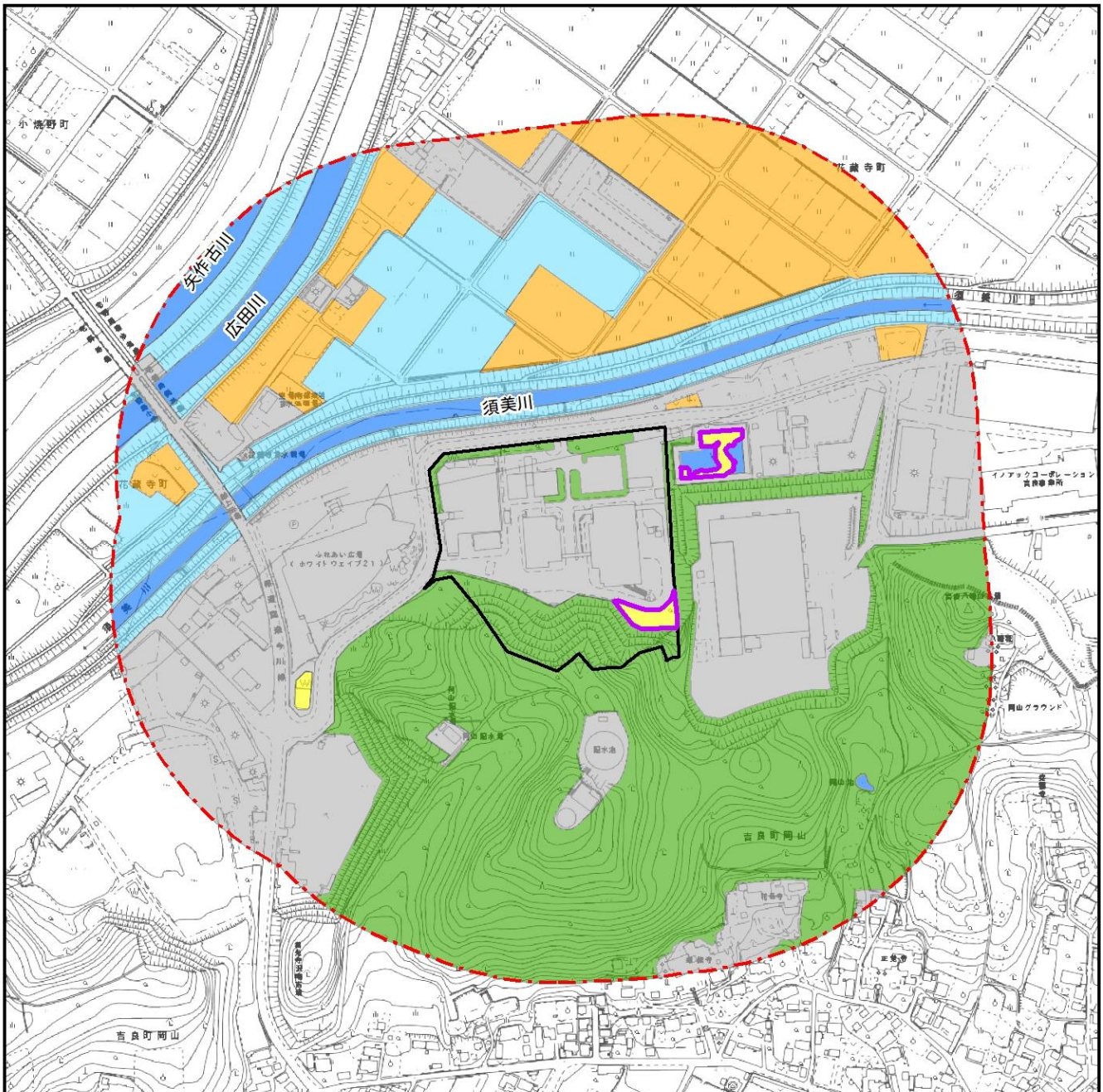
図 8.11.5 典型性 (照葉樹林) の確認状況



1:6,000



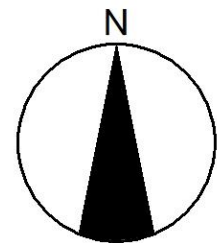




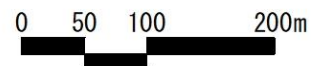
凡 例

-  対象事業実施区域
-  調査地域
-  湿性草地確認範囲

	樹林地	
小起伏山地	草地	
	湿生草地	
	改変地	
平野	草地	
	乾性草地	
河川	水域	



1:6,000



この地図は、「西尾市地図情報サービス にしたんマップ 1:5,000 地形図 (令和 3 年 11 月閲覧)」を使用したものである。

図 8.11.6 特殊性 (湿生草地) の確認状況

- ③ 代償措置を検討する場合における注目される動植物の種又は生物群集の特性、現生息・生育地及び代償措置実施場所の環境条件、類似事例等の状況  
対象事業実施区域及びその周辺では、代償措置を検討する対象となる動植物は確認されなかった。

### 8.11.2 予測

予測の対象は、調査で生息及び生育が確認された注目種等とした。

#### 8.11.2.1 工事の実施

##### (1) 予測方法

##### ① 予測事項

予測事項は、表 8.11.9 に示すとおりである。

なお、既存の工作物等の除去と比べて生態系への影響が大きくなると考えられる掘削・盛土等の土工を予測対象となる要因とした。

表 8.11.9 予測事項（建設機械の稼働等、掘削・盛土等の土工）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
建設機械の稼働等	注目種等やその生息・生育環境への影響	建設機械の稼働等に伴い発生する騒音に対する哺乳類や鳥類の忌避行動
		建設機械の稼働により発生する粉じんによる植物種の生体機能への影響
掘削・盛土等の土工		掘削・盛土等の土工に伴う土地の改変による植物種の減少及び生育・生息環境の消失又は変化

##### ② 予測地域

動植物の調査地域のうち、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて、注目種等に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300m の範囲を基本とした。なお、行動範囲の広い種については、生態的特性を考慮し、適切な予測地域を設定した。

##### ③ 予測対象時期

予測対象時期は、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて注目種等に係る環境影響を的確に把握できる時期として、生態系へ及ぼす影響が最も大きくなる時期である掘削等の土工の期間とした。

##### ④ 予測方法

予測方法は、注目種（上位性・典型性・特殊性の観点から生態系を特徴づける生物種）等の分布、生息又は生育環境の改変の程度を把握した上で、事業計画における環境配慮事項を踏まえた定性的予測とした。

なお、オオタカについては、有識者に聞き取りを行い、その内容を踏まえた予測を行った。有識者への聞き取り結果は表 8.11.10 に示すとおりである。

表 8.11.10 有識者への聞き取り結果概要（予測方法）

専門分野 (聞き取り実施日)	結果概要
オオタカ (令和6年2月7日)	<p>【対象者：地元研究会会員】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>オオタカの行動圏解析結果を含む調査結果及び予測結果は問題ないとする。</li> <li>対象事業実施区域周辺で繁殖している猛禽類はオオタカ及びフクロウの2種であること、了解した。また、本事業による影響は極めて小さいという予測結果で問題ないとする。</li> </ul>

(2) 予測結果

① 上位性（オオタカ）

注目種等のうち繁殖が確認されたオオタカについて、行動圏解析を行った（解析方法はマニュアルによった）。行動圏解析結果は、表 8.11.11 に示すとおりである。

営巣中心域は、令和5年に幼鳥の飛翔が古巣周辺で確認されたことから、古巣及びR5営巣地から300mの範囲内にある樹林地とした。対象事業実施区域内には高利用域が0.45%、営巣中心域が3.64%含まれているものの、いずれも工事の実施による変化はない。さらに、工事にあたっては低騒音型の建設機械の使用に努めることから工事による影響は極めて小さいものと予測する。

表 8.11.11 行動圏解析結果

項目	面積・距離等
行動圏(R5営巣地から3km)の面積	2,827.31ha
うち樹林地面積	303.43ha
うち主要な採食地面積	189.54ha
高利用域の面積	990.95ha
うち対象事業実施区域内の面積	約4.5ha
高利用域の割合	0.45%
営巣中心域の面積	24.47ha
うち対象事業実施区域内の面積	0.89ha
営巣中心域の割合	3.64%

また、餌資源は、対象事業実施区域南側の樹林内や耕作地に生息する小型から中型鳥類などが考えられ、低騒音型の建設機械の使用に努めるとともに、変更面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事による影響は極めて小さいものと予測する。

② 典型性（カエル類）

カエル類は、調査期間を通して対象事業実施区域内及びその周辺の水田や止水域、樹林地など様々な環境で広く確認されており、これらは哺乳類や鳥類などの重要な餌資源になっていると考えられる。

工事の実施により、対象事業実施区域内の一部は変更されるものの、カエル類の主な産卵環境や採餌環境である水域及び産卵期以外の生息環境である湿生環境や樹林環境などは変更されない。また、水域と湿生環境及び樹林環境の連続性についても維持され、対象事業実施区域外の水田や止水域、樹林地などの生息環境は変化しない。さらに、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、変更面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

③ 典型性（照葉樹林（シイ・カシ二次林））

対象事業実施区域南側の樹林地で広く確認されており、落葉広葉樹林に生息するオオゴキブリなどの昆虫類の重要な生息基盤となっているとともに、それら昆虫類を捕食するトノサマガエルなどの両生類やヒガシニホントカゲなどの爬虫類、モズやオオタカなどの鳥類、ホンドキツネなどの哺乳類の生息環境及び採餌環境となっているものと考えられる。

照葉樹林は対象事業実施区域内に一部分布しているものの、工事の実施により改変されることはない。また、対象事業実施区域外の照葉樹林についても生育環境の変化はない。

さらに、工事の実施に伴う建設機械の稼働により発生する粉じんによって、対象事業実施区域及びその周辺の植物種の生体機能に変化する可能性があると考えられるが、粉じんが飛散すると考えられる場合には、適宜散水を行って粉じんの飛散を防止する、工事にあたっては改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

④ 特殊性（ヒメタイコウチ）

ヒメタイコウチは、対象事業実施区域内の湿地環境で成虫及び幼虫が確認され、対象事業実施区域内で繁殖しているものと考えられる。

対象事業実施区域内の確認箇所は、継続的に安定した生息地であると考えられ、確認箇所は工事の実施により改変されない。また、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。

⑤ 特殊性（湿生草地）

対象事業実施区域内及びその周辺の止水域で確認され、ヒメタイコウチやトンボ類、アメンボの仲間などの止水域を好む昆虫類やトノサマガエルなどの両生類の生息環境及び採餌環境となっているものと考えられる。

湿生草地は、対象事業実施区域内に一部分布しているものの、工事の実施により改変されることはない。また、対象事業実施区域外の湿生草地についても生育環境の変化はない。

さらに、工事の実施に伴う建設機械の稼働により発生する粉じんによって、対象事業実施区域及びその周辺の植物種の生体機能に変化する可能性があると考えられるが、粉じんが飛散すると考えられる場合には、適宜散水を行って粉じんの飛散を防止する、工事にあたっては仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する、改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮することから、工事の実施による影響は極めて小さいものと予測する。



### 8.11.2.2 施設の存在

#### (1) 予測方法

##### ① 予測事項

予測事項は表 8.11.12 に示すとおりである。

なお、地形改変による影響については、「8.11.2.1 工事の実施」に示した内容と同様であり、供用時は施設の存在による影響を予測する。

表 8.11.12 予測事項（地形改変並びに施設の存在）

予測対象となる要因	予測事項	想定される影響等
施設の存在	生息地の減少、分断	施設の存在による注目種等の消失・減少
	植物やその生育環境への影響	施設の存在に伴い生じる日影による生育環境の変化

##### ② 予測地域

動植物の調査地域のうち、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて、注目種等に係る環境影響を受けるおそれがあると認められる地域として、対象事業実施区域及び周囲約 300m の範囲を基本とした。なお、行動範囲の広い種については、生態的特性を考慮し、適切な予測地域を設定した。

##### ③ 予測対象時期

予測対象時期は、動植物その他の自然環境の特性及び注目種等の特性を踏まえて注目種等に係る環境影響を的確に把握できる時期として、計画施設の稼働が定常の状態となる時期とした。

##### ④ 予測方法

予測方法は、注目種（上位性・典型性・特殊性の観点から生態系を特徴づける生物種）等の分布、生息又は生育環境の改変の程度を把握した上で、事業計画における環境配慮事項を踏まえた定性的予測とした。

#### (2) 予測結果

##### ① 上位性（オオタカ）

オオタカは、対象事業実施区域周辺で繁殖が確認された。また、対象事業実施区域内における狩場などの利用は確認されていないが、対象事業実施区域上空での旋回飛翔や周辺への飛翔が確認されていることから、対象事業実施区域及びその周辺を行動範囲として利用していると考えられる。また、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

また、対象事業実施区域南側の樹林内や耕作地に生息する小型から中型鳥類などが考えられ、施設の存在による餌資源の生息環境の変化は小さいことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

② 典型性（カエル類）

カエル類は、調査期間を通して対象事業実施区域周辺の水田や止水域、樹林地など様々な環境で広く確認されており、これらは哺乳類や鳥類などの重要な餌資源になっていると考えられる。

対象事業実施区域内でも確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はない。また、対象事業実施区域外にも生息環境が残ることから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

③ 典型性（照葉樹林（シイ・カシ二次林））

照葉樹林は、対象事業実施区域南側の樹林地で広く確認されており、落葉広葉樹林に生息するオオゴキブリなどの昆虫類の重要な生息基盤となっているとともに、それら昆虫類を捕食するトノサマガエルなどの両生類やヒガシニホントカゲなどの爬虫類、モズやオオタカなどの鳥類、ホンドキツネなどの哺乳類の生息環境及び採餌環境となっているものと考えられる。

対象事業実施区域内に一分布しており、施設の存在に伴い生じる日影により、日照量が減少するなどの生育環境の変化が考えられるものの、日照障害の予測結果から、長時間日影となる範囲は主に対象事業実施区域の北側となり、照葉樹林の生育場所にかかる可能性はない。

以上のことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

④ 特殊性（ヒメタイコウチ）

ヒメタイコウチは、対象事業実施区域内の湿地環境で成虫及び幼虫が確認され、対象事業実施区域内で繁殖しているものと考えられる。

対象事業実施区域内で確認されているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

⑤ 特殊性（湿生草地）

湿生草地は、対象事業実施区域内及びその周辺の止水域で確認され、ヒメタイコウチやトンボ類、アメンボの仲間などの止水域を好む昆虫類やトノサマガエルなどの両生類の生息環境及び採餌環境となっているものと考えられる。

対象事業実施区域内に一分布しており、施設の存在に伴い生じる日影により、日照量が減少するなどの生育環境の変化が考えられるものの、日照障害の予測結果から、長時間日影となる範囲は主に対象事業実施区域の北側となり、湿生草地の生育場所にかかる可能性はない。

以上のことから、施設の存在による影響は極めて小さいものと予測する。

### 8.11.3 評価

#### 8.11.3.1 評価方法

##### (1) 環境影響の回避・低減による評価

工事の実施及び施設の存在による地域を特徴づける生態系の注目種等に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避又は低減されているかどうかについて評価した。

#### 8.11.3.2 環境保全措置

##### (1) 工事の実施

###### ① 建設機械の稼働等及び掘削・盛土等の土工

事業計画の策定時における環境配慮事項のうち、予測に反映されている環境配慮事項は以下のとおりである。

- ・適宜散水を行って粉じんの飛散を防止する。
- ・工事中は排出ガス対策型及び低騒音型の建設機械の使用に努め、仮設沈砂池等の設置による濁水対策を実施する。
- ・改変面積を可能な限り小さくし、保全可能な部分については極力保全を図るよう配慮する。

また、工事の実施に伴う注目種等への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.11.13(1)、(2)に示すとおりである。

なお、今後注目種等の環境保全措置を検討する必要がある場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.11.13(1) 環境保全措置（建設機械の稼働等）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
建設機械の作業待機時におけるアイドリングストップを徹底する。	事業者	注目種等全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
工事関係者に対し定期的に地域の自然環境や周辺環境への配慮事項について講習・指導を行う。	事業者	注目種等全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
工事事業者へ定期的な講習・指導を行う(草地等への不用意な立ち入りや屋外へのごみ捨て禁止等について工事従事者に指導する)。	事業者	注目種等全般への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。

表 8.11.13(2) 環境保全措置（掘削・盛土等の土工）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
コンクリート工事による排水は、必要に応じて中和処理等を行う。	事業者	水域・水辺に依存する注目種等への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
台風、集中豪雨等が予想される場合には土工事は行わない。	事業者	水域・水辺に依存する注目種等への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
必要に応じて造成面へのシート、土嚢による養生等を行う。	事業者	水域・水辺に依存する注目種等への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
堆砂容量を確保するために、必要に応じて仮設沈砂池の堆砂を除去するなど維持管理に努め、適切に濁水対策を実施する。	事業者	水域・水辺に依存する注目種等への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
現地調査において確認されたヒメタイコウチについて、生息環境の保護に努める。	事業者	ヒメタイコウチへの影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。

## (2) 施設の存在

施設の存在に伴う注目種等への環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.11.14 に示すとおりである。

なお、今後注目種の環境保全措置を検討する必要がある場合には、専門家等の助言を得ることとする。

表 8.11.14 環境保全措置（地形改変並びに施設の存在）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
植栽樹木の選定にあたっては、鳥類や昆虫類等の餌となる実をつけたり、樹液を出すような在来種（郷土種）を採用する。	事業者	注目種等全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
施設では不要な照明の早期消灯、昆虫類の誘因性が低いとされるナトリウム灯・LED等の使用に努めるとともに、可能な限り、照明の向きを建物側に向ける等の対策により、夜行性動物類の行動や生態系の攪乱防止に努める。	事業者	注目種等全般への影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。
本事業の緑地における植栽樹種等には、対象事業実施区域周辺の構成樹種や在来種等を可能な限り利用する。	事業者	注目種等全般への影響の低減及び緑化率の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
民間事業者（施設運営者）等へ地域の自然環境や配慮事項について供用開始の際に教育や情報共有等を行う。	事業者	注目種等全般への影響の低減及び生息環境の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
可能な範囲で駐車場等の緑化等、緑化率の向上に努める。	事業者	注目種等全般への影響の低減及び緑化率の向上が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
現地調査において確認されたヒメタイコウチについて、生息環境の保護に努める。	事業者	ヒメタイコウチへの影響の低減が期待される。	小さいと考える。	特になし。



### 8.11.3.3 評価結果

#### (1) 工事の実施

注目種等のうち対象事業実施区域周辺で繁殖が確認されたオオタカについては、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、工事の実施による改変はない。また、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、工事の実施による影響は極めて小さいと判断する。

対象事業実施区域内で繁殖が確認されたヒメタイコウチについては、確認箇所は工事の実施により改変されない。また、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、工事の実施による影響は極めて小さいものと判断する。

オオタカ及びヒメタイコウチ以外の注目種等については、対象事業実施区域を生息環境又は生育環境として利用している種等がいるものの、工事の実施により主要な利用範囲又は生育環境は改変されず、工事にあたっては適切に環境配慮事項を講ずることから、影響は極めて小さいと判断される。

さらに、環境保全措置を実施することから、生態系に係る環境影響は事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られている。

#### (2) 施設の存在

注目種等のうち対象事業実施区域周辺で繁殖が確認されたオオタカについては、対象事業実施区域内に高利用域及び営巣中心域が含まれているものの、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいと判断する。

対象事業実施区域内で繁殖が確認されたヒメタイコウチについては、施設の存在に伴う生息環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいと判断する。

オオタカ及びヒメタイコウチ以外の注目種等については、対象事業実施区域を生息環境又は生育環境として利用している種等がいるものの、主要な生息環境又は生育環境は対象事業実施区域外でも確認され、施設の存在に伴う生息環境又は生育環境の変化はないことから、施設の存在による影響は極めて小さいと判断する。

さらに、環境保全措置を実施することから、生態系に係る環境影響が事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られている。

## 8.12 景觀



## 8.12 景観

### 8.12.1 調査

#### 8.12.1.1 調査方法

##### (1) 調査項目

調査項目は、表 8.12.1 に示すとおりである。

表 8.12.1 景観の調査項目

調査項目	文献その他の資料調査	現地調査
景観資源の状況	○	—
主要な眺望点の状況	○	○
主要な眺望景観の状況	—	○

##### (2) 調査地域

調査地域は、対象事業実施区域周辺とした。

##### (3) 調査方法

###### ① 景観資源の状況

###### a) 文献その他の資料調査

調査地域内の景観資源について、情報を収集・整理した。

###### ② 主要な眺望点の状況及び主要な眺望景観の状況

###### a) 文献その他の資料調査

調査地域内の主要な眺望点の状況及び主要な眺望景観の状況について、情報を収集・整理した。

###### b) 現地調査

###### ア. 調査期間

調査期間は、表 8.12.2 に示すとおりである。

表 8.12.2 調査期間

調査項目	調査期間	
	主要な眺望点の状況	着葉季
主要な眺望景観の状況	落葉季	令和5年12月3日（日）

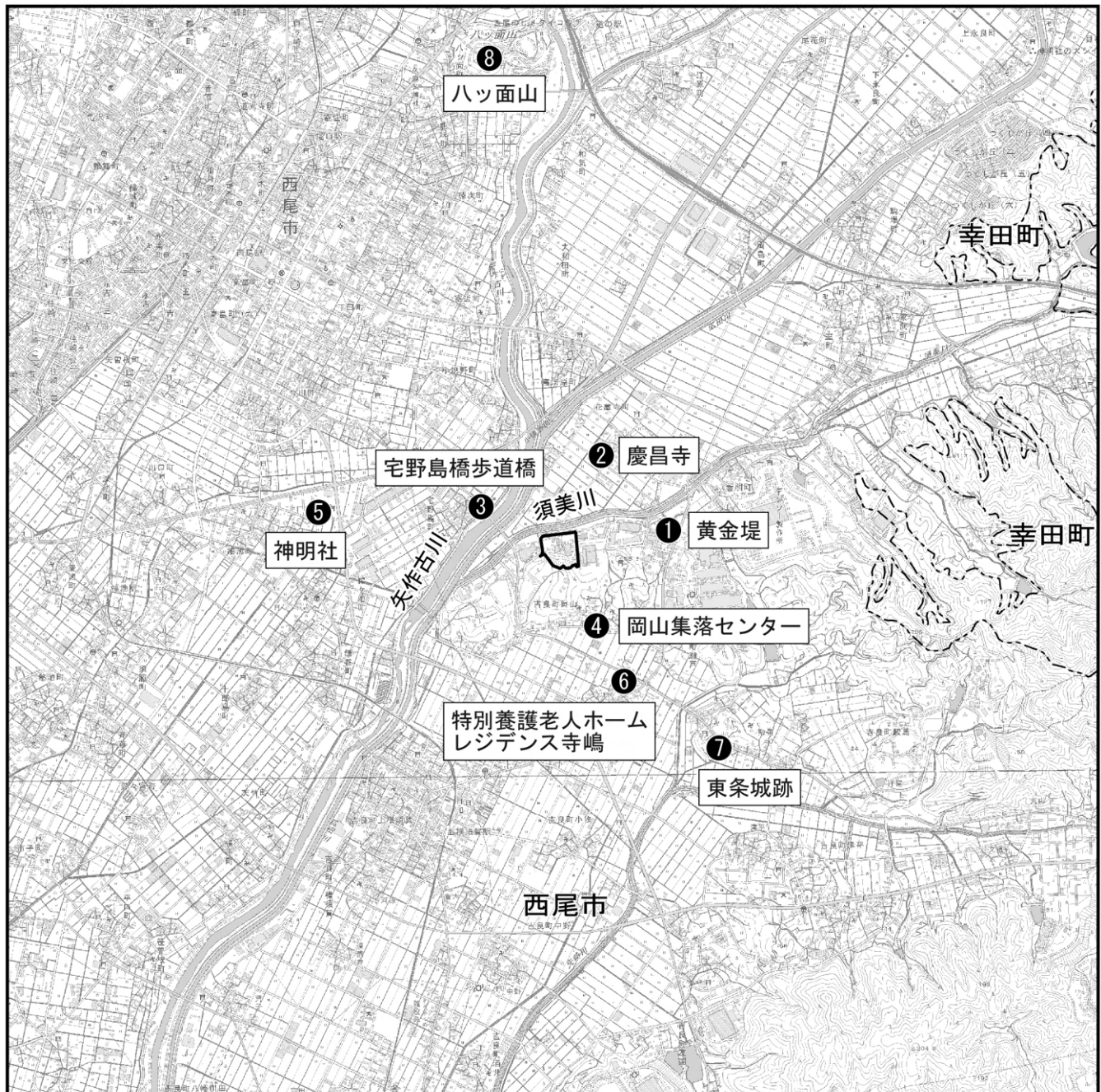
イ. 調査地点

調査地点は表 8.12.3 及び図 8.12.1 に示す8地点とした。




表 8.12.3 調査地点

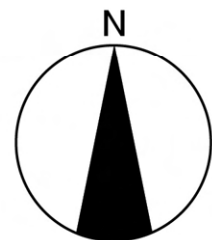
調査項目	地点		選定理由
景観 (眺望景観)	1	黄金堤	対象事業実施区域東側の地点である。 桜の名所として知られており、不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	2	慶昌寺	対象事業実施区域北東側の地点である。 集落の中に位置しており、日常生活における視点の場(身近な景観)又は不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	3	宅野島橋歩道橋	対象事業実施区域北西側の地点である。 県道宮迫今川線に隣接しており、日常生活における視点の場(身近な景観)の地点として選定した。
	4	岡山集落センター	対象事業実施区域南東側の地点である。 集落の中に位置しており、日常生活における視点の場(身近な景観)又は不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	5	神明社	対象事業実施区域西側の地点である。 集落の中に位置しており、日常生活における視点の場(身近な景観)又は不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	6	特別養護老人ホーム レジデンス寺嶋	対象事業実施区域南東側の地点である。 対象事業実施区域最寄りの配慮施設であり、日常生活における視点の場(身近な景観)又は不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	7	東条城跡	対象事業実施区域南東側の地点である。 東条吉良氏の居城跡であり、春には桜を楽しみに多くの人が訪れることから、不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。
	8	八ツ面山	対象事業実施区域北側の地点である。 公園内の展望台からは西尾市内を一望することができ、不特定多数の人が集まる主要な眺望景観の地点として選定した。





凡 例

-  対象事業実施区域
-  市町境
-  景観調査地点



1:40,000



この地図は、国土地理院発行の1:25,000地形図「西尾」「吉田」を使用したものである。

図 8.12.1 景観調査地点図

## ウ. 調査方法

写真撮影によりその状況を把握した。撮影条件は、表 8.12.4 に示すとおりである。

表 8.12.4 撮影条件

区分	調査地点	焦点距離	撮影高さ
主要な眺望景観	地点1 黄金堤	約35mm相当	地上 約1.5m
身近な景観又は 主要な眺望景観	地点2 慶昌寺		
身近な景観	地点3 宅野島橋歩道橋		
身近な景観又は 主要な眺望景観	地点4 岡山集落センター		
	地点5 神明社		
	地点6 特別養護老人ホームレジデンス寺嶋		
主要な眺望景観	地点7 東条城跡		
	地点8 八ツ面山		

注) 撮影画角は、肉眼で見たときに近くなるよう35mm相当とした。

## 8.12.1.2 調査の結果

## (1) 景観資源の状況

## ① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による景観資源の状況の調査結果は「第3章 3.1.9 景観、人と自然との触れ合いの活動の状況及び地域の歴史的文化的特性を生かした環境の状況」に示したとおりである。

## (2) 主要な眺望点の状況及び主要な眺望景観の状況

## ① 文献その他の資料調査

文献その他の資料調査による主要な眺望点の状況及び主要な眺望景観の状況の調査結果は「第3章 3.1.9 景観、人と自然との触れ合いの活動の状況及び地域の歴史的文化的特性を生かした環境の状況」に示したとおりである。

## ② 現地調査

各調査地点からの景観の状況は、図 8.12.2(1)～(8)に示すとおりである。

着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約0.7km

対象事業実施区域からの方位：東

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から東側に位置する主要な眺望景観の地点として、桜並木沿いに整備されている歩道から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは樹木の間から見える事業所越しに現施設の煙突の一部が眺望できる。

<眺望景観の状況>

事業所や駐車場、樹木が主な景観構成要素となっており、樹木の葉の有無及び草木の緑の濃さにより景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(1) 景観の状況（地点1 黄金堤）



着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約0.5km

対象事業実施区域からの方位：北東

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から北東側に位置する身近な景観又は主要な眺望景観の地点として、慶昌寺の駐車場から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは耕作地が広く眺望できるほか、河川堤防越しに現施設の建屋及び煙突が眺望できる。

<眺望景観の状況>

耕作地や現施設の建屋及び煙突が主な景観構成要素となっており、耕作地の緑の濃さや稲穂の有無により景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(2) 景観の状況（地点2 慶昌寺）

着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約0.4km

対象事業実施区域からの方位：北西

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から北西側に位置する身近な景観の地点として、宅野島橋歩道橋から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは矢作古川や河川植生が広く眺望できる。また、樹林越しに現施設の建屋及び煙突が眺望できる。

<眺望景観の状況>

矢作古川や河川植生が主な景観構成要素となっており、草木の緑の濃さにより景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(3) 景観の状況（地点3 宅野島橋歩道橋）



着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約0.4km

対象事業実施区域からの方位：南東

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から南東側に位置する身近な景観又は主要な眺望景観の地点として、岡山集落センター敷地内から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは対象事業実施区域南側にある丘陵及び樹林に遮られ、対象事業実施区域及び現施設の建屋及び煙突は眺望できない。

<眺望景観の状況>

樹林や住宅が主な景観構成要素となっており、樹木の緑の濃さや落葉樹の葉の有無により景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(4) 景観の状況（地点4 岡山集落センター）

着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約1.4km

対象事業実施区域からの方位：西

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から西側に位置する身近な景観又は主要な眺望景観の地点として、神明社入り口付近から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは草地や神明社の社寺林等樹木、道路等が眺望できる。また、建物越しに現施設の煙突の一部が眺望できる。

<眺望景観の状況>

草地や神明社の社寺林等樹木、道路が主な景観構成要素となっており、草地の緑の濃さや落葉樹の葉の有無等により景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(5) 景観の状況（地点5 神明社）



着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約0.8km

対象事業実施区域からの方位：南東

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から南東側に位置する身近な景観又は主要な眺望景観の地点として、特別養護老人ホームレジデンス寺嶋の駐車場から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは草地や住宅等が眺望でき、対象事業実施区域南側の樹林越しに現施設の煙突の一部が眺望できる。

<眺望景観の状況>

草地や住宅が主な景観構成要素となっており、草地及び樹林の緑の濃さによる、景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(6) 景観の状況（地点6 特別養護老人ホームレジデンス寺嶋）

着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約1.4km

対象事業実施区域からの方位：南東

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から南東側に位置する主要な眺望景観の地点として、東条城跡から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは、公園内の草地及び樹林や住宅地が眺望できる。また、対象事業実施区域南側の樹林越しに現施設の煙突の一部が眺望できる。

<眺望景観の状況>

公園内の草地及び樹林や市街地が主な景観構成要素となっており、落葉樹の葉の有無や草地及び樹林の緑の濃さによる、景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(7) 景観の状況（地点7 東条城跡）



着葉季：令和5年5月10日（水）



落葉季：令和5年12月3日（日）



<視点の概要>

対象事業実施区域からの距離：約3.1km

対象事業実施区域からの方位：北

<眺望点の状況>

対象事業実施区域から北側に位置する主要な眺望景観の地点として、公園内の展望台から対象事業実施区域方向を見た景観である。ここからは公園内の樹林や建屋の他、市街地や山地等西尾市内を広く眺望できる。また、市街地越しに現施設の建屋及び煙突が眺望できる。

<眺望景観の状況>

公園内の樹林及び建屋や市街地が主な景観構成要素となっており、樹林等の色彩の変化による景観の季節変化が確認できる。

図 8.12.2(8) 景観の状況（地点8 八ツ面山）



## 8.12.2 予測

### 8.12.2.1 施設の存在

#### (1) 予測方法

##### ① 予測事項

予測事項は、表 8.12.5 に示すとおりである。

表 8.12.5 景観への影響の予測事項（施設の存在）

予測対象となる要因	予測事項
地形改変並びに施設の存在	景観資源への影響 主要な眺望点等からの景観

##### ② 予測対象とした処理方式

特定の処理方式を対象とせず、各処理方式共通の予測を行った。

##### ③ 予測地点

###### a) 景観資源への影響

予測地点は、文献その他の資料調査により抽出された対象事業実施区域周辺の景観資源とした。

###### b) 主要な眺望点等からの景観

予測地点は、調査地点と同様の8地点とした。

##### ④ 予測対象時期

予測対象時期は、計画施設の建設が完了する時期とした。

##### ⑤ 予測方法

###### a) 景観資源への影響

景観資源の状況と計画施設との距離から定性的に予測した。

###### b) 主要な眺望点等からの景観

計画施設の出現による眺望景観の変化をフォトモンタージュにより予測した。計画施設については、「廃棄物処理施設整備基本計画」において想定している結果を用いることとした。

#### (2) 予測結果

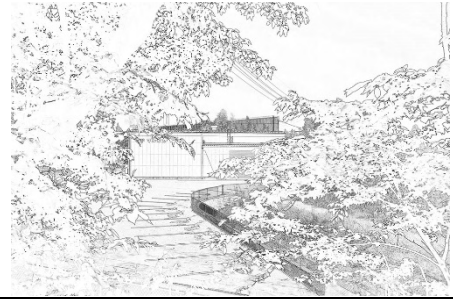
##### ① 景観資源への影響

対象事業実施区域から最も近い景観資源は約0.7km離れたところに位置しており、本事業によって対象事業実施区域周辺の景観資源は改変されないことから、本事業によるこれらの景観資源への影響はないと予測する。

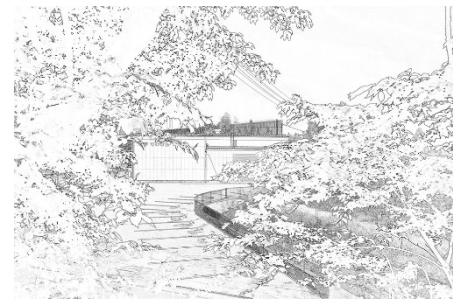
##### ② 主要な眺望点等からの景観

予測地点からの景観の変化の状況は、図 8.12.3(1)～(16)に示すとおりである。

現 況



将 来

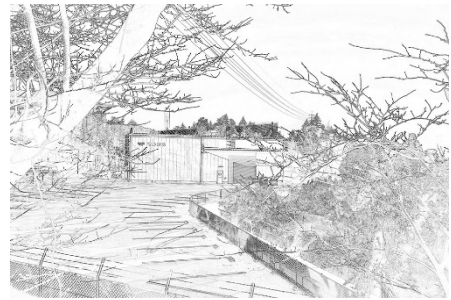


計画施設は、手前にある事業所に遮られ、視認されない。  
現況では、事業所や駐車場、樹木が主な景観構成要素となっており、樹木の間から見える事業所越しに現施設の煙突の一部が視認される。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。

図 8.12.3(1) 予測地点からの景観の変化の状況（地点1 黄金堤：着葉季）



現 況



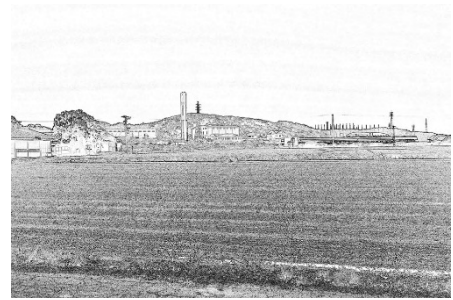
将 来



計画施設は、手前にある事業所に遮られ、視認されない。  
現況では、事業所や駐車場、樹木が主な景観構成要素となっており、事業所越しに現施設の煙突の一部が視認される。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。  
なお、着葉季から落葉樹の葉が落ちたことで現施設の煙突の一部がよく見えるようになった。また、草地及び樹林の色彩に変化があるものの、着葉季同様の眺望景観を形成するものと予測する。

図 8.12.3(2) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点1 黄金堤：落葉季)

現 況



将 来



河川堤防越しに計画施設が視認される。  
現況では、耕作地や現施設の建屋及び煙突が主な景観構成要素となっている。  
将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現する。煙突の高さは現施設よりも低くなるものの、建屋は大きく見えることから、景観の変化が生じるものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

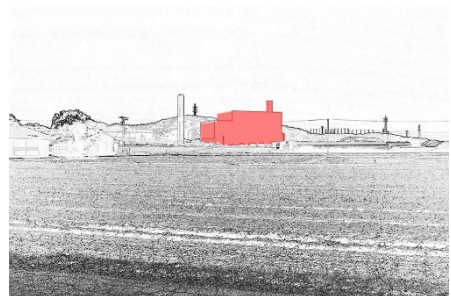
図 8.12.3(3) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点2 慶昌寺: 着葉季)



現 況



将 来



河川堤防越しに計画施設が視認される。  
現況では、耕作地や現施設の建屋及び煙突が主な景観構成要素となっている。  
将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現する。煙突の高さは現施設よりも低くなるものの、建屋は大きく見えることから、景観の変化が生じるものと予測する。  
なお、着葉季から耕作地や河川植生の色彩に変化があるものの、同様の眺望景観を形成するものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

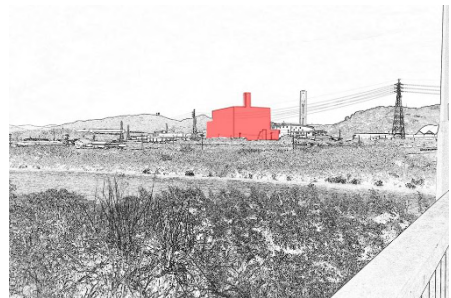
図 8.12.3(4) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点2 慶昌寺: 落葉季)



現 況



将 来



樹林越しに計画施設が視認される。

現況では、矢作古川や河川植生が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の建屋及び煙突が視認される。

将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現する。煙突の高さは現施設よりも低くなるものの、建屋は大きく見えることから、景観の変化が生じるものと予測する。

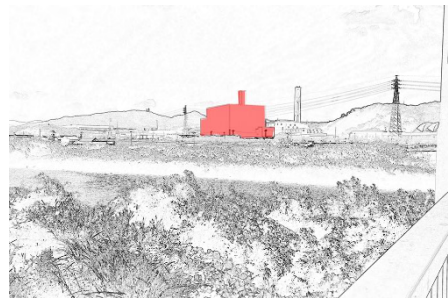
注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(5) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点3 宅野島橋歩道橋: 着葉季)

現 況



将 来



樹林越しに計画施設が視認される。

現況では、矢作古川や河川植生が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の建屋及び煙突が視認される。

将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現する。煙突の高さは現施設よりも低くなるものの、建屋は大きく見えることから、景観の変化が生じるものと予測する。

なお、着葉季から河川植生等の色彩に変化があるものの、同様の眺望景観を形成するものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(6) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点3 宅野島橋歩道橋: 落葉季)



現 況



将 来



計画施設は、対象事業実施区域南側の丘陵及び樹林に遮られ、視認されない。  
現況では、樹林や住宅が主な景観構成要素となっており、現施設の建屋及び煙突は視認されない。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。

図 8.12.3(7) 予測地点からの景観の変化の状況（地点4 岡山集落センター：着葉季）



現 況



将 来



計画施設は、対象事業実施区域南側の丘陵及び樹林に遮られ、視認されない。  
現況では、樹林や住宅が主な景観構成要素となっており、現施設の建屋及び煙突は視認されない。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。  
なお、着葉季から樹林等の色彩や落葉樹の葉の有無に変化があるものの、同様の眺望景観を形成するものと予測する。

図 8.12.3(8) 予測地点からの景観の変化の状況（地点4 岡山集落センター：落葉季）



現 況



将 来



樹木越しに計画施設が視認される。

現況では、草地や神明社の社寺林等樹木、道路が主な景観構成要素となっており、事業所越しに現施設の煙突の一部が視認される。

将来は、樹木越しに計画施設の建屋及び煙突が出現するものの、景観構成要素は大きく変化しないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

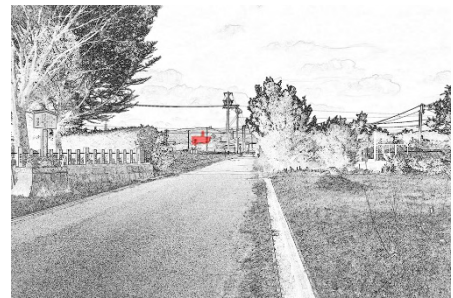
図 8.12.3(9) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点5 神明社: 着葉季)



現 況



将 来



樹木越しに計画施設が視認される。

現況では、草地や神明社の社寺林等樹木、道路が主な景観構成要素となっており、事業所越しに現施設の煙突の一部が視認される。

将来は、樹木越しに計画施設の建屋及び煙突が出現するものの、景観構成要素は大きく変化しないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

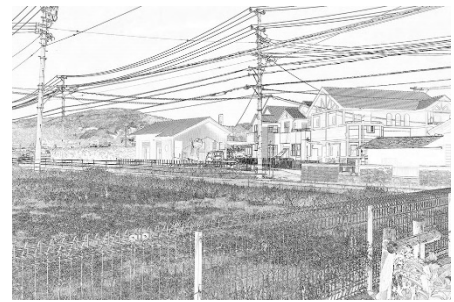
なお、着葉季から草地の緑の濃さや落葉樹の葉の有無に変化があるものの同様の眺望景観を形成するものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(10) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点5 神明社: 落葉季)



現 況



将 来

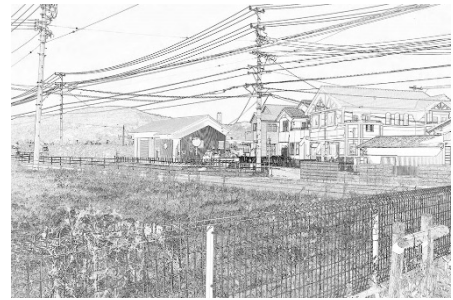


計画施設は、対象事業実施区域南側の丘陵及び樹林に遮られ、視認されない。  
現況では、草地や住宅が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の煙突の一部が視認される。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。

図 8.12.3(11) 予測地点からの景観の変化の状況  
(地点6 特別養護老人ホームレジデンス寺嶋：着葉季)



現 況



将 来

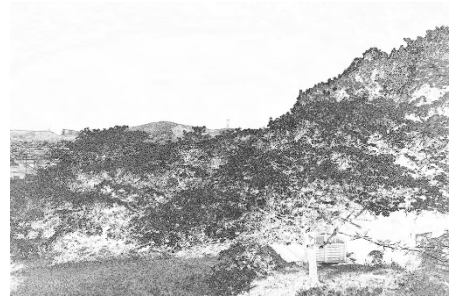


計画施設は、対象事業実施区域南側の丘陵及び樹林に遮られ、視認されない。  
現況では、草地や住宅が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の煙突の一部が視認される。  
将来は、計画施設は視認されないことから、景観の変化は見られないものと予測する。  
なお、着葉季から草地や樹林の色彩に変化があるものの同様の眺望景観を形成するものと予測する。

図 8.12.3(12) 予測地点からの景観の変化の状況  
(地点6 特別養護老人ホームレジデンス寺嶋：落葉季)



現 況



将 来



対象事業実施区域南側の樹林越しに、計画施設の煙突頂部の一部が視認される。  
現況では、公園内の草地及び樹林が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の煙突の一部が視認される。  
将来は、計画施設の煙突頂部の一部が視認されるものの、現施設と比べて煙突の高さは低い。また、景観構成要素に大きな変化は見られないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(13) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点7 東条城跡：着葉季)



現 況



将 来



対象事業実施区域南側の樹林越しに、計画施設の煙突頂部の一部が視認される。

現況では、公園内の草地及び樹林や住宅地が主な景観構成要素となっており、樹林越しに現施設の煙突の一部が視認される。

将来は、計画施設の煙突頂部の一部が視認されるものの、現施設と比べて煙突の高さは低い。また、景観構成要素に大きな変化は見られないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

なお、着葉季から草地及び樹林の色彩に変化があるほか、落葉樹の葉が落ちたことで、対象事業実施区域南側の市街地を広く視認することができ、着葉季とは異なる眺望景観を形成するものと予測する。

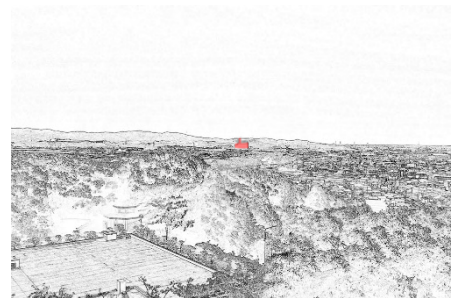
注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(14) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点7 東条城跡：落葉季)

現 況



将 来



市街地越しに計画施設が視認される。

現況では、公園内の樹林及び建屋や市街地が主な景観構成要素となっており、市街地越しに現施設の建屋及び煙突が視認される。

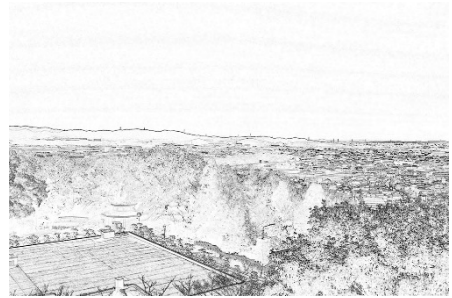
将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現するものの景観構成要素は大きく変化しないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(15) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点8 八ツ面山: 着葉季)



現 況



将 来



市街地越しに計画施設が視認される。

現況では、公園内の樹林及び建屋や市街地が主な景観構成要素となっており、市街地越しに現施設の建屋及び煙突が視認される。

将来は、現施設の手前に計画施設の建屋及び煙突が出現するものの景観構成要素は大きく変化しないことから、景観の変化は小さいものと予測する。

なお、着葉季から公園内の樹林等の色彩に変化があるものの、同様の眺望景観を形成するものと予測する。

注) 将来の計画施設の色彩や形状等については、現時点でのイメージである。

図 8.12.3(16) 予測地点からの景観の変化の状況 (地点8 八ツ面山: 落葉季)



### 8.12.3 評価

#### 8.12.3.1 評価方法

(1) 環境影響の回避・低減に係る評価

環境影響が、事業者により実行可能な範囲内でできる限り回避・低減されているかどうかについて評価した。

#### 8.12.3.2 環境保全措置

事業計画の策定時における環境配慮事項のうち、予測に反映されている環境配慮事項は以下のとおりである。

- ・周辺地域との調和を図るよう、建築物の色調、デザイン等について検討する。

また、施設の存在において、環境影響を実行可能な範囲内でできる限り回避・低減するために実施する環境保全措置は、表 8.12.6 に示すとおりである。

表 8.12.6 環境保全措置（施設の存在）

環境保全に関する措置	事業主体	効果及び措置による環境の変化	不確実性の程度	措置に伴い生ずるおそれのある影響
圧迫感を低減するため、可能な限り建築物を小さくする。	事業者	景観への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
建築物は、大きな壁面の分節化や彩度の落ち着いた色彩等に配慮する。	事業者	景観への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
対象事業実施区域の周縁部には可能な限り高木による植栽とする。	事業者	景観への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。
建築物は、可能な限り敷地境界からの距離を設ける。	事業者	景観への影響の低減が期待できる。	小さいと考える。	特になし。

#### 8.12.3.3 評価結果

(1) 景観資源への影響

対象事業実施区域周辺の景観資源については、本事業によって改変されるものはなく、影響はないと判断することから景観に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られているものと評価する。

(2) 主要な眺望点等からの景観

計画施設の存在により、視点によっては景観に変化が生じると予測するが、外観、形状、色彩等について周辺景観との調和及び圧迫感の低減に努めていると判断する。さらに、環境保全措置を実施することから景観に係る環境影響が、事業者の実行可能な範囲内でできる限り回避・低減が図られているものと評価する。